

人と自然

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター紀要

第1号 2010年度



MOMOFUKU
ANDO
CENTER

安藤百福記念
自然体験活動指導者養成センター

目次

巻頭言	安藤 宏基	4
安藤百福センター竣工記念式典		5
安藤百福センターのこれから	岡島 成行	6
日本のアウトドアマーケットの展望	中村 達	11
特集1 アウトドアフォーラム及び国際アウトドアシンポジウム		16
11月5日(金) アウトドアフォーラム「日本のアウトドアズを再考する」		
「日本の自然体験とアウトドアズの状況」	岡島 成行	18
「火山と自然体験」	荒牧 重雄	21
「観光立国と自然環境・スポーツを活用した観光地域活性化」	坪田 知広	25
「生涯スポーツにおけるアウトドアアクティビティ」	藤原 一成	28
「スキーの現状と将来」	奥田 英二	31
「様変わりする登山の現況」	磯野 剛太	34
「自然体験旅行(アドベンチャートラベル)の可能性と課題」	佐藤 博康	37
「アウトドアマーケットを考察する」	中村 達	40
11月6日(土) 国際シンポジウム「米国の事例に学ぶ日本の自然体験活動の課題」		43
記念講演「アメリカの自然学校から」	ジャック・シエア	43
コメント「自然学校の資金集め」	ロレーン・ワイコフ	51
パネルディスカッション		53
パネリスト：大西かおり、佐藤初雄、下村善量、節田重節		
司会：岡島成行		
特集2 環境思想シンポジウム「環境思想の現代的意味を問う」		66
3月28日(月)		
第1部 基調報告		
「欧米の環境思想」	加藤尚武 (京都大学名誉教授)	67
「儒教と環境思想」	佐久間正 (長崎大学環境科学部学部長)	73
「現代の環境倫理」	鬼頭秀一 (東京大学教授)	81
「江戸の環境思想」	関 智子 (青森大学大学院准教授)	91
第2部 ディスカッション		98
「環境思想の現代的意味を問う」		
上記4名によるディスカッション及びフロアとの質疑応答		
特集3 新たな指導者制度について		116
「新たな指導者制度の展望」	佐藤初雄	116
「安心安全な体験活動のために」	進藤哲也	119

事業報告		123
安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター 運営組織		124
2010年度自主開催事業・講座		125
2010年5月～2011年3月 利用状況		126
CONE利用者内訳、CONE以外の利用者内訳		128
第1回CONEトレーナー1種養成会		129
ネイチャーゲームリーダー養成研修トライアル		130
第1回CONE専門研修会		131
CONEリスクマネジャー研修会		132
CONEトレーナーフォーラム		133
合同職員研修		134
自然学校指導者養成講座		135
企業人のための野外活動入門講座		139
RACトレーナー研修会		140
第3回CONE専門研修会		141
登録インタープリター2010年事業評価会		142
CONEトレーナー1種認定会		143
第1回 自然体験入門講座		144
第1回 市民公開講座		146
周辺住民の方々をご招待した見学会		147
環境公開講座		
10月18日「自然の中でヒトになる」	清水 国明	148
10月19日「環境倫理とは何か」	加藤 尚武	149
10月20日「地球環境保全と健康」	今井 通子	150
第2回 自然体験入門講座		151
11月14日(日)「雪山歩き」	米川 正利	151
第3回自然体験入門講座		152
2011年2月5日(土)「冬でも楽しめる自然体験」	小林 政明	152
あとがき		153

巻頭言

自然体験の指導者養成に貢献する



3月11日の東日本大震災により、被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

多くの尊い命が失われ、今なお不自由な避難生活を送られている方々が数多くおられることに心が痛むばかりです。一日も早い復興をお祈りいたします。

日清食品創業者 安藤百福（1910～2007）は、「食とスポーツは健康を支える両輪である」という理念の下に、1983年、安藤スポーツ・食文化振興財団を創設し、子どもたちの健全育成を願って、その半生をスポーツ振興と食文化の発展に尽くしました。とくに「自然とのふれあいが、子どもたちの創造力を豊かにする」という考えのもとに、長年にわたり自然体験活動の奨励と支援に努めてきました。

自然体験は、全ての教育の基礎であり、活発な身体活動、仲間とのコミュニケーション、好奇心や興味、不便な中での創意・工夫・発見などを通じて「生きていくことの喜び」を体感できる活動です。自然体験活動を経験することが、子どもたちの成長に確実に良い影響を与えるという調査報告がある一方で、近年、自然体験に参加する子どもたちが減少していることが残念でなりません。

昨年5月、安藤百福の遺志を継承するため、生誕百年記念事業として「安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター（略称：安藤百福センター）」を長野県小諸市に設立しました。安藤百福センターは、自然体験を子どもたちに教える「指導者を育てる上級指導者」養成と、指導カリキュラムの研究・開発を目的とした日本初の専門施設です。全国の自然体験活動の指導者を目指す方々には、その資格取得に向けて、是非とも安藤百福センターをご利用いただき、将来の日本を支える子どもたちの健全な育成と、日本における自然体験活動の普及に向けて、お力を発揮していただけるよう期待しています。

財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団
理事長 安藤 宏基

安藤百福センター竣工記念式典

2010年5月21日（金）、「安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター」の竣工式典が行われました。河村建夫 衆議院議員（自然体験活動推進議員連盟 顧問）、文部科学省スポーツ・青少年局 布村幸彦局長、長野県 村井仁知事、地元小諸市芹澤勤市長ら 150名の来賓をお迎えし、盛大に執り行われました。



安藤財団 安藤宏基理事長より、「安藤百福センターは、日清食品の創業者であり、安藤財団創設者である安藤百福の生誕百年記念事業として、設立した日本初の自然体験活動の指導者養成する専門施設です。今後 10年間で、上級指導者を 3,300人養成する計画です」との挨拶がありました。安藤百福センターでは、上級指導者養成事業のほか、初級・中級指導者養成や大学、大学院との提携、企

業研修、指導カリキュラム研究、自然体験の基盤となる環境思想の研究などにも取り組み、わが国を代表する自然体験活動の研修・研究センターとなることを目指しています。

安藤百福センターの敷地は 37,200 m²あり、地上 2階、地下 1階の約 2,000 m²の建物には 40名収容の宿泊室と最大 200名収容のカンファレンスホール、図書室、食堂、浴室などがあります。



安藤百福センターのこれから

岡島 成行

まえがき

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター(以下、安藤百福センターとする)の社会的使命について述べたいと思う。安藤百福センターの使命を理解するためにはその背景の理解が必要だが、これまで体系的に説明がなかったため、外部の方々に理解しにくい面があった。その点を解消するため、ここに要点をまとめておきたい。

自然体験活動の意味

自然体験活動は 1996 年、文部科学省が使い始めた言葉である。それまでは野外教育、環境教育、冒険教育など様々な言葉が使われ、様々なジャンルが平行して存在していた。

1980 年まではそれぞれの活動が独立的に存在していたが、徐々に連携した活動が始まり、2000 年には野外教育団体、青少年団体、自然教育・環境教育団体、自然学校などが一同に集まり、自然体験活動推進協議会 (CONE) が設立された。CONE には 2011 年現在、約 280 団体が加盟している。こうした流れを受けて、わが国ではアウトドア活動一般や外遊びといわれるものや野外料理や昔話などをも自然体験活動の一分野としている。自然体験活動とは、野球、サッカー、ラグビーなどのスポーツを除く「外での遊びごと」の総称として考えてよいだろう。また、文部省の報告書『青少年の野外教育の充実について 1966』では「自然の中で、自然を利用して行われる各種活動であり、具体的には、キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動である」と定義されている。

さて、外での遊びごとだが、青少年の教育には欠かせない。虫や植物と接することで生き物の死を知り、命の大切さに気付き、痛みを知り、友情を育み、直観力を養い、瞬間的な判断力をも養う。学校では知識を教わるが、知恵の類のものは教わらない。知識の積み重ねも大事だが、同時にこうした知恵、人間力のようなものも人が成長するためには不可欠である。

2011 年 4 月に開かれた中央教育審議会では、震災直後のトップレベルの人たちの判断力に疑問が投げかけられ、「知識偏重の教育の在り方に欠陥があるのではないか」という指摘がなされた。小さいときからの野山で群れて遊ぶことができたら、ずいぶん違った結果になったのではないかと私も思う。

一方、環境教育の立場からは、自然との接触がない人には環境問題を解決する力がないのではないか、と言われる。21 世紀における人類最大の懸案の一つである地球環境問題、とりわけ地球温暖化は深刻だ。こうした課題の改善策を考える第一歩は事実を知ること、伝えること、すなわち環境教育であることに疑いはない。その環境教育の基盤に自然体験がある。レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』によれば、特に幼い時に自然と接することにより、

人は豊かな感性を磨くことができるという。豊かな感性に育まれて初めて、伸びやかな知性が生まれる。自然に対する正当な理解、評価ができない人が環境問題を語っていてもそれは単なる知識であって、実際に行動する人にはなり得ない。自然を身体で分かっている人は地球の病気についても身体で感じ、最も大切な部分を指摘することができるのだろう。幼き時の自然体験は理屈抜きで自然の美しさや偉大さ、不思議さを身体で感じ取り、長く記憶にとどめることができる。その感性こそが環境教育の原点であり、核心なのだ。

こうしたことを考え合わせると、これから 21 世紀に生きる人々にとって、自然体験活動は教育上最も重要であることは明らかである。

変革期に入った我が国の自然体験活動

しかしながら、各種統計によると、我が国の自然体験活動は伸び悩んでいる。その原因は、誰でもが安く楽しく安全に自然体験ができる社会的システムが確立されていないことである。具体的には自然体験活動の施設が不足していること、指導者制度が確立していないこと、欧米からの輸入プログラムが未消化で日本人に適合したプログラムなどが確立していないことなどが挙げられる。我が国ではまだ、自然体験活動は単なる遊びであり、勉強の下位に置かれており、社会的認知が不十分であることも影響しているだろう。

こうした状況を打破しようと、1990 年以降、民間団体が中心となって指導者制度の統合や団体の再結集などを行ってきた。その結果、2000 年に自然体験活動推進協議会（CONE）が設立され、青少年団体、野外教育団体、環境教育団体、自然学校など様々な分野の市民団体の横のつながりができた。しかし各団体とも会員の数は依然として減少傾向にあり、将来への確たる見通しは立っていない。

一方、国立の自然体験施設は民主党の仕分け作業で「いらぬ」と言われ、また公立の自然体験施設は地方自治体の財政難のあおりを受けて次々と廃止されたり、指定管理者の手で運営されるようになった。

八方ふさぎの様相を見せている自然体験活動だが、2010 年から CONE と独立行政法人国立青少年教育振興機構が協調して新たな指導者制度を立ち上げることになり、2011 年 6 月、検討委員会が発足する。民間と国立の巨大組織とが協力してオールジャパンの指導者養成制度を確立しようという試みだ。青少年教育振興機構には 2011 年 4 月、自然体験活動を含む青少年の体験活動のための研究センターができた。さらには国公立の指定管理者制度が進み始めている。公立はすでに実施しているが、国立も指定管理者もしくは民間と合同の経営に向けて動きだしている。ここにきてようやく官民一緒に自然体験活動を推進していこうという機運が盛り上がってきた。

そこで一つ課題が生まれてくる。国公立の自然体験施設は学校の先生が順に赴任してくる。指導者は学校の先生であったが、指定管理になると指導者を民間が賄わなければならなくなる。問題は、民間の指導者が足りないことだ。国公立の施設は国立が 27 か所、公立が約 500 か所ある。そこに 10 人から 20 人の指導者が必要であるとすれば、5000 人から 10000 人という膨

大なプロの指導者が必要になる。

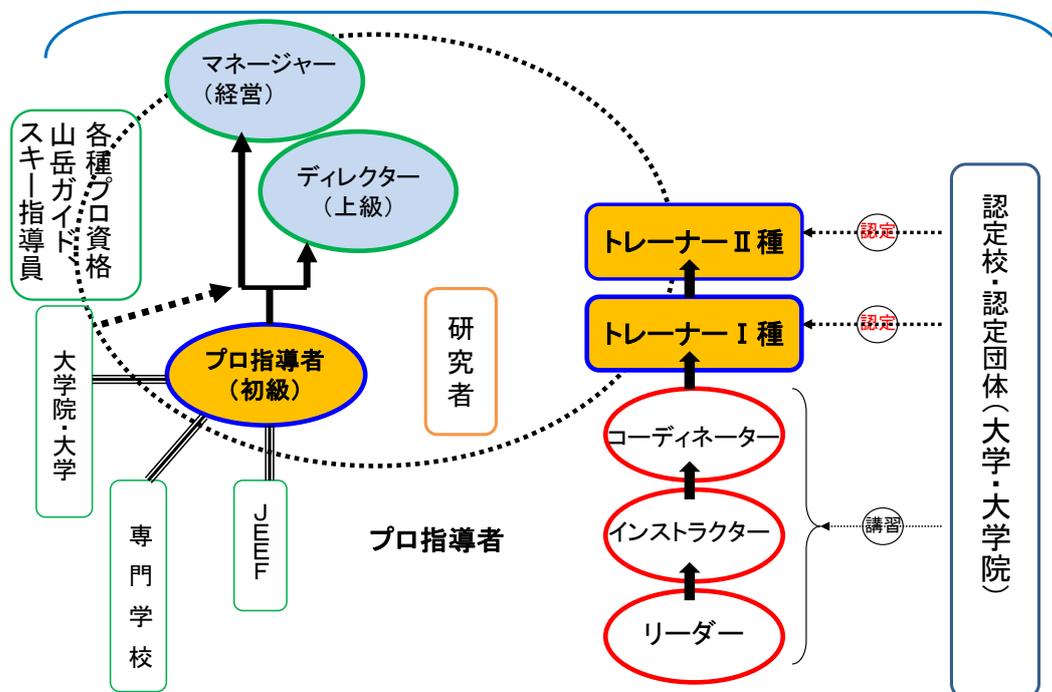
現在、公立の施設の指定管理者は泥縄式に人を集め、促成栽培のような指導者養成を行い、その場をしのいでいることが多い。指導内容は低下し、プログラムもおざなりになり、何よりも安全面が危惧される。指定管理を受ける民間団体、特に自然学校などにおいてプロ指導者の不足が目に見えている。

一方、スキーや山岳ガイドなどでも新たなカリキュラムを模索している。技能だけの身体能力中心の指導ではお客さんが満足しない。幅広い常識が必要であり、環境問題や生態学、歴史などの基礎的な知識がないと、お客の質問にもまともな返答ができない。それではせっかくのお客さんも逃げていこう。

プロ指導者の中でも中堅から上級になるに従って勉強しなければならないことが多くなるのだが、日常の指導の繰り返しで、発展性が感じられないプロ指導者も時に現れる。これでは組織が甘くなり、ひいては危険が忍びよることになる。中堅から上級者にかけての研修も必要であり、資格も考えなければならないだろう。現在はプロの初級の資格があるだけだが、これも上級の資格（ディレクター）、経営ができる資格（マネージャー）などを整備していく必要がある。

また、自然体験活動指導者は実際にフィールドで活躍する人だけではない。自然学校、自然体験施設の長となるマネージャーや大学や研究機関の研究者も自然体験活動のプロとして扱

図1 自然体験活動指導者制度の概要



CONEと教育機構の新制度

わなければならない。安藤百福センターでは、2011年3月にシンポジウムを開催し、全国から多くの研究者に集まっていた。こうした試みも我が国ではかつて行われたことがなかったが、今後必要になってくるだろう。

「ゆとり」や「癒し」が求められている時代に、自然体験活動は必ず必要なものとなってくるに違いない。しかし我が国では以上に述べたような社会的なシステムが未完成である。国家の役割、自治体の役割、民間の役割がそれぞれあるが、各自が全体の構図を理解し、自らの役割を見極めて新たなシステムを構築していかななくてはならない。後世からみて、2011年が大きな転換点であったと言われるようになりたいと思う。

安藤百福センターの役割

安藤百福センターは非常に特異な存在である。民間会社が支援して国全体を見据えた指導者養成を行うという事例は世界に例がない。文部科学省、環境省、財界、政治家などに問うても感心する声ばかりが跳ね返ってくる。

ではその社会的意味とは何だろう。

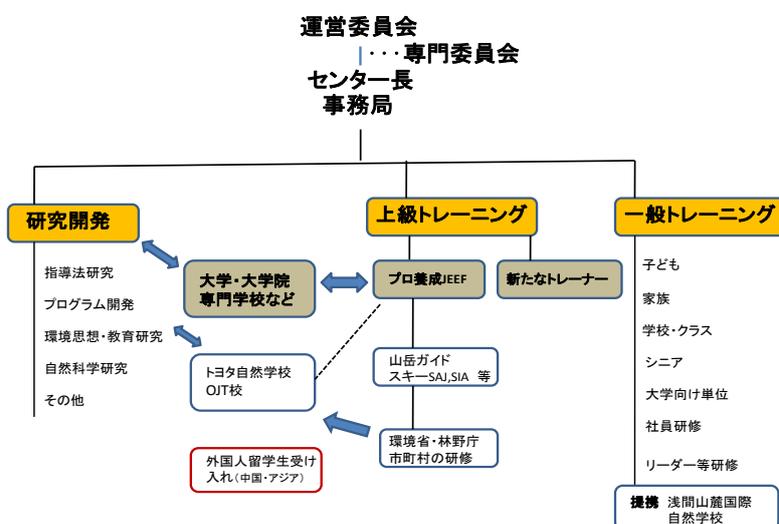
第一に指導者養成であり、中でも上級指導者の養成である。安藤スポーツ・食文化振興財団及び安藤百福センターではこれまでJEEFのプロ養成制度とCONEの上級指導者制度の改良及び両者の調整やカリキュラムの互換性などを整備してきた。そうした経験にのっとり、2010年度からCONEと青少年教育振興機構との間でさらに新たな指導者制度が検討され始めた。それによると、図1の中では丸い点線で結ばれたJEEFのプロ指導者とCONEと教育振興機構による新たな上級指導者、スキー指導員や山岳ガイドおよび研究者が上級指導者という範疇に入る。新たな指導者養成制度の改定作業は2011年度中に終了し、2012年度から施行される見込みだ。改定作業では、上級指導者の位置付けが再検討されるが、その中でも最もレベルの高い部分を安藤百福センターが担当することになるだろう。安藤百福センターは2010年から10年の間に3,300人の上級指導者を送り出す計画だが、安藤百福センターで養成した指導者の最終的な認定はCONEと青少年教育振興機構で作成中の新たな組織が行うことになる。

二つ目の使命は、研究である。自然体験活動に関する研究分野は環境教育、野外教育、青少年教育、体験教育、自然体験活動史、環境思想など既存の分野のほか指導者養成に関わる指導法、プログラム開発などの研究分野がある。安藤百福センターではこのうち、特に環境思想に力を入れていく方針である。地球環境問題はもはや科学的な技術革新や環境税のような経済的手段、さらには法的手段によるだけでは手に負えず、人々の生き方や哲学、思想と言った人文科学の助けを借りなければならない事態に入っている。すなわち地球環境問題の基本に新たな環境思想の構築がある。

一方、自然体験活動の分野でも日本の環境思想の整備が要求されている。欧米からの自然体験プログラムが日本で広まらないことや日本型のプログラムが不十分なことの原因は日本の環境思想が一般に認識されていないことにある。日本人の思想は古来自然とともにあり、現代の環境思想と一致する。しかしながら古くからの日本の思想は環境問題の出現以前のものでは

り、現代では過去のものとして取り扱われることが多い。こうした点をもう一度考え、日本思想を現代の環境思想的視点で読み直す作業が必要となってくる。そして日本の環境思想が再構築できれば、世界の環境思想をより充実させることが可能であり、同時に自然体験活動の基盤ができ、欧米のプログラムを受け入れ、改良できるようになる。さらには世界に通用する日本型自然体験プログラムができてくるだろう。環境思想の研究、特に「人と自然の関係」についての考察は様々な活動分野の基礎、基盤をより強固にするものなのである。

図2 安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センターの概要



上級トレーニングと研究開発のほかにもう一つ、一般向けの様々な活動も実践していく予定だ。子どもや家族のための自然学校の経営、大学向けの宿泊型授業の提供、社員教育、CONEリーダーなど初級中級指導者の養成、シニアむけプログラムの提供などを行っていく。自然学校の経営は大学の附属小学校のように研究成果を実践する場として運営する。

その他、大学、大学院との提携、トヨタ白川郷自然学校やプロ養成のOJT (on the job training) の受け入れ校との連携、中国をはじめアジア各国への支援などがある。

これらの活動を一度に実現することはできないが、時間をかけてじっくり育てていきたいと思う。

岡島 成行 (おかじま しげゆき)

公益社団法人日本環境教育フォーラム理事長、大妻女子大学教授、安藤百福センターセンター長、など

日本のアウトドアマーケットを考察する

中村 達

現在、この国のアウトドアは、東日本大震災の影響があるとはいえ、好況を継続している。その背景には人口の高齢化にともなう健康志向、地球環境に対する意識の向上と自然志向の高まりがある。それが「山ガール」、「富士登山」、「高尾山登山」などをブームに押し上げ、アウトドアが活況をみせている。また、減少傾向にあるとはいえ、中高年登山はアウトドアアクティビティの地位を不動のものにして、なおも健在である。さらに観光旅行も自然体感型のニーズが高くなるにつれ、冒険型旅行などのアウトドア指向が顕著になってきた。ただ、このアウトドア人気が一過性のブームとして終焉するのか、さらに、果たして子どもたちの自然体験活動に、波及していくのかどうかの道筋は、まだ見えていない。

ちなみに、昨年の国内アウトドアメーカーの出荷額（※1）は、およそ 1,440 億円と推計され、前年対比で 5.5% 上昇した。全スポーツ用品の中でトップの伸び率であった。

国土の 68% が山の国の自然体験

この国の国土のおよそ 68% が、山岳丘陵地帯が森林で覆われている。平野部や盆地は、田畑と住宅地、工場などが建ち、自然が残るのはごくわずかである。この地勢からアウトドア、つまり自然体験活動は、必然的に山か急峻な河川、あるいは海が主な舞台となる。中でも山岳地は、少なくなったとはいえ、植生が豊かで四季の変化も美しく、まだまだ自然を楽しむことができるフィールドである。里山からアルプスの雪山まで、世界でも類まれな多様性に富んだ、すばらしいアウトドアズのステージがある。

「あやしいオヤジを正しいオヤジにする研修会」というのが、日清食品グループの CSR のひとつとして行われている。定年退職後、何もすることがなくブラブラしては、何となく怪しく見られる。しかし、自然体験活動指導者の資格を取得し、地域社会で子どもたちに指導すればボランティアとしても評価され、怪しさも薄れるのではないかと。指導者資格として ID カードも交付されるので、会社の名刺に代わって身元も証明することができる。そんな効果を期待して、このプロジェクトがスタートした。

研修会は安藤百福センターで開催され、これまでにおよそ 100 名の自然体験活動リーダーが誕生した。3 日間で自然体験活動の理念、リスクマネジメント、指導法、基礎技術など、計 23 時間の濃密なカリキュラムが組まれている。研修を終えた参加者の感想文を読むと、講座のひとつである「黒斑山登山」が、毎回、ほぼ全員が一致して、いい体験が出来たと高評価である。感動や達成感、自己啓発、自分発見、自然のすばらしさ、健康などの文字が躍っている。せいぜい 2 千数百メートルの山で、2 時間もあれば頂上に立つことができる浅間の前山登山でも、研修生に大きな満足感を与えている。

森の中での研修も重要であり、教室での講義も必要だが、感動、協調性、達成感、自然を知るなど、自然体験活動に求められる多くのコンテンツは、「山に登る」という行為にうまく凝

縮されているといえる。

しかしながら、自然体験活動の中で登山は、プログラムの中心にはなっていないことが多い。また、指導者養成のカリキュラムにも登山活動は、さほど重きをおかれていないようだ。例えば里山や低山であっても、登山を指導するには、指導者はそれなりのトレーニングと長期間の経験が必要とされる。それがネックとなって人材の不足につながって、結果的に「自然体験活動」と「登山」を乖離させているように思われる。

巨大になった登山人口

昨年発表された「レジャー白書 2010」(※2)で登山人口が、前年のおよそ 600 万人からほぼ 2 倍の 1,230 万人となった。それをもって登山ブームといわれている。1,230 万人の登山人口といえば、赤ん坊や寝たきり老人などを差し引くと、少なく見積もって、10 人に一人以上が登山をしているという、おそらく世界でも有数の登山王国になる。

アウトドア人口 単位:万人	
ピクニック・ハイキング・野外散歩	3,690
登山	1,230
オートキャンプ	480
スキー	720
スノーボード	430
ジョギング・マラソン	2,550
釣り	1,050
国内観光旅行	6,390

ただ、「レジャー白書」で登山が大きく増えた理由として、調査方法がインターネットに変更されたこと。さらに、登山とハイキングの定義が明確ではないことなどが指摘される。

回答者自身の考えで自分の行為が、登山なのか、ハイキングなのかを選ばねばならない。例えば、ブームの高尾山は「高尾山登山」と呼ばれているし、登った経験のある回答者は、「登山」と答えるに違いない。本来、慣習的な定義でいけば、高尾山はハイキングのカテゴリーだろう。夏の富士登山も同様である。

また、「ピクニック・ハイキング・野外散歩」も、近郊の里山ハイキングから自宅近くの公園散歩まで幅広く、実態はつかみにくいものの、国民の健康志向が背景にあるのは容易に想像がつく。ただ、このデータのみをもって、アウトドア人口実態を捉えるのは難しいが、アウトドアマーケットの動向を考察するには、「レジャー白書」しかないのも事実である。いずれにせよ、登山、ハイキング、トレッキングはこの国のアウトドアアクティビティでは常に上位に入っており、マーケット特性も登山をコアに考察する必要がある。

自然体験活動の重要性が言われて久しいが、その普及と振興のためにはアウトドアズに特化した、アクティビティがしっかり定義された参加人口の調査が必要である。

その点、米国のデータ(※3)は細かくカテゴライズされている。バックパッキングとクライミングははっきり区分され、クライミングもアスレチック系のインドアと、岩や氷雪などを登攀の対象とする登山、さらには日帰りのハイキングなどに分類されている。もっとも参加人口の多く、裾野の広がり大きいのでこのような分類が可能となる。

また、米国のアウトドアズはハンティングが源流のひとつであり、減少傾向とはいえ参加人

口は、およそ 2,500 万人と多い。この点は重要である。米国にはハンティング用品の製造から発展してきた、伝統的なアウトドアメーカーも多い。

(米国のアウトドア人口) 単位：千人

Outdoor Participation by Activity	2010	
Backpacking Overnight	8,349	9.2%
Climbing (Sport/Indoor/ Boulder)	4,770	10.6%
Climbing (Traditional/Ice/ Mountaineering)	2,198	19.8%
Hiking (Day)	32,496	-0.2%
Hunting (Bow)	3,908	-7.5%
Hunting (Handgun)	2,709	19.0%
Hunting (Rifle)	10,150	-8.7%
Hunting (Shotgun)	8,062	-5.0%
Trail Running	5,136	6.3%
Wildlife Viewing	21,025	-1.2%

資料：OUTDOOR FOUNDATION

一方、ヨーロッパはアルプスの登山や、フライフィッシング、乗馬、サファリなどの冒険旅行や探検旅行、さらにサイクリングなどのアウトドアアクティが多いのが特徴である。登山用具から冒険や乗馬用品などの老舗メーカーが、各国に存在している。中でも登山用具は、世界的に著名なブランドが数多くある。



伝統と市場の大きさは、子ども用のギア開発まで及ぶ。仏、シャモニで。



学校を休んでバックパッキング。授業は親が、米、アパラチアントレイルで。

山ガールの登場とアウトドアマーケット

「山ガール」がブームである。登山は苦しいけれど頂上に立てば達成感がある。自由で、開放感があって、健康にもいい。そんな理由がブームの背景にある。これまで、中高年登山といえば、ファッションセンスがいまいちと揶揄されがちであったが、こと、山ガールに関しては、カラフルなセンスとレイヤードが注目されている。アウトドアアパレルをうまくコーディネートし、自分なりに山でお洒落を楽しんでいる。アウトドアファッション誌が数多く出版され、ここ数年でトレンドも大きく変化し、アウトドアマーケットを成長させる大きな要因となった。

また、山ガールの登場は、アウトドアファッションの流通チャンネルをも変化させようとしている。従来の登山専門店やアウトドアショップに加え、セレクトショップなどでも、よりファッション性の高いウェアやバックなどが販売されるようになり、アウトドアズはライフスタイル型へと変化する兆しである。ファッション業界からの新規参入も見られる。

山ガールの代表的なアイテムのひとつである「山スカート」は、昨年度対比で3倍というメーカーもあって、アウトドア業界は特需に沸いている。ちなみに、2010年のアウトドアウェアのメーカー出荷額は594億円で、前年度対比で105%であった。すべてのスポーツウェアの中で、伸び率はトップとなり、山ガールが大きく貢献したようだ。

ただ、注目の「山ガール」も登山やトレッキングの指導を受ける機会は少ないようだ。かつて登山は、学校や職域の山岳部や山岳会で指導してきたし、数多くあった「町の登山専門店」が情報の発信源となるなど、社会の中で登山を教えていく仕組みが存在していた。しかし、いま専門店でもアルバイトやパートの店員が多く、経験に裏打ちされた的確なアドバイスができているかどうかは疑問である。また、大半の用品はネットでも購入することができ、用具・用品が先行して、知識がついてきていないという現状がある。このままだと、山に慣れない「山ガール」が、事故に遭遇する危険性は高いと言われている。「山ガール」の事故が多発すれば、ブームは一気に収束に向かうであろう。

ともあれ「山ガール」の登場は、この国のアウトドアズに新風をもたらしている。やがて彼女たちが「山ママ」になって、子どもたちを登山に連れ出してくれれば、ライフスタイルとして根付いていく可能性もある。そのためにも「山ガール」を体系的に指導する方策を、早急に検討する必要がある。

自然体験活動をマーケットにするには、登山を避けて通れない

日本は富士講に代表されるように、登山は信仰を目的とした大衆のレジャーであった。明治になってヨーロッパからスポーツとしての登山が紹介され、学生の登山活動が盛んになり、やがて労働者階級にも広がっていった。

戦後になって、昭和31年に日本人が8000m峰のマナスルに初登頂し、一気に登山ブームが到来した。山は若者たちに、格好の遊び場を提供した。一方で、戦後の民主主義教育の一環として、教育キャンプが学校を中心に行われ、林間学校や臨海学校などが、隆盛をきわめた。この国では、登山はレジャーとして、キャンプは野外教育として発展してきたといえる。

唯一キャンプの流れを変えたのが、バブル経済崩壊後のオートキャンプブームだった。「安・近・短」というキーワードで、キャンプ用品マーケットは拡大した。それを見たある米国の有名アウトドアメーカーの社長が「日本のアウトドアズはバーベキューキャンプだ！」と私に語ったことが、印象深く残っている。その後、オートキャンプブームは収束したが、キャンプ用品は安価に手に入れることができる日常生活用品になった、という効用をもたらした。

日本のアウトドアマーケットは、登山やハイキングを中心にして成長してきた歴史がある。そして、登山で使われるアウトドア用品が、都市に下りてきて生活用品となった例も多い。フ

リースジャケット、デイパック、ダウンジャケット、アウトドアブーツなどは、日常生活の中でごく普通に使われるようになった。ファッションアイテム化したものが多い。大震災の後、非常用品としてヘッドランプや、スリーピングバックなどの需要も急増した。

マーケットがもつめる指導者とは

レジャーの登山と教育のキャンプでは目的が異なるので、別もの的な考え方が、結果として登山と自然体験活動（野外教育）との距離を、引き離したと思われる。自然体験活動の指導教本には、登山という項目があるものの、この業界には登山の専門家が少ない。その一方で、ツアー登山だけで、およそ9,000人のプロの山岳ガイドが、不足しているといわれている。

この国ではアウトドアアクティビティの参加人口の上位には、常に登山がある。現在、広い意味での自然体験活動の中で、プロとして職業的に確立されているのは、山岳ガイド（里山ガイドなども含む）や、山案内人といったものだろう。

自然体験活動の指導者を養成しても、雇用は学校の教員、あるいは公立の施設や一部の自然学校などのスタッフなどに限定されている。そのため専門学校などでは、プロの山岳ガイドの資格取得ができる学科の人気の高くなってきている。自然体験活動の指導者が不足しているといわれているものの、雇用に関しては需給バランスがとれていないマーケット構造になっている。また、自然体験活動はアウトドア用品用具市場としてのリソースは小さく、アウトドア業界の多くが参入しなかった経緯もある。自然体験活動の指導者は、ボランティアのアマチュアと考えられがちであるが、そもそもこの領域では、プロとアマチュアの境界は曖昧であり、線引きはさほど意味もない。

自然体験活動の大きな目的のひとつは、子どもたちに自然のすばらしさを教え、感動を与えることである。大の大人が日本百名山に歓喜したのは、連続する目標があったからだろう。子どもたちも同様で、自然体験活動でも目標が連続し、感動や達成感が連鎖していることが望まれる。

自然体験活動の指導者の養成は重要な作業だが、同時に需要も喚起する必要がある。「山」というコンテンツをしっかりと組み込んだ指導者の養成は、この分野の安定した雇用と市場の拡大のための、必要十分条件であると考えられる。

※ 1 矢野経済研究所「スポーツ用品市場に関する調査2011」

※ 2 日本生産性本部「レジャー白書2010」

※ 3 OUTDOOR FOUNDATION (USA)

中村 達 (なかむら とおる)

アウトドアジャーナリスト・プロデューサー、安藤百福センター副センター長、NPO法人アウトドアライフデザイン開発機構代表理事、日本アウトドアジャーナリスト協会代表委員など。

特集1 アウトドアフォーラム及び国際アウトドアシンポジウム

主催：NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構

共催：安藤百福センター

安藤百福センターでは2010年11月5日、6日の両日、アウトドアフォーラム「日本のアウトドアを再考する」と国際シンポジウム「米国の事例に学ぶ、日本の自然体験活動の課題」を開催した。「我が国のアウトドアをどのように発展させていくか」をテーマに内外の識者、専門家を結集し、質の高い議論を展開した。

アウトドアフォーラム「日本のアウトドアを再考する」

11月5日（金）

基調講演 「日本アウトドアの状況」

岡島 成行（大妻女子大学教授、安藤百福センター センター長など）

記念講演 「火山と自然体験」

荒牧 重雄（東京大学名誉教授、安藤百福センター顧問）

特別講演1 「観光立国と自然環境・スポーツを利用した観光地活性化について」

坪田 知広（観光庁ニューツーリズム推進官、スポーツ観光推進室長兼地域競争力強化支援室長）

特別講演2 「生涯スポーツにおけるアウトドアアクティビティ」

藤原 一成（文部科学省スポーツ・青少年局 生涯スポーツ課課長補佐）

講演1 「スキーの現状と将来」

奥田 英二（元岐阜大学教授、元全日本スキー連盟専門委員）

講演2 「様変わりする登山の現況」

磯野 剛太（山岳ガイド協会専務理事、安藤百福センター専門委員）

講演3 「自然体感旅行（アドベンチャートラベル）の可能性と課題」

佐藤 博康（松本大学教授、安藤百福センター専門委員）

講演4 「日本のアウトドアマーケットを考察する」

中村 達（NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構代表理事、安藤百福センター副センター長）

国際アウトドアシンポジウム

11月6日(土)

記念講演 「米国における自然体験活動と指導者養成の現状と課題」

ジャック・シェア (米国ワイオミング州グランド・ティートン・サイエンススクール校長)

コメント(自然学校のファウンド・レイジング)

ロレール・ワイコフ (グランド・ティーン・トーン自然学校資金担当)

シンポジウム「米国の事例に学ぶ、日本の自然体験活動の課題」

パネリスト 大西かおり (NPO 法人大杉谷自然学校理事長)

佐藤 初雄 (NPO 法人自然体験活動推進協議会代表理事、安藤百福センター
専門委員)

下村 善量 (独立行政法人国立青少年教育振興機構教育事業部長、安藤百福
センター専門委員)

節田 重節 (NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構会長、安藤百福セ
ンター専門委員長)

コーディネーター

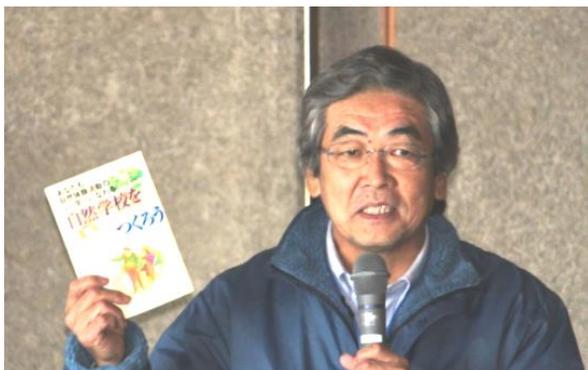
岡島 成行 (大妻女子大学教授、安藤百福センター センター長)

アウトドアフォーラム「日本のアウトドアズを再考する」 11月5日（金）

基調講演「日本の自然体験とアウトドアズの状況」

岡島 成行 安藤百福センター センター長

戦後 60 年を経て、社会の状況が大変に変化しております。にも関わらず、日本の社会システムはあまり変わっていない。明治維新から 140 年、日中戦争後から 63 年はかなり長いスパンで、そろそろ日本も変わるべき時期ではないかと思っております。それから経済の高度成長、これで日本は一流国と言われるようになりましたが、日本人はうんと働いた。サザエさんの波平さん、マスオさんは、夕方には家に帰っています。それが高度成長によって我々は夜中まで働く、土曜も日曜も出て働く。それが当



たり前のような感じになって、地域社会や子供との接点などがなくなっている。携帯電話、地球環境問題、これはみんな 20 年ぐらい前から出てきたものですね。社会が非常に大きく変わっているということで、一言で言えば経済至上主義のところから、落ち着いた質の高い生活に変換する時期だろうと思います。大きく国を変えなきゃいけない。そういう時期に入ってきているのでしょう。

青少年には、今さまざまな問題が起こっています。無気力だとかですね、引きこもりだとか、不登校だとか、色々な課題がありますが、問題の根源にあるのは、地域の教育力の低下だと言われております。地域社会での疎外感などがあって、地域社会が子供を育てるといった雰囲気になんか欠けてしまっているところに大きな問題点があるのではないかと。学校と家庭だけでは、なかなか解決できない問題があります。学校と家庭、地域社会が、それぞれの役割を認識して、子供たちを育てていくという気持ちを持たないといけない。

子ども文化の継承

一方で子ども文化の継承がなされていない。今の子どもは覚えることが多すぎます。携帯電話の操作も覚えなければならない、コンピューターも小学校の頃からやる。テレビゲームにしても、何にしても、いろいろなことを覚えなくてはならない。そして忙しい。なおかつ、少子化になっている。一番の欠点は大人の口出しですね。大人が子供に対して、あれしろ、これしろというふうに指示し、ほうっておかれる子どもが少ない。

子ども文化というのは、大きい子と小さい子と一緒に遊んで遊ぶことです。一緒になって山に入る。大きい子が小さい子に教える、小さい子がまた大きくなって、また小さい子に教える。川での泳ぎ方、蜂の避け方、いろんなことを教わって、子どもたちだけで山に入って遊べる。そういう技術と文化が継承されてきたわけなんですけど、その継承が途切れてしまっ

いて、今の子どもたちは、子どもたちだけでは遊べない。

そして体力もものすごく落ちています。背はひょろひょろ伸びているんですけども筋力がない。転べば怪我をするという子も多くなってきています。学力低下が言われていますけれども、体力低下もかなり大きな課題ではないかと思えます。体験活動が全く低下している。子どもたちだけでは遊べない。そうなると、どうしても社会的な支援システムを作らないといけな

いのです。これが、安藤財団にこのセンターを作っていただいた理由でもあります。

海外の指導者制度

欧米の自然体験を考えますと、アメリカでは「アメリカの国民のためにアウトドア・アンド・レクリエーションを進展させるのだ」という考えのもとに膨大な投資をやってきました。国家が作った基盤整備の上に乗って、現在は260大学で指導者養成の学部がある。

フランスでは余暇センターがあり23,000か所の公立の自然学校で、アマチュアの指導者、学生や学校の先生が毎年、資格を取って参加していく。子どもにかかったお金は、年度末の確定申告で、所得によって返還されるということで、国家がかなりの負担をして子どもたちの自然体験を支援している。イギリスには、29の専門学校と11大学があります。これはプロ資格が取得できる。国家資格というものは2つあります。

欧米に共通しているのは、国家が基盤整備を行って、民間が活動する、というところ。わが国でもここ2~3年で、文部科学省もかなりしっかりした基盤整備を作ってくれると思いますので、期待したいと思っております。

日本では基盤システムは未成熟。指導者養成を行う大学、大学院は5カ所ぐらいしかありません。国家的な養成システムはありません。そしてマーケットが非常に小さい。アメリカでは、この指導者養成とか、国立公園や州立公園のレンジャーになる人とか、そういう方々が5,000人ぐらい毎年大学を卒業します。その人たちが就職できるマーケットがある、また、食糧、飲料、ファッション、運輸、観光、農家民宿、アウトドアグッズなど巨大なマーケットがあります。せめて、わが国のマーケットがあと2~3倍ほしい。これは投資の割には、大きな見返りが期待できる。国家の政策としては非常にいいのではないかなと考えております。

品格のある国をめざして

日本の特徴なのですが、国と県、市が青少年教育施設が作っております。国立で28ある。非常に立派な施設です。公立は500ほどある。これから施設の整理統合、指定管理者制度の進展があるでしょう。それがきちっと動けばそれなりの形になるかと思えます。自然、環境、芸術、国際交流、スポーツ、研究などの分野で青少年教育が盛んになることで、全国に何百とある施設を、生き返らせることはできないかと思っております。

体験活動の機会が増えれば、子どもたちの生きる力が育まれるでしょう。それから大人も経済一辺倒の世界から、ゆとりを持った考え方になるでしょう。日本人の考え方が変わる。戦後60年の曲がり角じゃないでしょうか。大きな船が、ぐるりと回っていくわけですから、時間

がかかるけれども、自然体験活動というのは、その回転を後押しするという役割を果たすことができるのではないかなと思います。

もう一つは、自然体験活動推進法というような、基本的な法律作ることが必要です。国民はすべからく豊かで安全な自然体験を享受する権利がある。それを、国、民間、個人が、それぞれ責任を分かちあって推進する。そのような形の基本法のようなものを、作っていただきたい。私たち関係者は今、必死に頑張っているところですが、まだまだ自然体験なんか遊びじゃないか、勉強の方が大事だと言わない人たちがたくさんおまして、前途多難ですが、勝負はこれからだと思います。

自然体験が普及して落ち着いた人が増えれば、品のある国になるではないか。これから先の日本は、こういう国を作っていったらどうでしょうか。これが私の提言でございます。

(一部抜粋)

記念講演 「火山と自然体験」

荒牧 重雄 東京大学名誉教授



大学にいる頃は火山一本槍、気象研究をやっていたんです。

火山と自然体験は1対1です。なぜか。火山を研究する学問ですよ、今実験室で火山を作るなんてできないですからね。ましてや難しい式を作って火山ができないものだから、実際山に上がらなくてはいけません。火山って、登りにくいんですよ、知っているでしょ？道がギザギザじゃなくて、直登しますしね。火山というのは面白くて、自然体験は100%火山ですよ。火山に親しむということは、最上の自然体験の一つじゃあ

りませんか、ちょっとその可能性を考えてください。

日本には火山環境が豊富にあります。そして面倒なことは、爆発なんですよ。非常に危険でそばに寄れない。だけど凄いですよ、1回でも火山の噴火を見たら、いっぺんではまってしまいます。

もっとも昔の文化を調べていくと、火山現象全体の理解ということで、これは地学全体、地球全体の興味へと当然発達していくわけなんです。実際に災害にあった浅間山なんて、230年前の日本の人口は1520万人。そういう時から悲惨な話がいっぱいあるわけですね。いかにその時、徳川幕府がお百姓さんを助けたのか、助けてなかったのか、なんて話になると、歴史、社会の話になるじゃないですか。そういうヒューマンドラマまでも生々しく喋れる。これは、リーダー、インタープリターの腕前一つです。

火山は災害もあるから、マイナスのこともあります。しかしながら恩恵もある。例えば、景観が美しい。また温泉も恩恵。それから地熱と土壌と鉱物資源。日本の地熱は、まだまだ利用していない。バランスシートを見ますと波及効果で50兆円ぐらい稼げるでしょう。

火山は日本にいっぱいあります。このうちの30ぐらいは、活動的といいますか、けっこう噴火しますが、浅間山もその一つです。全部で100ぐらい活火山というものがございます。国立公園のうち火山地域だと言えるのが21だから70%超えたところは火山地域だと言える。火山は重要だということですね。日本では地域的な好条件、たくさんの火山があるにも関わらず、生かされていないというように見えます。

外国は火山で観光

アメリカの本土は火山が無いと、みなさん思っているでしょ？オレゴン州だとか、ワシントン州だとか、カリフォルニア、ワイオミング、こういうところに火山が売りの国立公園というのは、けっこうあるんです。

ニュージーランドとオーストラリア、アメリカを含めた3国だけ飛びぬけて、ものすごく自然保護によろしい、環境保全にもよろしい、インタープリターの質がよろしいというのでびっくりしました。

日本は、日本人の私が見ていてもダメですね。自然保護の意識が低いと私には見える。僕が行っているのはイギリスとかヨーロッパですが。そういったことを踏まえて見ると、日本は国立公園の専従職員数が1名~2名、アメリカでは数十名から数百名というケタが違います。イエローストーンなんかは400人ぐらいいるんですよ。簡単に言うと、日本の国立公園は積極的経営をしていないように見えますね。

ハワイのキラウエア火山は、年間160万人訪れていて、滞在時間がけっこう長いんです。ハレアカラなんてあまり知らないでしょうけど、これは200万人来て、これは通過型に近いんですけど、全体で250人ぐらいの職員がいる。ポイントは、インタープリターは非常に多くて強くて、いろいろなことをやるように見えることと、それは4年生大学を卒業した人が非常に多いということ。もちろんボランティアもいる。

ここで申し上げたいポイントは、日本のインテリと西洋のインテリを比べると、日本は地学に関する基礎知識が違う。好奇心が弱い。これはインタープリテーションをはたで聞いているとそうですね。地学というのは、物理、化学、生物3種類の基礎的な知識の本に立っているのが地学なんですよ。

日本における自然インタープリテーションを見ていますと、動植物に偏っているように思います。日本は緑がしたたっているものだから、植生がうんとカバーされて、そこには虫や花なんかがいっぱいいて、目に付くのは分かるんですけど、地球の表面というのは全体で見ると、そんなに草や木は生えていない、砂漠に近いところがけっこう多いと思いますよ。そういうところは石なんです。それでポイントは、地学についてのインタープリターの質を高める必要があるのではないかと、私は思います。

火山における自然体験は、噴火を実地体験するのが最もよろしいこと。これはなかなかチャンスがない。今火山は爆発するから危ないから人を呼ぶなというようなネガティブな見方ではなくて、日本の世界に誇る科学技術を使って、火山に肉迫して実際に触ってみる。そういう方向でやると、非常に面白い可能性というのが拓けてくると思います。噴火体験のチャンスはそれだけでは少なく、危険だよと言っているけれども、それにしても体験のチャンスはあるわけです。

もう一つ言いたいことは、火山を見ていると、結局どこまでいくかということ、宇宙で始まったということになりますね。山のとっぺん行って、座り込んでご飯を食べるときに、こういうことを話せると、子どもさんなんかは、こういう議論は学習できると思います。

溶岩が流れてきたらどうする、軽石がなんやかんや。こういうものが、実際の噴火でどのようにできたのか、本当はここがインタープリターの腕の見せ所だと思います。そういうところをやっていくと、子どもなんかは目を輝かせて面白いと言ったりしています。

イエローストーンのインタープリター

9月にイエローストーンへ行って来ました。ご存知かもしれませんが、イエローストーンというのはアメリカ人の誇りなんですね。なぜかという、世界で一番最初にできた国立公園ですし、アメリカの中で一番メンテナンスをされている、優遇されているんです。非常に素晴らしい自然だから、それを子孫に伝えるために、国立公園にしようというように至ったという話があります。

玄関口にいきなりスーパーボルケーノと書いてあるんですね。イエローストーンなんて何も火山なんかありゃしない。しかし超巨大噴火があったことが分かってきた。これは数十万年に1回とかというので、けっこう噴火しているんです。けどそういう巨大な噴火があったんです。イエローストーンの正体ですね。国立公園全体が、実はスーパーカルデラだったということが分かった。それを売りにしているわけですね。

インタープリテーションは本当に素晴らしいものだと思います。日本でもインタープリテーションが盛んです。ところがはたで聞いていると、日本のインタープリテーションは私が見ていると、お客さんが黙って聞いていて、一言も質問しない。だからしょうがないから、インタープリターがますます喋らなくてはならなくて、へとへとになって、黙ってさよならっ帰ってしまう。ところが、アメリカのインタープリテーションを見ると、最初の5分間だけですね、レンジャーがコントロールできるのは、あとはみんながいろいろなことを質問したり、意見を言うんですよ。誰が主役か分からなくなってしまって、ワイワイワイワイ。そのインタラクティブなやり取りは素晴らしいと思いますね。

日本における自然体験というのは、感性的な面が強調されているのではないかと、疑っております。日本人は非常に感性が鋭いのはいいんですけど、自然を学ぶ楽しみということの意識が少ない。日本で学習なんて言うと、学習というのは、楽しいものではなく、苦しいものと思っている人が、どうも多んじゃないかなと。もっと自然学習というのを全面に出すべきだと思います。

面白いのは、火山も人の一生と比べると、けっこうアップ&ダウンがあるんです。浅間というのは時々ドンと音がして、振り返るとモクモクと黒い煙があがって、夕立の雨足のように、灰がぱーっと降っているの見えるというのは、当たり前のことでした。

疑似体験でもって、学習でもってということで、少なくともお客さんよりは、段違いに火山についての知識を持っていない限り、風評被害を大きく撥ね退けて、たくさんのお客さんを呼ぶということができないと思います。

地学を自然体験活動に

一方では、地震計とかいろいろ近代的な測定器を使うと、地球の内部、下の方ではマグマがどうやって上がってくるかというのが、地震の分布から分かるよという話もできます。溶岩が流れてくるというのは、粘性流体の重力を伴う力学でしょ。それから火山岩が飛んでくるのは、ニュートン力学の必然の力学ですよ。放物線で飛んでくる全然別の物理方式です。数学が好き

な子どもというのは、そっちで引っ張れば、興味を持つかもしれない。

火山作用を起こす原因というのは、いっぱいある。自然体験をしている途中、休憩している時、メシを食いながらでもいいですから、こういう話をちょくちょくすると、何%かの子どもは、こっちに引き込まれて興味を持つ子がいますね。いろいろなところで誘導することができるのも面白いポイントの一つです。絵を使って近代的な火山の知識をつけて説明していくと、だんだん子どもが引き込まれていく。もう少しついてくる大人に対しては、幕府はこういうバックアップをして、高級な役人を現地に派遣したりとかの政治経済の話もできるじゃないですか。いろいろ面白い。

インタープリターさんたちが頑張って、こういったものを咀嚼して、うまくいかにお客さんを引っ張りこむかというところで、面白いんじゃないかと思います。大変失礼ですけど、植物なんかはものすごく入りやすいんです。この葉っぱを見ると面白いでしょとか、こっちの木が互い違いに出ているとか、植物の分類にしては入りやすいんですよ。いろいろなことを言われて何がなんだか分からなくなって、学校の先生ですら嫌になってしまうんですけど、地学だとちょっと難しいから、なおさらやりにくいんですよ。それをなんとかいっぺんに言わずに分割すれば、面白いんです。

外人さんを見ていると、日本人ははるかに火山に対して興味がある人が多いんですよ。フランスから来た人に、あなたの国には火山なんてないじゃないか、なんで火山に興味を持つんだと聞くと、火山が無いから面白いんだなんて言う人もいます。

さて、私の結論は、非常に日本人は地学に弱いですね。火山は本当に面白いと思うんです。私が申し上げていることも、少しはポイントがあるんじゃないかなという気も一方ではしているものですから、その辺をご検討いただければありがたいと思います。

(一部抜粋)

特別講演 1. 「観光立国と自然環境・スポーツを活用した観光地域活性化について」

坪田 知広 ニュートゥーリズム推進官

スポーツ観光推進室長兼地域競争力強化支援室長

観光庁は2年前にできました。国が観光庁を作って頑張っただけで大々的にやろうとなつたきっかけは、得意としてきた産業が、新興国の追い上げなどがある、このままでは1番であられるはずがないという考えからです。周りを見回してみると、中国や韓国が元気になってきている。ヨーロッパを見ると、やはり観光で潤っている国というのは、多少景気が悪くなっても、フランスでもイタリアでも元気がある。そういうのを見ると、日本はあまりにも観光が立ち遅れていたのではないかと、そもそも日本はこのままでいくと、2050年にはガクンと1億を切るような人口になってしまう。しかも少子高齢化ということで、非常に人口構造的にもいびつ。そのうえ人口が減りながらも、いまだに東京に人が集まりつつあります。東京一人勝ちの状態である。このままでは、地方が疲弊してしまうということで、地域格差の拡大と日本全体がしぼんでいくことを懸念しているという2つの問題から、2年前に観光庁が立ち上がりました。



生活の質を上げるためにも、自然体験とか観光というものを大事にしていこう。いい歴史とか、文化的価値があるものがいっぱいあるのだから、これで日本の再活性にもなるんじゃないかということから、観光による日本の再生というものを目指してやっていこうというわけです。

我々がインバウンドと呼んでいる、外国から日本に観光に来てもらう勢いを増やしていこうという考えが今の計画になっています。約束してしまったのでやらなくてはいけないのですが、実は、今年の2010年をもって外国人観光客が1,000万にいかないと、目標が達成できないんです。

日本は、今外国人旅行者の受け入れが、中国や韓国より下にある。これだけポテンシャルがあるのに、なにもつたいないことをしているのか、と言われ続けてきました。

休暇改革

ある改革で賛否両論が出ているのが、休暇の改革です。実は自然体験で大事なものは、親と子が一緒に過ごす時間をどう増やすのか、あるいは地域の大人たちとどう接点を持って、時間を共有するしかないので、今はバラバラ。子どもは子どもで忙しい、大人は大人で忙しいという状況で、子どもと大人の接着する時間がない。もちろん一緒にいたって別々の部屋でゲームしたり、別のことをしている可能性もあるのですが、休暇を合わせるという努力をしないといけないと思います。我々は、労働界、経済界の協力も得て、あとは学校関係の協力も得てやっていこうというプロジェクトを作り、省庁横断的に今、チャレンジしているわけです。

スポーツ観光の推進

新しい観光分野として、ニューツーリズムという形で、推している分野でございます。それが、スポーツ観光というものと、衣料観光と、ファッション、食、映画、アニメと観光を掛け合わせているような状態で、ファッションが大きい。スポーツとファッション。スポーツ観光は、いろいろな方々に話を聞いていると、非常に可能性があると言ってくれています。我々も観る、する、支えるで、整理しているんですけど、最初は観るで考えていたんですね。プロ野球とかJリーグのホーム&アウェイの動きというのを、単に弾丸応援ツアーだけではなくて、ゆっくり周辺観光も楽しむような、そういう応援スタイルを考えたのです。

ところがスポーツの可能性というのは無限大で、マラソンは誰もが実感しているとおりで、ウォーキング、サイクリング、登山、トライアスロン、スキー、ゴルフ、草野球など枚挙にいとまがない。可能性があるし、インバウンドの力にもなるんじゃないかということで、スポーツを中心に考えています。スポーツと観光を掛け合わせて、地域を活性化し、日本経済を活性化しようとする発想です。

観光コンテンツとしては、中国人に代表されるように、まずは秋葉原でショッピングみたいなことや、日本の食を味わおうとか温泉。だんだん深まってくると、日本人が全般的に楽しんでいるような、リゾート、登山、山歩き、釣りというような、アウトドアにもどんどん動いていける余地はあるんじゃないでしょうか。

日本人がしているんだから、当然外国から来られた人にも、そういう環境とか情報を提供して、このマッチングをおこなうことが大事なんじゃないかと思います。そして、今の観光に必要なのは、ストーリーですね。ただの温泉、ただの文化財では1回で飽きられて二度と来ないと思います。それを連続で、周遊的に、または滞在日数を増やしてくるようなストーリーがなくてはいけない。やはりこのストーリーを作るためには、ただの文化財だけとか温泉だけじゃなくて、そこに、食もそうですし、スポーツやアウトドアアクティビティをかけ合わせることで、楽しみ方が複層的になるし、再訪したくなる。

スポーツの国際大会や世界のアウトドアの大会なども国も積極的に、文科省と観光庁が連携してやろうと思っています。

スポーツ観光を推進していくために一応連絡会議というものを設けて、スピード感を持ってやっているということで、予算要求につなげたりしていますが、やはり基本は規制緩和です。観光庁、文部科学省、経産省、外務省、総務省と一緒に、観光関係団体、スポーツ団体、スポーツ関連企業、広告代理店、放送局、旅行会社などとともに画期的な会議を今年5月に立ち上げて、4回の会議をおこなっています。

また、我々情報発信が大事で観光庁のサイトの中で、スポーツと観光の情報を一元化して発信しています。さらに、スポーツ観光相談窓口を設けております。スポーツ観光マイスターというのも任命しています。表彰状一枚の代金と、名刺を100枚お渡ししているんですが、この任命された人はミッションとして、義務として世界に出かけた時だけでなく記者会見とかの時に必ず観光のことを言わなくてはならない。日本って魅力があるのだから、そういうのを宣伝

しないといけない。

観光庁が来年一番力を入れようと思っているのが、実はスキー100周年でございます。自治体が頑張っていたり、もちろんスキー連盟も頑張っていたり、その他のいろいろな関係団体が頑張っていますけど。スキー、スノーボードを中心に、スノーリゾートですね。オールジャパンでやるためには、観光庁や環境行政機関も入って、大きな動きにしていこうということで、今いろいろな動きをしています。

観光庁も海外のプロモーションと組んで、世界に売っていくための協力をしようと、いろいろな動きを始めています。世界のマーケットの展示会などで、日本のスキー場とか、雪の魅力を発信しているところです。

国交省の巨大な予算からすると小さい予算なんですけど、早く成功事例を作って世の中に発信して、これがスポーツ観光なんだということを、世の中に見せるためのいわゆるコンテスト&コンサル&発信みたいな形でやっていきたいのです。民意が大事でございますので、みなさまのご支援をよろしくお願ひしたいと思ひます。

(一部抜粋)

特別講演 2. 「生涯スポーツにおけるアウトドアアクティビティ」

藤原 一成 文部科学省スポーツ・青少年局生涯スポーツ課課長補佐

過去一時期、平成の一桁からずっとやっていて、自然体験活動はかなりの勢いで広まったという認識が自分の中にもあります。

私は、今生涯スポーツというところで、ここを設置している百福先生に作っていただいた安藤スポーツ・食文化振興財団は、生涯スポーツ課の所管法人であります。生涯スポーツ課なのに、自然体験のことで何を話しに来るのかということになりますが、実は、生涯スポーツ課が本家本元なのです。野外活動を担当しているのは、生涯スポーツ課であります。あれは、スポーツです。教育ではないのです。教育だと思ってやっていたら、間違っていています。



文部科学省が、スポーツの実施率、すなわち成人、大人が週1回スポーツをする人の割合を、半分以上にしたい、50%以上にしたいという目標を10年前に立てているんです。まだ50%以上に達していないという数値が昨年出ました。その原因は20代、30代ですね。この層がスポーツをしていないのです。

野外教育から自然体験活動へ

教育の話をします。文部科学省ですから。スポーツは教育ではありません。スポーツになるのは教育の分野では体育です。そもそも生涯スポーツは教育ではありません。生涯学習で終わっています。

教育というのは、ジャンルは二つしかありません。幼稚園から大学院の課程までの学校という体験の中の学校教育です。学校教育以外の教育は、全て社会教育です。社会教育の中で自然体験活動を主に扱ってきたのは青少年教育です。青少年を対象とした、学校外の教育の部分でやっていました。ボーイスカウト、ガールスカウト、これは学校ではないですね。あるいは、国立青少年自然の家とかね。青少年教育施設なんです。少年自然の家、全国に国立も含めて、300以上あります。ここは学校外で自然体験を主に扱う場として設置されたものです。スポーツの方は、野外活動センターとかありますよね。少年自然の家とかは、社会教育のジャンルで設置が進んでいった方です。

自然体験活動について文部科学省は、野外教育と呼んでいた時期もありました。環境教育は、全く善の方向に向かっている。人類はそこを通過しないと、人類は減ってしまうよというぐらいの善の方向に導くだろう。今企業で環境教育ないしは、環境問題に対応する事柄をやっていない企業は珍しくなくなりました。意識として良い悪いは別としても、環境マインドは確実に上がっているのではないかと。少なくとも自然体験活動よりはマシでしょ？そう思いませんか？

学校教育基本法と自然体験活動

私は野外教育というものを担当していた時期がありました。自然体験活動は、法律に出てきます。平成 18 年に、教育基本法が本当に初めての改正をして、当時の関係者達は本当に苦労しました。この基本法の中に、それも第一条は教育の目的が書かれているんですね。その二条に目的があって、その次の目標というのが、それまでの教育基本法には、なかなか明確に示されていなかったんです。そういう反省を踏まえて、教育の目標というところがあって、その中に生命を尊び、自然を大切に、環境の保全に寄与する態度を養うこと。教育の憲法といわれる、教育基本法の第 2 条にきちんと明示されている。そして、その後を受けて学校教育法が改正されたのです。学校教育法という学校教育の中の根本的な法律です。この中にこういう言葉があります。学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神ならびに環境の保全に寄与する態度を養うこと。自然体験活動が、なんと学校教育法に出てきたんです。

しかし、これから学校教育に、自然体験活動をする時に、キャンプしましょう、キャンプファイヤーで騒ぎましょうといったって、そうはいかない。学校の授業で使える自然体験活動を作らないと、自然体験の明日はない。

自然体験活動は、もっともっと広まってもらわないと困る、というのは一つあります。自然体験活動を充実させる手立てというのは、ある意味今、学校教育の中と社会教育、青少年教育の中、それからスポーツの中を見た時に、国が振興するものというのは、意外と少ないのです。行政が考える手立てというのは、もう手詰まりの段階です。例えば、社会教育の分野の中で、そういうのを振興するために、小さい団体でも子どもたちに自然体験が提供できるように、いくらお金をださせるためじゃないですか、という議論が当然ある。もう作ってあるんですよ、子どもゆめ基金、青少年教育振興機構、作ってあるんです。総合的な学習の時間で、やろうと思えば学校教育の中でもやれて、今学校教育の世界の中でも、今コミュニティスクールであるとか、地域に根ざした学校を作りましょうという動きの中で、仕組み的にはできるような仕掛けが作られているんです。

何もやることがない。もうすでに、終わったという認識。行政が補助金をお出しして、野外活動センターとかというものは、ほぼ全都道府県に設置は完了しております。そして、それは補助金でありますから、あれは地方公共団体のおやりになりたいことに、国が一定の補助をただけなんです。しかし、国が補助金を出した有効年限は、とうに過ぎております。指導者、日本キャンプ協会、日本レクリエーション協会、十分昔から指導者養成をされています。自然体験活動ではなくて、野外教育活動の指導者は十分にいるという認識。であれば、足りないとするのであれば、足りない根拠を示してもらわないといけない。少なくとも、生涯スポーツの分野で野外活動の指導者は、今まで養成した指導者の数を足し上げていって、それが足りないかどうかというのは明らかになります。足りないというんだったら、証明してくださいということになる。質が低いといったら、何をもって高いのか、証明してみてください。これはね、僕が財務省に言われたことを、そのまま言っているんです。

何かネタください。もし野外活動を振興するというのが、本当にみなさんのそれぞれの場

で必要だということなのであれば、ネタください。青少年教育の分野も、学校教育の方もそうかもしれませんが。何をしたらいいんでしょうか？一緒に本当に考えて欲しいんです。僕らも考えてますけれども、もう補助金出して場を整備するにしても、国にお金が無いです。

子どもたちに力を与えるために

しかし、僕は絶対にやれるって信じてます。やれるじゃなくて、やんなくちゃ。今の日本のことを見てください。やらなきゃ、と思ってください。

ジョンレノンのイマジンの中で、戦争の無い世界を創造してごらんというフレーズがありますよね？自然体験型の環境教育、自然体験活動が無い世の中を想像してごらん。ぞっとしませんか。しかし、逆の意味で、子どもたちは、はっと思ったら、地域に本当にのびのびと遊べる遊び場があって、ちょっと行けば、週末とか、まとまった休みがあれば、すぐに近くの自然の中でいろんな体験ができる。ということであれば、ことさら法律でも、我々が自然体験が必要なんだと言うことはないわけです。逆にそういう世の中の方が、まっとうなのかもしれません。私はいつもそんなことを、言わなくても済むような、当たり前な世の中を作り、それを信じてやる営みが我々の義務であります。学校現場では学校の先生方の営みなんです、教育の営みなんです。

今自然体験活動というのは、日本の大企業にこういったものまで作っていただいて、ここまで展開できるところまで来ました。しかし、ここから先の一步を作るのが凄く大変なんです。日本の子どもたちに力を与えるためには、絶対に必要なことがらであるという、課題認識を私は持っております。みなさんと、共有できればなと思っております。それをこの場で喋るだけで、本当に私は、一日幸せでございました。どうもありがとうございました。

(一部抜粋)

講演1. 「スキーの現状と将来」

奥田 英二 元岐阜大学教授、元全日本スキー連盟専門委員

日本スキー発祥100年で、1911年、明治44年に初めてレルヒが高田に入って、スキー講習をやった。多くの競技団体というのは、競技から入ってくるのが多いですが、スキーに関しては一般の人達、軍人と、それからその家系の地域の人、こういった人たちを対象にしてスキーを使ったイベントということで、講習を行った。それを契機に、高田に信越スキークラブというのができました。そうした後、全国各地にクラブができた。クラブをもって日本スキー連盟は発達してきたというところに特徴がございました。



1950～60年代、この時分からスキーは多少専門の落ち着きができて、スキーヤーが少しずつ増えてきたと言えると思います。そして70年代、80年代の高度成長期に爆発的なスキー人口を迎えることになる。スキー場には機動力とも、1957年ごろに確か一般的になったリフトが、あっという間に各スキー場に増えてきました。それから、休日になるとバスを連ねた都会のスキーヤーのバスが、列を連ねてスキー場へ向かう。そして民宿も発達し、道もよくなってきます。また、地域の人達の冬の稼働

力、冬の活性化にも一躍を担った。当時、1,000万とか、1,500万人のスキー人口があつて、たいしたブームでした。しかし、これは所詮はバブルの崩壊と共に忘れ去られる。そして1990年代になりまして、やはり人の価値観はモノから人の心へと、そういった時代に入っていきます。そういった中で、スキーヤーというのは減少をたどっています。そのブーム時期のスキーヤーの一つの特徴というのは、技術オンリーでした。とにかくうまくなりたいという人達の趣向、本来は楽しいから面白いから、やるんじゃないかと思うのですが、スキーの場合は技術を身につけるために、そしてクラブに入って努力する。

スキーヤーの減少

90年になって、スキーヤーは減少という状態をたどりました。そして、スノーボードは、90年代に急激に増えたスノースポーツです。それも2006年あたりで、大きな底になりまして、多少そこから増加の傾向をたどっております。この時期ぐつと熟年スキーヤーが増えて参ります。段階の世代の方々は、ちょうど若い時にスキー熱中時代を過ごした人が多いんですね。そういう人たちが戻ってきてくれた。それがこの2～3年のSAJの現状を申し上げますと、今の全国の会員数が、10万人強です。これは登録会員です。

現在登録指導者数は、46,839人です。クラブ数も少し増えつつある状態です。全国で5,739クラブですが、これも全国各地にクラブ形態があるということです。スキー場が増えるという

ことはまずありませんが、淘汰されているスキー場、合併すると一緒になるスキー場など、増えたり減ったりしていますが、スキー学校は310校。経営母体が非常に多岐でして、かつてほとんどクラブ経営でした。それが現在、個人、会社、地区連盟とかNPO、公共団体というのに分かれています。

スキー連盟が一般スキーヤーに呼応して、一つの指導法が確立する中で、何回言ってもやはり忘れてはならないのが、スキーの魅力、面白さを伝えていくこと。またスキーでなくてはならない一つの特色がある楽しみというのがある。

晴れた日に、雪の原野を走り、歩く。そして野山をふもとへめがけて滑走する、そのときの爽快感。そういったものは何にもまして、楽しいものである。我々はスキーと、そして自然と渾然として一つになってしまうのである。これはただ体を鍛えるばかりではなく、心をも養い高めるものであり、国民にとっても多くの人々が漠然と予感しているよりも、一層深い意義をもっているのです。スピードも伴うので、爽快感がある。不安定な中での安定というのは、非常に心地いい。まさにスキーの感覚だろうと思います。そういったものもいかに一般の人達に発信していくかというのも、我々の使命なんです。

スキーの楽しさを子どもたちに伝える

時代が変わり、スキーを取り巻く環境もすごく変わってきました。人々の価値観というものがモノから心へと変わってきました。今までは、指導者は情報収集するだけでよかったが、これからはスキーヤーのニーズに即した知識発信とか、相互が情報交換しなければ、信頼できる学習場面が作れないわけです。そういった相互発信、相互のコミュニケーションを大切にしていこうという状態が求められます。スノースポーツというのは、非常に多様化しました。歩くテレマーク、テレマークはスキーの原点ですよ。歩く、走る、滑る、飛ぶ。全てテレマークが原点かと思いますが、バックカントリーとクロスカントリーの人達も増えてきました。1995年あたりから、スキー板が想像を絶する画期的な進化を遂げました。

もう一つは、年齢層の多様化。60歳以上のサードエイジのスキーヤーが最近増えてまいりました。それに対して、子供たちがとても少ない。提案としては、まず一つは雪に触れる機会の提供です。スノースポーツの楽しさを、冬期における野外活動の原点を知らせる。そして、感動体験の提供をしていく。指導者に対しましては、雪が好きという純粋な気持ちから目指した指導者に育てる。スキーの楽しさを、社会へのメッセージとして発信していく。「I LOVE SNOW」という純粋にわくわく、どきどきした、あの情熱と感動体験をもう一度思い出そう。そして次世代の子どもたちに伝えよう。これが、指導者向けのメッセージです。

舞台は大自然です。その中で、お父さんお母さんが教えることは、たくさんあるでしょう。自然の中で、自然に教えてもらうことはいくらでもあるでしょう。

これは、現状での活動方針ですが、スノースポーツに参加する人口構成の安定化。これを裏返して言えば、生涯スポーツ、生涯スキーということです。どの世代にもスキーヤーがいる。安定したスキー人口を目指しております。

協力団体として、自然体験活動推進協議会に団体加盟団体しております。その他にクロスカントリー等も日本山岳ガイド協会に指導を受けています。かつてはスキー連盟は、例えば、スキー学校を作って、一つの山に一つの学校しか入れさせないという時代もありましたが、もうそんな時代ではない。むしろ、スキー連盟はさまざまな団体と協力体制を敷いて対応しているという現状があります。本日はスキーの将来を目指してのお話をさせていただきました。

(一部抜粋)



講演 2. 「様変わりする登山の現況」

磯野 剛太 日本山岳ガイド協会専務理事、安藤百福センター専門委員



「今、登山ブームなんですよ？」と言われてます。本当にそうかなあと思ったりもするんですけど、昨年までのレジャー白書等ではですね、580万人近い登山およびハイキングの愛好者がいますと言われてるようです。ただ、現象として一番見受けられるのはですね、本当に登山が好き、あるいは山歩きが好きというよりは、一番伸びた人口の場所というのは、実は富士山なんですよ。富士山は、この一昨年、昨年比で、10万人登山者が増えている。高尾山に登る方たちというのは、約300万人だそうです。ただ、ブームと言いましても、もともと日本の中で、山歩きなり、

山登りというのは、どういったヒストリーの中で生まれてきているのか、今に至っているのか、ということはある程度全体像としてやわらかく捉える必要があると思うんですね。

日本の山が人里から里山、里山から高山帯まで自然帯が続いている場所であるということが、よくお分かりになるかと思います。日本はどの山も神様が住んでいるんです。ヨーロッパでアルプスというのは、探検冒険の時代から、表に出てきたというのが、少なくとも16世紀以降です。それまでは、全く相手にもされなかった場所でした、せめてあるとすると、自然の要害として、あるいは軍事上、越えられる、あるいは超えられない場所としてのアルプスがあったわけです。ヨーロッパでも、日本と同じように神々が山に滞在して、住んでいた。

登山史と日本百名山

百名山にもつながってきますが、旅をしながら文化を語る、あるいは詩歌を読む、これは昔から旅をするというのは、日本の歴史の中でも、古事記の時代から、ずっとある形です。江戸時代にいたっては、松尾芭蕉ですとか、そういった人たち、あるいは明治まで、詩を詠いながらの旅と、もちろん歩く姿は今の山登りと変わらないわけですけど、そういう流れがあります。

ヨーロッパは、ある時代まで山登りという観点は全くありませんでした。産業革命が終わったイギリスにおいて、スポーツというものが歴史の中に出てきます。ゲームとしてのスポーツですね。このゲームで一番最初に発達したのは、「猟」いわゆる狩猟です。この中で、冒険的な活動を続けていく中で、登山の型になっていきます。その登山というのは、最初の形は、まだ誰も上ったことがない頂上に行くぞ、という初登頂時代と言いますが、次に登山の中でより困難なものを目指す方向性も、出てまいりました。登山の場合には、最初はヨーロッパのアルプスでそういったことが行われてまいりました。それが意味では近代的な登山の始まりだったんですね。日本ではその当時はまだ商用的な山旅、あるいは宗教的な登山です。

明治からの近代登山

明治になり、日本は開国をしましたので、各国からいろいろな人たちが日本に入ってきます。イギリスの宣教師であるウェストンは、日本アルプスをかなり登りました。そこで日本の人たちは初めて、ヨーロッパ型の登山というものを知ったんですね。それは、何か宗教を目的にしたり、あるいは生活の糧では無かったり、山そのものが好きで登る形を見ることができました。その結果、日本の一部の教養人が中心となって、明治の半ば過ぎに山岳会というものができました。挑戦的に、冒険的というヨーロッパのある時代からの流れを、そのまま日本に持ち込んできた。冒険的な山登りのことを、もともとアルプスで発祥したものですから、アルピニズムと呼んでいます。登る実際の人たちのことを、アルピニストと呼ぶんですね。ところが、日本というのは誰でもがある肉体を持っていれば、健康であれば、ゆっくり歩いて登っていける地形を持っています。この違いが、日本の山登りと、ヨーロッパの山登りの違いです。

日本はこの地形の分離ができないものですから、どこまでが登山で、どこまでがハイキングで、どこからがトレッキングということがあまり見えていない。その中で、特に山に関しては、学校教育でも遠足なり、修学旅行なり、林間学校なりで、ずいぶん組織された山登りというのがありました。現在まで続いている学校もあります。それから学校ですとか大学、高校中心に、あるいは社会人の会社の中にも、山岳部ですとか、ワンダーフォーゲルという、いろいろな組織が増えて、大いに盛り上がった時代が、今から30年前です。

現在の登山状況

昭和30年半ばから、40年半ばまでの10年間は、登山人口が、ぐーっと増えています。その中で、今につながる山登りに密接する百名山という考え方がある方の発案でできました。ですから一つの物語として、たいへん文化的な裏づけもあった百名山というのが出て参ったわけです。この百名山がなぜいいかというと、誰でも近づける山なんですね。アルピニストと呼ばれるような、登山家ではなくて、誰でも行ける。日本の古来の宗教的な山歩きや登山の姿にある意味では近い。年齢の高い方たち、リタイヤをした方たちですとか、女性たちも気軽に百名山を趣味にできる。百名山は旅行者にとっては、自分では行けないところ、登山家にとっては簡単に行けるんですが、旅行会社の旅に参加した人にとっては、簡単には行けないところなんですね。つまり、そこできちんとした仕切りを作り、安全管理をし、ガイドさんなり、添乗員と一緒に着いていくことによって、グループで楽しんで来られるという形を作り上げた。その流れが現在まで続いております。日本のある種の山登りの姿を象徴しています。

必要とされる登山指導者の育成

今登山界で、組織された、あるいは訓練を受けている登山者は約20万人です。登山ツアーに参加する年間の方たちは、富士山まで入れると、50～60万人になります。

その中で、実は登山界そのもの、今の20万人がそうですけれど、どんどん高齢化してまして、跡継ぎが減っております。でも、登山界というのは、すごく優しい組織で、先輩をい

つまでたっても立てるようにできておまして、その中で、後輩がいなくなっているというのが現状です。そのために、良い指導者が、今育成できておりません。一方で、ガイド登山というのは、旅行会社のツアーも含めて、需要が増していきまして、日本には正規の教育を受けたガイドの人たちというのが、1万人は最低必要だと思っています。現在、日本山岳ガイド協会認定を受けているのが、800人ぐらい、そのうち、試験を受けて、最近なって教育を受けた方たちというのが200～300人です。

このガイドを育成する作業を、作らなければなりません。一方で、専門人口の減少とともに、今まで無かったような遭難事故も、最近頻発しております。明らかに、登山者ではなく、登山客の皆さんが起きている事故というのが増えていると思います。新しい指導者を付けるということが急務です

最近では山ガールがブームですが、これからどうやって自然の中で、安全管理も含めてできる指導者を育成するかというのが、様変わりする登山の現況、あるいは自然体験活動の中で、学校の先生も含めてですが、養成していくかが課題です。

登山においては指導者の養成が急務だということを、皆さまに訴えまして、終わりたいと思います。

(一部抜粋)

講演 3. 「自然体験旅行（アドベンチャー・トラベル）の可能性と課題」

佐藤 博康 松本大学教授

私は松本大学の観光ホスピタリティ学科で観光を中心に指導させていただいております。Yokoso Japan 大使に任命されて、そちらの方もやらざるを得なくなっています。

1980年代、日本では観光といったら大量生産、大量消費型の観光、つまり団体旅行という旅行が中心だった。特に、海外へ行こう海外へ行こうと、日本に外貨が貯まってしまったから、これをなんとか使わせたい。当時は、日本の旅行業界は、海外旅行2,000万人ということ、声高に叫んでいた時代です。



1980年代によく日本に「エコ」という言葉が出てきます。まだエコツーリズムとかネイチャーツーリズム、グリーンツーリズムという言葉は無かった頃です。1980年、日本にエコツーリズム協議会を作ったほうがよいと声をかけて、仲間に加えさせてもらいました。その流れが、今のエコツーリズムという形で出てきました。

アメリカにはアドベンチャー・ツーリズム・マーケット&アドベンチャー・ツーリズム・アソシエーションという団体があり、その2009年の年報に、こんなことが書いてありました。何がアドベンチャーかは、旅行者の主観に左右されることが多く、非常に判断は難しいのですが、この団体では以下の3つの要素のうち、2つ以上満たすこと。1つは、体の活動を伴うもの。つまり、肉体的な動きを伴った活動。二つ目は、自然体験を含むもの。自然体験というのは、自然を対象とした体験はもちろん、自然の環境の中での体験ということも、含めようということで、自然体験を含むもの。3つ目、これがたいへん重要なポイントで、文化的な学習、あるいは文化的交流を含むもの。3つの要素の中のうちの2つ、これを入れたものをアドベンチャーと言おうじゃないかということです。

ハードアドベンチャーとソフトアドベンチャー

我々が考えなくてはいけないのは、人間そのものは同じで、その中で一部は大衆の方に走り、一部はその他の観光に走っていく。要するに人々の構成上は同じなだけども、その人たちの関心は変化している、興味は変化しているということを、抑えておかないといけない。

アメリカでは、三つの分類に分けて、アドベンチャー・ツーリスト、ハードアドベンチャリスト、ハードアドベンチャー・ツーリスト。それから二類、ソフトアドベンチャーと言いますが、ソフトの分野を考えているアドベンチャー・ツーリスト、ないしは活動の人たち。ハードの人、登山だとか極地探検、あるいはバンジー・ジャンプ、ハングライディング、スキューバ、今は何億円出してもいい、宇宙に行きたいという人たち出てきました。その人たちも含めてア

ドベンチャー。それから、ソフトです。このソフトはいわゆるアドベンチャー、アウトドア系の中心となっている箇所だと思いますが、考古学探査、バックパッキング、ハイキング、バードウォッチング、キャンプ、それからカヌー、カヤック、あるいはサイクリング、エコツーリズム、環境教育、フィッシング、乗馬、オリエンテーリング、野外リサーチと入ってくるわけです。このエコツーリズムというものが、従来のエコツーリズム、あるいはアメリカのエコツーリズム協会で考えると、エコツーリズムはアドベンチャーの中の一部だという位置づけをされているようです。

お伊勢さん参りもアドベンチャー

日本の場合においては、かなりの分野で自然というものが関わってきます。目的ではないにしても、偶然自然体験型というのが出てきて、ほとんどあらゆる観光、あらゆる旅行のパターンが、高野山旅行とか昔の伊勢のお参りに行くような、当然ながら、今で言うアドベンチャーの分類に入ってくると思います。

登山では、我々はせいぜい槍ヶ岳のハシゴを登るくらいの感覚しかなくて、行ってみたらハシゴというより壁登りに近い、上から見るとこんな山が、ずっと連なっている、そういうのを登って行くわけですが、一度これを体験すると、やみつきになる。

ニュージーランドでは、自然とは何か、ニュージーランドというのは一体どういう所なのか、その中で我々は何をしなければならぬのか、ということをきっちりレクチャーしてくれます。その後の締めが非常に重要な要素です。これからアドベンチャー・アウトドアを考える時に、そのポイントで指導するという事は、ただ単に、話せばいいということではない。絵を描いたり、いろいろジェスチャーをしたりしながら話してくれる。この操作を、ぜひ日本の現場に導入してもらいたく、CONEでも議論を進めていただきたいところです。

アドベンチャーツーリズムはコミュニケーション

アドベンチャーツーリズムというのは、どのようなメリットをもたらしてくれるのか。アドベンチャーという人たちは、旅行とか観光に関して、お金を使わない人たちです。冒険をする人や探検をする人は、ポケットの中のお金を使わないんですよ。その一方で、ギアにはお金をかける。山ガールだってみんなそうです。これは、世界中共通です。彼らの行動の情報は、ほとんどオンライン、口コミです。それと、教育レベルと家計収入レベルが高い。旅行日数の長さが、一般の観光よりも長い。高度になればなるほど、伸びる傾向がある。そして常に、新しい旅行先、地元の交流、農家体験を求める。これはどういうことか？コミュニケーションが重要だということです。

最後に指導者は、自然環境保全のプログラムに、上手に参加させる手練手管を身につける。それから、環境保全の教育的価値。なぜ我々は、そこでそういう活動をしているのか、そこにいるのかということ、ぜひ教育していただきたい。それと、交流ですね。そのためにはコミュニケーション能力を身につける。また、中高年の訪問者向けには、多様なメニュー。そし

てリスク。これを大事に管理するという必要でしょう。

何よりもお金を使わない人たち、お金を使わないのを格好いいと思っている人たち、この人たちでも適正な価格と価値さえあれば、お金を使います。リピーターというのを意識したアドベンチャーを考えたらいいと思います。

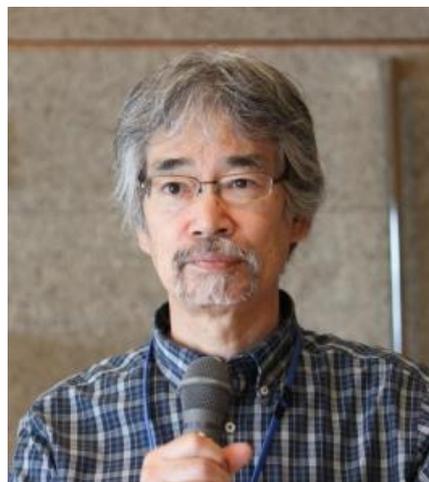
(一部抜粋)

講演4. 「アウトドアマーケットを考察する」

中村 達 安藤百福センター副センター長
アウトドアジャーナリスト・プロデューサー

今日はこれまでと違う角度で日本のアウトドアマーケットをお話したいと思います。

山ガールがトレンドです。個性で着ているものもおしゃれですね。中高年のオジサン、オバサンたちと違います。これが売れに売れて、某アウトドアメーカーは在庫が無いというぐらい、売れております。リュックサックも大変おしゃれです。「このバックは、どこで作っているの？どこで買ったの？」と聞いても、「知りません」と言います。でもおしゃれだから買う。こういうファッションは、ファッション雑誌にヒントを得ているようです。



最近、山ガールに追っかけボーイが出てきました。彼たちが、山ガールの真似をして、こういうファッションをしだしたということです。

富士山登山

次が、富士登山ですね。それから中高年登山。そして、野外フェスティバルです。野外フェスティバルがアウトドアで行われている。スキー場とか、広場で行われている。そこに、テントを張って、アウトドアファッションでいます。だから、ファッションとテントが売れる。これは、日本のアウトドアの四つの大きな流れです。

富士登山ブームが起こっています。これは世界遺産云々とかいろいろ出てきたので、メディアも取り上げたので、おおぜいの人たちが富士山に登ります。少なくとも、八合目で40万人。40万人が一人1mのトイレトペーパーを使うと、400kmになります。京都から東京ぐらいあるんです。これだけのトイレトペーパーが、実は富士山に捨てられるんですね。循環型とかのエコトイレが設置されていますが、浄化能力はかなりオーバーしている。ところが日本のアウトドアメーカーは、夏になりますと富士山にグッズを一斉に売り出すんです。本当は、アウトドア業界はもう富士山がこれだけオーバーしているのだから、やめようと言わなくては行けない。それでいて、富士登山をきっかけに継続して山登りをする人は非常に少ないのです。多分、数パーセントいるかないかという感じです。富士山にたくさんの人たちが登ったからといって、登山ブームというのは、とんでもない間違いということです。

山ガールの市場特性

山ガールの市場特性はどういったものか。ファッション先行でお洒落。それから、癒し、ス

トレス解消、健康、気持ちがいい、自由、などが彼女たちを山へ行かしている大きな理由だと思います。これからは、しっかりした指導や教育をやっていかないと、山ガールは数年で終わると思います。

子どもの自然体験での課題は、親のアウトドア体験がないところです。山ガールをうまく育てていけば、山ママになるんじゃないかと期待しています。皆さんのような指導者がそういうことを視野に入れて、山ガールをうまく育てあげて、教育していくようなことも考えなくてはならないと思います。

中高年の登山者の年齢層は50代60代です。それが、ちょっと歳が上がってきた。もう山に行けなくなりつつあります。しかも、日本の百名山を一巡して目標もなくなり、体力も心配だから、じゃあ旅行にしようとなって、参加人口は遡減してきている。それからもう一つは、団塊の世代。これがきっと山に行くだろうと期待していました。しかし、期待はずれでした。

海外の事情

フランスの事例を紹介します。岩山にトンネルを掘ってここまで観光客を上げるか、そこまでやるかということですね。つまり、観光をやる時は、徹底してやっている。なおかつそれでいて、うまく自然と共存している。その点、日本はなにか中途半端です。これからは徹底してアウトドアの観光をやらせてみる試みも必要でしょう。

スキー場のリフトにはマウンテンバイクのキャリアがあって、マウンテンバイクをのせられるんです。遊びに関して徹底しているところがすごいと思います。観光のために山岳地の利用を適正利用する。その代わり、環境教育もしっかりやるよというフィロソフィーがあって欲しいなあと思います。ぜひ日本のスキー場でもおやりになったらいいんじゃないかなと思います。

アウトドアマーケット

アウトドア人口ですが、日本には、アメリカほどしっかりしたデータがありません。ピクニック、ハイキング、野外散歩で、2,700万人。登山がだいたい590万人。キャンプは500万人。オートキャンプ協会のデータです。スキーが760万人、僕はこんなにもいないと思います。だいたい私がざっと計算したら、レンタルスキーと国内の輸入されているスキーの板を合わせると、でマックスで350万。なので、310万人くらいかなという気がします。スノーボードが430万人。釣りが1,500万人。それに対して、国内観光旅行が、約6,000万人。この国内観光旅行がどうも、アウトドアテイストに向かう可能性があるのも、その辺のゲートをしっかり作っていくことが、これからの皆さんの大きなチャンスになるかなという気がします。

日本のアウトドアマーケットですが、どこまでをカテゴリーにするか難しいですね。アウトドアの業界といわれている企業の出荷額は去年で1,328億円です。出荷ですから、末端にしてください2,000億くらいです。この多くの部分が、ファッションです。これは必ずしもアクティビティとは結びついていないというのが、一番大きなポイントです。伸び率からいきますと、アウトドアウェアが対前年比で105%です。

子どもたちの教育が重要

COP10 が開催され、生物多様性に関心が集まりました。しかし、忘れてならないのは、子どもたちの絶滅危惧種です、日本カワガキとか、日本ヤマガキとか。この子たちを育てないと、日本のアウトドアマーケットは大きくならないんですね。日本のアウトドアマーケットの原点になる、つまり教育なんです。教育をしっかりやっていかないと、マーケットはだいたい育たないというのが、私の一つの結論です。

日本でアウトドアというのが、ようやく、なんとなく社会に必要なところがあるところまで認められてきた。ただし、これからのマーケットをどうやって作っていくか、あるいは、バーベキューキャンプとかで終わらずに、あるいは単なる観光だけで終わらずに、ファッションだけで終わらずに、ライフスタイルに根付いたものにしていかないと、日本でしっかりとしたマーケットはできない。それを作らないと、東アジアでもうまくいかないんじゃないかという気がします。アウトドア業界だけでなく、観光も含めてあらゆる業界をあげて、しっかりとした教育システムを作ることが大事かなという気がします。

(一部抜粋)

国際アウトドアシンポジウム 11月6日(土)

「アメリカの自然学校、グランド・ティートーン自然学校の事例から」

ジャック・シェア グランド・ティートーン自然学校長



こんにちは。私は、アメリカの西部、ロッキーマウンテンからやってきました、ご挨拶申し上げます。まず、私の講演を始めるにあたりまして、ご招待くださいました岡島成行さん、中村達さんにお礼申し上げます。この素晴らしいセンターにお招きいただきまして、誠にありがとうございます。

この安藤百福センターは、素敵なおところにできた素晴らしい施設でございまして、たった今、副市長からご挨拶がありましたように、自然とみなさんをつなげるというところに役立つ、非常に優れた施設と考えております。私は、今回日本に来た

のが初めてで、これが最後にならないこと祈っているんですけども、本当に皆様とお会いできて、日本について学べること、国の人々や文化を学べること、そしてみなさんと意見交換できることを大変光栄に思っております。

世界のいたる所において、子どもを自然に結びつけていくということについて、私は非常に高い関心を持っております。私は国際的な環境教育にすべて精通している専門家ではございませんし、またアメリカで取り組んでいる全ての環境教育の取り組みをお話できるというわけではございません。今日は、私がお話したいと思っておりますのは、ひとつのセンターの物語でございます。そしてそこで働く人々の物語についてご案内したいと思います。また、こちらの安藤百福センターと同じように、周りに囲まれている環境についても話し申し上げたいと思います。

後ろの方にいる、ローレル・ワイコフという方が、私どものセンターの職員です。本当は、全員連れてきたかったんですけど、今回は一人だけ、ティートン・サイエンス・スクールから連れて来ることができました。あとでみなさんには、どうやったらお金を集められるかというテクニックについて、彼女の方からも何分間かお話を差し上げたいと思います。彼女がここに来てくれて非常にありがたいですし、また彼女が非常に優れた仕事をしていると思っております。

私、あらためて自己紹介をさせていただきます。名前はジャック・シェアと申しまして、ティートン・サイエンス・スクールというところで20年以上エグゼクティブ・ディレクターを勤めております。実は、この仕事は、私には身に余る仕事だと思っております。といたしますの

は、私は教育を受けて科学者になりました。そして自分で選んで、アウトドアの教育者になったわけなのです。ただし、何らかの間違いで、きっと私の日ごろの行いが悪かったのでしょうか、なんと管理職の立場になってしまいました。きっと何か悪いことをして間違ってしまったので、道を誤ってしまったのではないかと思っております（笑）。といたしますのも、私が一日の中で景色を見られるというのは、本当に窓の外から自然の景色を眺めるくらいしかできません。一日における自然科学的な経験というのは、本当にわずかな時間に限られております。でも、文句言うつもりもございません。非常に美しい場所で、過ごすことができているからです。

ワイオミング州は、とても広い州なんですが、人口は 50 万人以下と非常に少なくなっております。ここでは、心が非常に温かい人々が住んでおりまして、野外で何か仕事をして、生計を立てている場所でもございます。例えば、エネルギー中心に関わるような産業、石油ですか、石炭、天然ガスというものの抽出に関わっている人も多いです。または大規模な牛の放牧、また毎年、世界各国から何百万人もの観光客の方々を受け入れております。観光客の皆さまの目的というのは、昔ながらのアメリカ西部を体験することです。例えば、カウボーイの風景、あるいはネイティブアメリカンの文化、そして、広大な空に、山々が連なっているような風景というものです。例として、広い雲が広がっているところに、ログキャビンが点々としている光景です。

私が住んでいる場所は、グレーター・イエローストーン・エコシステムという所です。アメリカ大陸の中で、最も手付かずの生態系が残されている場所でございます。例えばですね、豊富な肉食動物の種がおりますし、また蹄を持っているような、哺乳類の大群というものもたくさん目にすることもできます。また、様々な鳥が棲息しており、たくさんの小川、あるいは川ではマスの漁場となっております。このような川が繋がってですね、山脈、森林、そして大草原などの自然が素晴らしい形です。非常に幸運なことなんですけれども、このような風景を守っていきたい人々の思いが、非常に強かったことから、1872 年、イエローストーン国立公園が設立されました。荒牧先生がお見せになった写真と同じなんですけれども、イエローストーン国立公園では、毎年約 300 万から 350 万人の人々が訪れる場所となっております。これらの活動は、非常に短い夏の間におこなわれております。グランドティートン国立公園というのは、1926 年に歴史の幕を開けております。イエローストーンの南方に位置する公園なんですが、登山客あるいは自転車の客、バックパッカー、カヤックを楽しむ人々でたいへん賑わっております。スノースキーのお客さんにも、非常に人気があります。

私はジャクソンホールという土地から来ております。ジャクソンというのは、非常に小さい町なんですけれども、非常に誇り高い自負心のある町でございます。ここでは、町の誇りというのは、世界中で最も頭の良い人たちがいるということです。私はもちろん、ここの部類には属していない人間なんですけど（笑）。こちらはスキーリゾートでございますね。ジャクソンホール・マウンテンリゾートと呼ばれています。

それでは、ティートン・サイエンススクールのご紹介にいきいたいと思うのですが、こちらは 1967 年、私が始めたのではなくてですね、写真の真ん中に見えます、テッド・メイジ

ヤーという一人の男性が始めた学校でございます。彼の助けとなったのが、右に写っているバービー・ムーディという女性の方なんですけれども、この方は、アメリカの自然保護活動の中で非常に重要な役割を担った女性です。この創業者の想いというところはですね、生徒たちは、ぜひ、教室の中と外、両方で学ばなければいけないということなんです。特に、野生生物に関する科学的な調査というのは、全ての生徒たちにとって、彼らの成長に非常に役立つものだと信じておりました。そして、こういったことは、将来土地を守っていく人々を育てていることも、確信しておりました。

ここで、私どもの学校のミッションを紹介したいんですが、非常にシンプルで、人々、自然、場所、教育という4つの言葉で示されます。もちろん、創業者のテッド・メイジャーという方の信念を拡大するために、彼の発想を引き継いでいる他、それ以上にもっともっと様々な活動をおこなっております。特に、目標を達成するためにはですね、科学的なロジック、効果的なビジネスモデルというのは、非常に重要だとお伝えしたいと思います。

私どものNPOにとって一分、一秒でも、たった1ドルという費用でも非常に効果的に使っていくことが大切です。私どものプログラムは三つ大きな領域がございます。まず始めに、こちらでご覧いただいておりますのが、日本でもよく見受けられます、教育的なプログラムでございます。こちらはイエローストンの土地を利用いたしまして、様々な野外体験を通じて環境教育を行っていくというプログラムでございます。

次は大学院プログラムと呼ばれているものなんですけれども、こちらは17年間に渡って、プログラムを続けております。そして、1年間の集中プログラムを提供しております。こちらに書かれていることなんですけれども、エコロジー、つまり生態系と、地域に根ざした教育というものを統合しまして、非常に革新的な授業おこなっていくということでございます。

次は、野生生物探検隊というプログラムです。こちらはですね、科学教育の要素が非常に強く取り入れられたエコツーリズムと言えます。野生生物の観察、そして、自然の歴史の観察を通じまして、人々を自然につなげていきます。

私たちのユニークな点として、4つの事業があるんですけれども、そこから収益を得ていくというようなモデルを紹介したいと思います。こちらはですね、天井が開くような仕組みになっているサファリカーなんです。続きまして講師向けの研修センターというものがございまして、こちらは技術をお伝えする場所になっております。またジャーニーズスクールというものがございまして、こちらは私立学校という位置づけになるんですけれども、幼稚園、未就学児から高校生までを対象にした国際バカロレア規定に沿った学校を運営しております。最後が保全研究センターというものです。土地管理、生態系に関するプロジェクトをおこなっております。これら全てのプログラムは、財務や資金調達、施設などの全ての費用を統括する中央管理組織からのOKを受けております。全てのプログラムを中央で統括していくことによりまして、規模の形態を働かせるということが出来ます。これによって、効率的な運営ができるということです。



まったく生物多様性と同じなんですけれども、私どもの、6つのプログラムというものも同じように、助け合っていてできるんですね。例えば一つのプログラムがダメな場合は、他のプログラムには補完するということになっています。

ここでよろしければ、みなさんにぜひ動画を見ていただきたいと思うのですが、いかがでしょうか？ここにいるみなさんは、子供を実際に自然に連れていくという体験をいろいろやられているとお聞きしております。実はですね、子供たちというのは、連れて行ってもらう必要というのは無いんですね。ドアから外に押し出してあげれば、それだけでいいんです。彼らは自分たちで、自然の中に飛び込んでいって、自分たちの遊びの形というものを創造していきます。アメリカには、若者向けのスポーツというのがたくさんあります。それでは、感じをつかんでいただければと思います。

(上映中)

<http://www.youtube.com/user/TetonScienceSchools#p/u/3/PykFRPxSMtM>

<http://www.youtube.com/user/TetonScienceSchools#p/u/1/9VzRhDSdO5Y>

非常にシンプルな考えで、やっているんですけども、夏の1週間という期間を選びます。今では、夏の間をそれを10週間やるんですね。1週間×10回ということですね。各1週間の間に、約20名の子どもたちが体験していきます。

続いてグランド・ティートン国立公園の中で、特別な許可を得て設立しましたキャンパスについてご説明したいと思います。これは本当に魔法がかかったような、素晴らしい場所なんですけれども、私たちがアウトドアフォーラムをおこなうのに、ぴったりの場所です。

こちらは5年前にできた新しいキャンパスになります。スタッフおよび、理事の皆さんに、非常にたくさんの苦勞をしてもらってできたという経緯がございます。寛大なご寄付をいただいたということもございまして、土地を購入してキャンパスおよび建物というものを建てることができました。今は、より多くのベッドを導入したいと思っております。こちらは非常に持

続可能な設計で作られている建物でございまして、また、スタッフの宿泊場所も確保することも検討しております。



ここでまず、いくつかの数字をご紹介しますと思います。ご覧いただきましたように、年間の予算というのが約 950 万ドル、日本円にして約 9 億 5 千万円ですね。80 人のフルタイムスタッフと、80 人の季節的な労働者と、40 人の理事がおります。昨年は 11,795 人の参加者が訪れました。プログラム別の数字でございます。左側が、ジャーニーズスクールの数字でございます。学費全部がですね、年間約 175 万円かかるわけなんですけれども、私どもファイナンス、財務の方から 25%いただいて、支援ということで、生徒のみなさんに反映しているというわけです。174 名の未就学児から高校生当たりの年齢までの学生が入学しておりまして、36 人がすでにこれまで卒業しております。こちらの卒業生の全ての方々が、大学の方に進学いたしまして、今はさらに勉強を続けているという状況です。野生生物の探検隊というプログラムでございますけれども、すでに 4,244 人の参加者として、内訳が大人が 3,815、子供が 429、ということになります。

グランド・ティートンというところは、実にいろいろなところからお客様が訪れていらっしゃいまして、41 の異なる州から来ているということと、他の国からも、ご覧いただいたように、来ているんですけれども、日本の方々には、もっと来ていただきたいですね。

こちらは大学院プログラムと呼ばれるものなんですけれども、年間の金額が約 2 万ドルということですね。こちらの卒業生が 266 名で、彼らの多くは、さらに勉強を続けております。15 名ほどの生徒がおり一年間のプログラムで成り立っておりまして、全寮制の形になっております。また、600 人の先生が育てているというプログラムがございます。こちらの施設はスライドでご覧ください。こちらは少々年配の方々が参加しております。次に学校グループの受け入れというものもやっております、約 92 校が参加しております。そのほか様々な場所から受け入れをおこなっております。半分ぐらいがワイオミング州なんですけれども、その他の州か

らも受け入れをおこなっております。ローカルに根ざしてはいるんですけども、それをこれからどんどん広げていきたいと考えております。これまで私どものいろいろなお話をしてきたんですけども、では、今後何をしていたらよろしいかということについてもお話したいと思えます。

リチャード・ループという作家がおりまして、あなたの子どもには自然が足りないという本を書いております。彼はですね、著書の中で、自然欠乏症という言葉を提供しているんですね。子供と自然の周りが無くなっていること、そしてそのギャップというのはどんどん広がっている。これは日本と一緒にではないでしょうか。この問題に対して、もちろん何かをしていかなければいけないんですけども、ここで一つのアイディアをご紹介しますと思います。というのは、ワイオミング州の全ての学区から、それぞれ2名の代表生徒を選んで、イベントを実施しました。これは、青少年会議というものなんですけども、子どもたちに、自ら自分たちで解決を探っていただきたいという会議です。いまからですね、こちらについても簡単な動画を見ていただくといいんですけども、すべての見ていただくお時間はございませんので、もし全て見たいという方は、私たちのウェブサイトの方からご覧ください。

(上映中)

子どもたちと話したのは、彼らがどの程度ストレスを受けているかということなんです。ストレスというのは、宿題であったり、スポーツですね。それから非常に忙しいスケジュールですね。これは彼らから出た意見なんですけども、こういったアウトドア経験というのが、彼らのストレスの発散源なんだということでした。非常にこのプログラムは好評で継続しておりますので、また今年も行う予定でございます。ここで出された意見というものは、より検証したいと考えまして、実際に調査をいたしました。具体的には、ワイオミング州に住む1,500世帯から、抽出した調査を行いました。この結果というものは、私どものウェブサイトでご紹介しているんですけども、この小諸市のようなですね、非常に地域性の高い場所の方々には興味を持っていただいている結果となっているのではないかと考えております。こちらの問題から一つ結論が導かれたことは、いくつもの世代に渡って問題があるということなんです。一つの世代ではなくて、親御さんたちは、子供たちをどうやって外に出したらいいのか分からないということなんです。この問題を解決するためにですね、いくつものレギュラーでやっているプログラムの他に、いろいろなプログラムに取り組んでいるところでございます。

ここからまたちょっと違うトピックに入りたいと思います。新たに展開していくプログラムです。まず第一に、州の外で営業するということですね。次はサービスプログラムを開発していくということです。1月というのはちょうど大学の休みの時期に入りますので、この時期に合わせてプログラムを開発していきます。そしてファミリー向けのプログラム。国際的な方々をお連れしての滞在型のプログラム。最後に、自然に根ざした幼稚園ということですね。詳しくこちらについて、お知りになりたいことがございましたら、もう少しで私のスピーチが終わ

りますので、どうぞお気軽にお尋ねください。この中で特に、パワフルなのは、自然に根ざした幼稚園ということです。



世の中を動かすのは、お金ですね。予算のうち 20%は、外部からの資金調達を行い、80%は参加費などから徴収していくという 80 - 20 のバランスです。そして年間を通じた資金調達を、しっかりとおこなっていく。寄付なんですけど、寄付でもらったお金をちゃんと運用して、その利息を上げていくという考え方をしっかりもっていくということも必要です。また、参加者のレート、つまり申し込み率を高めることで、無駄を無くす。そして最後に最終的な支援を獲得するという事です。

私たちはですね、実は国際的なパートナーというのに非常に興味を持っております。これはブータンとの共同プロジェクトの写真です。みなさん非常に忍耐強く聞いていただいて、そろそろお疲れだと思うので、この辺でやめたいと思います。みなさんぜひティートン・スクールにもいらしてください。ご招待したいと思います。このあたりで、私のお話を終わります。ご清聴ありがとうございました。みなさまぜひ、みなさまからご質問をいただけるのを、楽しみにしております。何かご質問がありましたら、お受けいたします。

(一部抜粋)



「自然学校の資金集め」

ロレール・ワイコフ グランド・テイートン自然学校資金担当



みなさま、私の名前はローレル・ワイコフです。こんにちは。キャンプネームはシェルビーといえますので、こちらの方も覚えていただけたらと思います。たった今話すように聞いたので、あんまり準備ができていないんですけども申し訳ありません、お許してください。実はジャックが話している時に、ずっと原稿を書いていた (笑)。

私の仕事というのは、年間約 250 万ドルほど、テイートン・サイエンススクールに資金援助を行うということです。私の他に、二人のスタッフが一緒に仕事をしてくれています。

さて、資金調達とは、何でしょうか？そこには二つの大きな柱があります。一つは素晴らしいアイデア、もう一つが関係性です。ジャック

がその素晴らしいアイデアを考え出すことに責任を持っていてくれていると思います。私は、その素晴らしいアイデアをドナーに繋ぐという役割を担っています。アメリカでは慈善事業に非常に積極的という文化がございましてロクスター財団というものがございまして。これはかなり昔に遡るんですけど、彼らの財産というのは、非常にたくさんの土地があったんですね。この土地を提供するということによって、多くのアメリカ人に大切さというものを、理解していただくというきっかけとなったわけです。ジャックが先ほどお話したように、ワイオミングの若い子どもたちの会議というものをやってきました。これを私がですね、資金調達という形で、資産家の家族や個人の、お金を出してくれる方々から寄付を得てきました。

みなさん、よくお分かりだと思うのですが、誰かを助けるというのは、非常に気分がいいことです。人々を助ける気持ちというのは寄付するという行為においても同じことです。年間約 250 万ドルの資金調達をするために、私たちは三つの取り組みを行っております。

一つ目が、年間の資金調達。二つ目は投資、三つ目が助成金ということです。私たちの会計年度というのが、12 月の 31 日、つまり年度末が 12 月末ということになります。アメリカの場合では、税的な控除というものを受けられる仕組みがありまして、寄付をすると、税金から控除を受けられるという仕組みになっております。これはですね、もう一つのインセンティブにつながっている。すなわち寄付をする動機につながっているということではないでしょうか。

毎年 12 月にですね、4,000 人の寄付をしてくださる方々がいらっしゃるのですが、これをメーリングリストにして、ダイレクトメールを一斉送信いたします。この中には、活動

中の楽しい笑顔が詰まったような報告をお届けしています。その封筒の中にですね、小切手を入れて送り返していただけるような返信用封筒も、忘れずに同封しています。もちろんオンラインの方の取り組みというも行っております。そちらの寄付金というのは、非常に幅がございまして、1ドルの方もいらっしゃれば15,000ドルをくださる方もいらっしゃいます。

イベントを通じまして、年間50万ドルの寄付というのをいただくことができます。毎年夏には、オークションを開催しております、約800アイテムのオークションをしております。こちらは、家具からスポーツ用品、その他に、民泊といいますか、家の中に滞在するプログラムというのも入っております。みなさん日本に別荘をお持ちでしたら、そういったものも、ぜひオークションに出していただければ、私たちの助けになります(笑)。約500人の人々が、こういった無料のイベントに参加してください。

もう一つ、別のイベントで12月に行っているんですが、これは100ドルの参加費がかかります。これは150人の人々が参加されます。こちらでは、非常に高価なものが取り引きされておまして、貴重な芸術作品というものも取り引きされておます。素晴らしい休暇ということですね。例えば、アメリカ代表のスキーチームと一緒にスキーを滑れる権利というの、オークションに出されます。有名な自然写真家と、何日か一緒にプログラムを体験できるというの、オークションに出しています。

助成金なんですけども、こちらは20万ドルの予算を獲得しております。日本では助成金というのは、一般的ですか？ファンドレイジングするに当たって、様々な財団が助成金を出しておりますので、どういう所がこういったものを出しているかということについて、調査を行います。例えば、そのような財団の中には、ウォールマーケットという大きなスーパーマーケットがあるんですが、そういったスーパーマーケットが運営しているような、財団というものもあります。アメリコーンという団体がございまして、こちらからは、季節的な労働者という形で、助成をいただいております。ホンダやトヨタという会社からも、そのようなお金が出ております。

これが私が原稿作成した、精一杯の結果なんですけども・・・(笑)。もし何か質問がございましたら、お願いします。あるいは小切手を書いてくださる方がいれば、私が今、回収しに上がります(笑)。冗談でございます。ありがとうございました。

(一部抜粋)

パネルディスカッション



パネリスト：大西かおり、佐藤初雄、下村善量、節田重節
司会：岡島成行

岡島：それでは、シンポジウムを始めたいと思います。今日は4人の方に登壇していただいております。テーマは、ジャック・シェアさんの話を受けて日本の状況などについて話し合おうということになっています。大体1時間半くらいの予定です。

最初にそれぞれの方に自己紹介をしていただき、それからシェアさんとワイコフさんの話を受けて、感じたことなどを簡単にまとめていただこうかと思います。その後、フロアの皆さんとのディスカッションもしたいと思っております。それでは、節田さんからお願いします。

節田：4年程前ですが、山と溪谷社を退職いたしました。40年間、主に山の書籍や雑誌を中心に作っておりました。大学時代から山登りばかりやっていたので、山の方から見た話ができるかと思っております。特に昨年は、皆様をご存知のように、北海道のトムラウシで1日に10人の方が亡くなったのですが、その事故調査の委員をやっておりまして、そのまとめに半年ぐらいかかっておりました。



下村：国立青少年教育振興機構で教育事業部長をしております。私ども、皆様ご承知かと思いますが、国立の青少年交流の家と青少年自然の家を27棟と東京のオリンピックセンターを運営しています。青少年の交流事業や子供会、スポーツ少年団などが自然体験活動を利用するという場合に、場所と指導者を提供するという施設です。

佐藤：昨年、自然体験活動推進協議会、通称 CONE の代表理事を岡島さんからバトンタッチ



をさせていただきました。そのほか、国際自然大学校という自然学校を 27 年間、今年は 28 年目ですけれども、東京の狛江というところでスタートして、現在も活動しています。私が国際自然大学校を始める前に、コロラドの OBS (アウトワードバウンドスクール) の方に行っておりまして、その時には Semester コースという、大体 3 ヶ月半のコースだったんですけれども、それに参加をし、その後 2 ヶ月ぐらいアシスタントをしました。ロッ

キーマンテンズを 12 名の参加者を連れてインストラクションをしてきました。そんな経験から、こういう学校を是非日本でもできないかなということで、当時、26 歳ですけれども、立ち上げたんです。ジャックの話を聞いて、やはり世界共通で、こういう学校もまだまだ必要なんだということを強く感じました。

大西：三重県にあります NPO 法人大杉谷自然学校の大西かおりと申します。大杉谷自然学校をスタートして、今年で約 10 年目を迎えております。私は日本環境教育フォーラムの自然学校指導者養成講座というところで養成されまして、1 年間で自然学校が運営できるようになってしまいました。今現在、大杉谷自然学校の職員として 9 名程が働いています。やっている内容は、地域を生かした環境教育プログラムということで、例えば、調査をしたりとか、地域に子供たちを集めているんな体験をしていただいたりしています。地域を自然学校で元気にするんだ！ということでやり始めたのですが、最近、地域で聞き取りなどをしましたら、65 歳の方が、「わしはこの地域で一番若手なんや！」と言う。65 歳ですよ。今、高齢化率が 70% もあります。それで、何かしたいなと考えている今日この頃です。

岡島：ありがとうございました。それでは節田さんからもう一度お願いします。

節田：昨年アメリカの国立公園を 3 つ続けて回ったのですが、モンタナのグレイシャーパーク、次いで、イエローストーンと先ほどのグランド・ティートーンを回ってきました。ジャクソンに 3 日間滞在してハイキングしましたが、一番印象的なのは三世代ぐらいに渡って非常に楽しげに遊んでいる姿ですね。様々なグレードの遊び方ができる。夏のサービスが非常に良い。看板とかシャトルバスとかいろんなことを徹底してサービスをしている。年代を越えて楽しんでいらっしゃる。それが一番印象に残っています。

下村： 私は行政の人間で、今は財務の関係です。シェルビーさんはなかなかやり手の女性だ



なと思いました。私どもの青少年振興機構に来ていただきたいな（笑）と思います。年間250万ドルですよ、250万ドル。私どもにそんな感覚はないんです。250万ドルといえば2億ちょっとです。先ほど言った国立の信州高遠少年自然の家が人件費から事業費、それから施設整備費などを合わせて1年間大体それぐらい、2億5千万円ぐらいです。ジャックさんの所は2割が寄付、8割が事業ですが、私どもの国立の場合、または多くの公立も含めてまったく逆なんです。ほとんどが税金。8割か、9割近い。

9割近くが税金で、あとの1割近くは、利用料金でいただいております。よくぞ250万ドル集めるな、とびっくりしています。

佐藤： 私も、財源の面について非常にびっくりしましたけれど、やはりアメリカならではの土壌と日本の状況というのは一緒にはできないなと思っております。ただ、やはりすごく積極的に事業展開をされているなというのを感じました。6つぐらいの大きな事業をやっている。その中に学校、プライベートスクールがあるという。日本とはまったく違うんですけれども、そういった事業展開をされているとういうのは、僕らがやっている自然学校にとっても非常に参考になるポイントじゃないかと思っております。

大西： 私は、もちろん財務のことも、すごく衝撃的だったんですけども、あなたの子どもには自然が足りないという言葉でした。アメリカは凄く自然が豊かで、子供たちも大人の方もアウトドアでいろんな体験をされているようなイメージがあったので、そんな国でもこんな本が出版されるような現状があるのか、すごく新しい視点でした。例えば、親御さんが自然の中でどうしていいかわからないような問題がある。これも、日本とすごく似ているなと思いました。日本の子供って今、遊びと言えどゲームだったり、塾があったり、スポーツ少年団があったり、いろいろな商業施設に買い物に行かなければいけないとか、子供をサービスにしたマーケットって、たくさんあると思うんですね。少子化の中、その子供を取り合っている。お金を払ってもらうためにマーケットが競争しあっているという現状があって、もしかしたら、アメリカでも子供向けのマーケットでそういった問題が発生しているのではないかなと思ったんですけども、巧妙にマーケティング戦略を組み込んでくるいろんなところと、自然体験、まあ自然学校というのが、どういう風に競うのかなと思っています。日本ではこうした広報戦略にどうやったら打ち勝てば、子どもたちを自然の中に戻せるのかなという課題がありますが、アメリカでも同じような問題があるのかなと思ったところです。

岡島： それでは、3団体、節田さんを除く3人の方は団体を率いらっしゃるので、基礎的な数字を教えてくださいたいと思います。下村さんのところは税金をがっぽり使ってい

るので（笑）、金額には大変な差があるかと思いますが、それぞれ基礎的な数字、スタッフの数、予算、それから年間事業、おおまかで結構ですが、3人の方に教えていただこうと思います。じゃあ、大西さんからいきましょうか。

大西：職員数は、いま有給の役員が1名と非常勤が1名、職員が7名ということで、合計9名

がこの仕事によって食ベ口を得ています。年間の予算はだいたい4,000万円前後になります。そのうちの600万ぐらい、20%~25%ぐらいが、大台町の教育委員会からの補助金で賄われています。他の75%程度は自分達の稼ぎです。あと寄付は本当に低い割合しかありません。活動の中身ですけれども、大きく分けて4つの事業をやっております。一つは、環境教育事業というくくりになっていまして、子供向けのキャンプですとか、自然体験



活動ですね。大人の方のエコツアー、登山などもやっている。ここは主に、参加者の方から参加費として収益を上げるような形のところです。委託事業では委託費が入ってきます。そして、もう一つが、環境教育普及事業ということをやっております。人材育成をしたり、講演活動をしたり、いろんなことを普及している部門です。3つ目が調査研究活動。例えば、国の天然記念物であるネコギギという希少な魚のタイプの調査であるとか、生態系に絡むような調査をしております。独自事業の場合もありますし、委託事業である場合もあります。そして地域支援事業というのをやっております。これは、お金はあまり発生しません。こういった事業かということ、地域ではお祭りの時、もちをつく人手もいなくなっています。ですので、もちつきに人を派遣したりですね、あとは地域の方がもちをついて、もち撒きという行事をやるんですね。これはけっこう紀伊半島で多いと思うんですけども、ところが、拾う人がいないという状況になっています。もちを撒くんですけど、拾う人がいない。拾う人も派遣をしております（笑）。

こういったことを、地域支援事業としてやっている。主に、この4つの事業です。

岡島：次に佐藤さんお願いします。

佐藤：2000年にCONEが設立されて、現在10周年を迎えたところです。職員数は5名ですね。若干パートさんもいらっしゃって、つい先日、オリンピックセンターのところに事務局を構えるようになりました。予算規模は、だいたい9,000万円ぐらいです。活動内容については、主に指導者の養成事業、登録事業、活用事業ということになっておりまして、構成会員数は294の団体に会員になっていただいております。登録していただいている指導者数が昨年まで多かったんですけども、この9月ぐらいの数字ですと13,000人です。主に委託事業としては、国の事業、調査研究事業のようなもの、それから各財団等々の調査研究事業というところが、だいたい予算の半分ぐらいですね。

岡島：佐藤さんの場合は、今、CONE の代表もされていますけれども、もう一つ、国際自然大学校を運営していきまして、そちらのほうのお話もお願いします。

佐藤：国際自然大学校の方は 1983 年にスタートしました。今、職員数は約 40 名ぐらい、そして研修生が 9 名います。合わせて 49 名ぐらい。そして、予算規模はだいたい 3 億ぐらい。収入のバランスですけれども、主に主催事業、子供事業ですね。子どもの事業やキャンプの事業とか、あるいは土日を使っての事業とか、こういうのが収入の約 3 分の 1 ぐらいですね。それから、あと 3 分の 1 ぐらいのものが受託事業ということで、学校団体ですとか、あるいは企業とか、いろいろな講師派遣、請け負い、こういった事業が約 3 分の 1 ぐらい。それから残りの 3 分の 1 は、基本的な施設の指定管理者の運営ということで、今現在大きなところでは、埼玉県の一施設、それから川崎市の一施設の指導部門を私どもが担っております。そういったところの収入が約 3 分の 1 ということです。基本的には、子ども達の自然体験活動が中心でして、それに関係する指導者養成事業です。それから、学校などの教育事業に関する支援ということが、主な事業です。

岡島：それでは国立の施設についてお願いします。

下村：国立は 28 施設あるのですが、オリンピックセンターが別格で、残り 27 施設が全国に配置されています。つい最近まで私は岩手山青少年交流の家という国立の施設に勤めておりました。その一施設の状況を申し上げますと、おおよそ人件費から事業費、光熱水道、石油代、油代も含めまして、だいたい 2 億 3,000 万～4,000 万ぐらいですかね。そのうち、先ほど申し上げたように、9 割近くがいわゆる運営費という名の税金です。実は、私どもの施設では施設使用料が青少年と青少年指導者は無料です。会議室を借りるのも無料、グラウンドを借りたりするのも無料です。ただし、大人の利用、一般の企業の研修ですとか、大人の趣味のグループ、そういった方には、1 泊につき 1 人 250 円です。びっくりするぐらい安いですか？ したがって、中学生以上ですと、3 食だいたい 1,600 円ぐらいなんです。なので、1 泊 3 食ついて、だいたい 2,000 円くらいでできる。しかし、それ以外、例えば岩木山登山というような、一日登山をするのには研修指導員一人に対して 18,000 円必要です。それぞれのプログラムには、材料費と指導料がもちろんかかります。職員は 20 人ぐらい、プラス非常勤職員とか、バスの運転手さん、環境整備の方を入れれば 25 名弱になります。ただ、年間にすると 10 万人の利用があります。宿泊だけで 10 万人。日帰り利用を入れて 12 万人の方の利用がありました。これは国立の中の真ん中ぐらいの利用者数です。最も多くは 14 万人 15 万人という利用者のところがあります。行っている事業は、主催事業で、公立とか民間ではできないような事業ということで、例えば、今年から始めたのは児童虐待を受けて養護施設に入所している子どもたちに対する長期のキャンプです。ニート、フリーターの長期泊り込みといった事業をやっております。私どもの指導員が場所を提供する、場合によっては、プログラムを指導するというようなことがあります。それから調査研究事業。今の子どもたちの実態ですとか、体験活動の様子を調査研究して発信しています。こういった施設

は、日本では500くらいあります。東北でも40くらいあるんですけども、その例え、研修会をやったりとか、フォーラムをやったりしています。それから、事業によっては、こういったNPOの方々からだとか、それから従来のボーイスカウト、ガールスカウト、子ども会のような方々とのネットワークを作るような、そのような事業も取り組んでおります。以上です。

岡島： 私の方から三団体について、若干の補足説明をいたします。青少年機構は100億以上の予算ですが、毎年5%切られている状況です。昨年の民主党の仕分けの第1号にやり玉に上がって、いらぬなんて言われました。ですけど、今下村さんがお話ししたように、480万の人が格安で利用しているわけなんです。これは、国民へのサービスとして非常に良いことだと思うんです。無くなったら480万人の人は、今度は有料で非常に高い所に行かなくてはならないのです。

佐藤さんのところは今から25年以上前にスタートしたのですが、10年以上食べない生活が続いた。今では業界1、2を争うような組織に育っています。先ほどシェルビーさんがおっしゃっていた以上に、実は金集めがうまいんじゃないかと思っております。大杉谷は、本当にみなさん行かれたらいいと思うんですけど、ものすごい山の中ですね。JRの三瀬谷という駅から車で2時間ぐらい山の中に、もう川沿いにずーっと、これでもかこれでもかというぐらいに山の中に入っていくんです。あんなところ人がいなくなっても当然だと思うようなところで(笑)生まれて育ったということで、村を助けるのにどんな方法があるのかということ、彼女は彼女なりによく考えたそうですね。青年海外協力隊でフィリピンに行って、フィリピンで子ども達を教えながら考えていたらしいんです。どうしたら、潰れそうな村を救えるかといういろいろ考えていたところで、日本環境教育フォーラムの自然学校という仕組みに出会った。そして有り金はたいて上京してきたんですね。そしたらやっぱり村の人たち、教育長とか村長さんがすごく喜んでくれて、応援しようということで、28歳の時に大杉谷自然学校を作ったんですね。それから10年ですか、よく潰れないで、やっていたと思うんです(笑)。かなりのアイデアが無いと、あの山の中で人を呼ぶのは大変だと思います。

国が国民のために100億の予算を使って事業を立てているところ、それから佐藤さんのように、かなり手広く運営ができているところ、大杉谷のように、やっとならしているところ、それぞれ特徴があろうかと思えます。機構の各施設と公立を合わせると日本の自然体験の骨組みが出来上がるわけなんですけど、そこで足りない部分、どちらかと言えばハイレベルな部分などは民間が補ってくるということになってこようかと思えます。民間の自然学校は1,500から2,000ぐらいあるんです。ですから、ようやく下地が日本ではできてきたところで、これからアメリカのように、大きく展開していくのではないかなと期待はしているんですけど、中々お金が集まらなくて、苦勞している。まだまだマーケットが小さい。子どもの状況についても、これはアメリカも日本も共通なところがあって、今の子どもたちの状況を現場ではどうなっているのかということで、少しお話を

いただきます。そのあと指導者の養成について、そして最後に運営、資金運営をどうしているのか、アメリカの場合と比較しながら、お話ししていただこうかと思います。まず子どもの状況なんですが、節田さん、どうでしょう？

節田：私の方は子供との接点が、残念ながらありません。子供向けのものというのは作ってなく、実は、中高年登山を勧めてしまいまして、姥捨て山状態にしたのは（笑）、私に責任もあるんですけども。そうですね、子供というか、先ほどアメリカでも世代間それぞれに問題があると出ていましたけど、親の意識も非常に低いと思うんですね。トムラウシの調査をやって、生き残った8人の方全員、インタビューして話を聞いたんですけども、非常に生々しい話がいっぱいあるんですけども、その中で一番感じたのは、自然に対する感性といいますか、そういうのが非常に欠如しているというのが一番の印象ですね。年齢はですね、ほぼ全員が60歳代です。平均年齢が65歳くらいではないかと思うんですけど、そういう人たちがガイドさんに連れられて、ひたすら歩いて、悪天候の中、突っ込んでいってしまった。インタビューして感じてしたのは、もうすでに60歳代の人たちですら、そういう自然に対する感性、あるいは対応ですね、そういうのが非常に欠けている。したがって子ども達にそういう機会を作り出すとか、そういうことが、おそらくできない人たちだと思うんです。ツアー登山というのは非常にコンビニエンスなスタイルなんです。集合場所へ行けば、全部ガイド付きです。ですから、そういう人たちの教育と言いますか、そこから始めていかないと、なかなか子ども達に伝わっていかないのかなと、その辺を非常に強く感じました。

岡島：ありがとうございました。次に下村さんお願いします。

下村：平成10年、平成17年、平成21年と、子供の自然体験活動の、実態調査をやっておりまして、それを比較しております。小学校4年と小学校6年、中学校2年の各2万人余を対象にしています。相当な実態が分かると思っております。例えば、「蝶やトンボ、バッタなどの昆虫を捕まえたことがありますか？」といった質問をします。何度もある、少しはあるという子供は平成10年の時は、81%の子供がそう答えたのですが、今回、調査した21年度、つまり10年後には59%で20%ほど減っていました。それから、「海や川で泳いだことがありますか？」については、90%から70%へと大きく減少しています。こうした数字でも自然離れが表れています。ちょうど同じ時期に、もう一つ発表いたしました。子供の頃の体験活動が、その後の人生にどう影響したかを調査しています。20代、30代、40代、50代、60代と、それぞれ男女1,000人ずつ、「子どもの頃の体験がその後の人生にどう影響を与えていますか？」という調査をしたんです。産経新聞では、「子供時代の自然体験で心豊かな人になり、結婚にもいい」と書かれていました。婚活準備は子どもの時から、というところに食らいついています。週刊女性はどこに食いついたかといいますと、「まだ間に合う、子どもの将来の年収を決めるのは、学歴じゃないよ、体験活動だ」と書いていました。一般のお母さん方に「自然体験というのは、動植物に対する愛情を育みますよ」とか、「人と調和しますよ」と抽象的に言

うのもいいんですけど、女性週刊誌のこういう取り上げ方は、自然体験活動が大事なんだということを、広く広めることに役立っていると思います。自然体験活動が大事だよという、国民運動というんでしょうか。CONEさんや関係の企業の方々を含めて一緒にやらなくてはいけないと思っております。

岡島：ありがとうございました。体験格差という言葉があるらしいですね。自然体験するのはお金持ちしかできなくなっているということです。お金を払って子供を体験させたいというのは、東京ではたくさんいるわけですけども、ある一定の年収がないとなかなか、子供をそういう所に入れられない、ということがある。

佐藤：私ども、28年前からこうやっておるわけですけども、当時はこういう活動、特に2泊3日、3泊4日のキャンプなどに参加するには、だいたい小学校4年生以上だと言われていたんです。自分のことを自分でできる年齢を対象にして、親はついてはこないというキャンプですけども、その傾向が年々が崩れていきまして、先ほど岡島さんがおっしゃったけれども、要は参加者が低年齢化している。上の学年の5年生、6年生は本当にぱらぱらしかいなくて、小学校4年生以下が大体7割、8割という状況になってきております。そして6,7年前から4歳児、5歳児を対象にした事業を行うようになり、今はむしろそちらの反応の方がいい。親のニーズとうまく合致してその年齢の子どもたちが増えてきています。その中で子供たちの状況を見ていると、アレルギーがずいぶん増えていきます。それから、異年齢で遊ぶという経験がないんです。上の子に対する関わり方、あるいは逆に下の子に対する関わり方というのが非常に下手です。結構、一日目、二日目にはごたごたすることがある。でもだんだん慣れてくる。自然離れのことで、子どもに、「さあ、行って遊んでいいよ」と言っても、何をして遊んだらいいか分からない。つまり、経験がないんです。木登りだとか、川に行って石きりなどの遊び方を知らないわけなんですね。そういうのを教えてあげると、結構乗ってきてですね、覚えれば、昔の我々の子どもの頃の状況とそんなに大差は無いんじゃないかなというのが、私の認識です。

岡島：大杉谷の方はどうでしょう？

大西：私どもの町には、「しゃくり」という鮎の伝統漁法があるんですね。綺麗な川がありまして。男の子たちは、しゃくりが解禁になったらいつもそこに全員行っていたんです。ところが今、その町の学校が廃校になって、統合されて、今、小学生が120人ほどいるんですけども、その中でしゃくり漁ができる子はたった1名になってしまったんです。今、やろうと思ったらやることのできるんですけども、子供がなぜか自然の活動とか生活に密着した活動から離れてしまっているというのが現状です。それから、餅作りとか薪割り、そういった体験をよく子供たちにしてもらっています。そうすると、体の使い方が明らかに異なります。今、80代のお婆ちゃんが餅つきを見せてくれるんですけども、その80代のお婆ちゃんは若手のスタッフや子供たちよりすごく早く上手に餅をつくことができるんですね。あと、薪割りも体の力をほとんどに使わずに、どンドン

早いペースで同じ大きさの薪を作ってくれているんですね。そういったことがなかなか子どもたちにはできない。体の使い方というのが、非常に難しい。ただ、子供たちは何回かやるとすごく早くコツをつかめますので、完全にできていないというわけではなく、やらせれば必ず習得ができる。三つ目は、子供たちの親の世代が自然体験とか文化的な関わりから離れてしまっている。私たち地域はお祭りがたくさんあるんですけども、どれもすごく継承している方が高齢化しています。年齢構成がきちとした地域に行っても、祭りを継承している人はなぜか高齢者ばかりなんです。若い方は何をしているかという、よさこいソーランのグループにいて踊ったりしています。自分たちで新しい文化を作っているという現状があるんです。ですので、そういった子供たちの親の世代が、地域の文化、歴史と交わらない。

岡島: 今の子供たちが自然の中で遊ぶことがどんどん減っているということですね。昨日私も話しましたが、子どもの体力も落ちてきているという現状があります。しかし、中でもチャンスを与えれば、みんなやるし、できるようになる、ということですね。チャンスを与えるというところあたりが自然体験活動の中心になると思います。もう一点は、アメリカでもそうなんでしょうけど、親の世代が自然体験を知らなければ、自然体験が頭の中に浮かんでこないですね。子供を連れて山に行こうなんていうことが発想として生まれてこない。親に対してもやはり何らかのアプローチが必要ですね。本来であれば、昔の日本の子供のように勝手に遊んで、勝手に大きくなれば、それは理想ですよ。ところが、今はこうなっているんで、何とか社会的なシステムとして子供たちと自然を結びつけるような作業が必要ではないかということですね。続きましてお金のことをちょっと議論していきましょうか。お金というと、下村さんのところは？まあ、税金だから（笑）。

下村: 子どもゆめ基金という 100 億円基金がありました。それはだめだよと言われましたけど、民間からいただいている基金が 7,000 万ぐらいあると思います。そういう形で 7,000 万を基金に私ども努力はもちろんしております。それから、本当に小額でお恥ずかしいんですけど、岩木山青少年交流の家にいたときは、いろんな事業をやる時に企業の協賛という形で 1 企業当たり一口 2 万円以上でお願いしますということで、30 万円ぐらい、15 社ぐらいでしょうかね。どれだけ頑張っても 30 万ぐらい。それぐらい集める努力はしております。

岡島: 佐藤さん、NOTS の方ですが、経営的にどんな状況で推移してきたのでしょうか。

佐藤: そうですね、始めたころは、それこそ年間 500 万ぐらいのところからスターとしてきたと思います。一つは、5,000 万円という壁ですね。なんとなく 5,000 万円をいつ越えるかというのと、さらには 1 億円を越えるという壁がある。うちの場合、1 億円を突破するのに十数年かかっているのではないかと思います。寄付は、アメリカ的なファンレイジングのようなものは実はあまり無かった。ただ、NPO ですので今後は可能性があるのかなと思っています。

岡島：大杉谷はどうですか。

大西：お金のことに関しては、正直あまり語りたくないと思っていますね（笑）。なぜかと言うと、私たちが今ぶつかっている問題が、限界集落、過疎高齢化の問題なんですね。なぜ日本の社会から、地域社会が見捨てられてきたかという、全部貨幣経済に集約されるんですよ。お金で全部解決できる世の中が、私たちの集落をこんなにした。お金は敵だ、みたいな（笑）。とはいってもお金はすごくウェルカムで、あったら良いなど思うものなんですけれども、実際にいろんな方からもっと自分たちで自主事業をして、お金をかせぐような方法を取った方がいいのではないかといわれて、まあ、そうだなと思います。しかし私たち実はですね、出稼ぎ体質というものがあります。どういうことかという、その地域でお金を稼いでいるわけではなく、例えば、全然違う町に行ったり、都会に行って事業を展開したりして、そこでお金を稼いで自分達の地域に循環させている。そして職員を養っている。都会に出て行った方がよっぽど稼げる。そのようなところですよ。もう1つ、なぜ地域社会に住んでやっているかという、今ライフスタイルがすごく変わってきていて、若者の中では、厳しい経済社会を都会で過ごすのではなくて、田舎でちょっとのんびりしながら、ゆったりとした生活を送りたいという人もいますよね。そういう人は、あまりお腹一杯にならない環境で働いても構わない、私も含めてですけれども。そういったことがあるので、やっているというところがあります。

岡島：それぞれの学校なり、団体の理念ですが、ミッションがあるから、それに基づいてやっているということだと思います。ジャックさん、シェルビーさんの方で寄付をいただくというのですが、日本とは前提が違いますので、日本ではなかなか寄付がもらいにくい状況になっています。私が今理事長をしている日本環境教育フォーラムというところは企業とコラボレーションすることで成り立っています。例えば、子供たちをここに連れてきて2泊3日を過ごさせて、帰す。それを例えばA社が企業のCSRとしてやりたい場合、そのプログラムを例えば500万で引き受ける。その運営を我々が全てやる。そういうような形で、損保ジャパンさんとはもう19年間、市民のための公開講座というのをしています。トヨタさんとはトヨタ自然学校をずっと一緒にやっている。NECもドコモもアサヒビールとも一緒に仕事をしている。ということで、それぞれの企業から500万から1,000万ぐらいの規模でお金を出して頂いて、こちらは頭を使う、そして、国民のために何かする。そういう関係で大体1億以上です。2億5,000万円ぐらいの我々の運営資金のうちの3分の1か半分の近くが企業とそういう形でコラボレーションしている。そういうことによって管理費を生み出している。以前ジャックさんと話したところ、アメリカはあまりそういったことがないようですね。アメリカでは寄付です。もらったお金を自由に使うということですから、我々は、我々のミッションに合うような、環境教育に資することでしたら企業にお金を出してもらって、我々は代わってそれを行うという形で、企業のCSRの一端を担うということによってやっております。日本の子供のために企業にお金を出してほしいと言うと、理屈が合えば助けてくれるんですね。

逆に言うと、限界集落のためにお金を出してって言って、出してくれるかどうかですけど（笑）。下村さんのところは、企業とのコラボレーションということは、あまり無いですか？

下村：オリンピックセンターに企業のネーミングを導入したらどうかという話もあったりしたかと思います。

岡島：例えば、私もよく言ってますけど、富士フィルムと写真教室をやって、仲良く山岳写真のプログラムを作ってね、全部、富士フィルムからお金を出してもらってという方法もある。でも、まあ、そういうようなことはあまりやっていないか。

下村：そういうことは、私が知っている限りでは施設では無いですね。

岡島：山岳ガイドって仕事になるんですか。山のガイドが足りないって言っていましたね。

節田：今日、磯野氏の話にもありましたけれども、一応、国際山岳ガイド連盟に加盟している日本を代表する全国的な組織としては山岳ガイド協会というのがあるんですが、そこで、認定されているのは800人ぐらいです。ただ、ツアーガイドのお客さんはだいたい延べで40から50万人ぐらい。一人の人が、何回も行っていきますのでそれぐらいになります。延べで40~50万ということは、圧倒的にガイドは足りないわけです。しかも800人のガイドのうち、いわゆる個人とか小さな団体のガイドをする人が半分ぐらいですので、実質は400人ぐらいしかいない。トムラウシの事故を受けて観光庁もその点が気になりだしています。ツアーガイドの団体が2つあります。日本旅行業協会と全日本旅行業協会です。そういうところとガイド協会が一緒になって考えていこう、そのためにはやはりガイドのスキルアップが一番大切であり、数も圧倒的に足りないということになっています。もちろんガイドの社会的な地位も上げていかなくてはいけない、待遇改善していかなくてはいけないといったような問題が出てきています。あとは、もうちょっと指導的、教育的な考え方をしっかりしてもらえると、一般のお客さんのレベルも上がっていくんじゃないかと思っています。

岡島：では、どうしたらいいか。オリンピックセンターのデータにしても、子どもたちがもう少し自然に接したほうがいいだろう、ということですし、みんな漠然とした感じでそう思っていると思います。しかしなかなかうまくいかなくて、どんどん自然離れが進んでいる。この自然体験活動全体のマーケットの将来のようなものも含めて、お話をいただきたいと思うんですが、佐藤さん、いかがですか？

佐藤：将来的には我々の仕事が無くなるのが理想だと思います。つまり、昔ながらの風景がそこに生まれていけばいい。しかし現実的に考えるとそういう状況になかなかならないから必要枠という中で我々の仕事があるのかなと思います。現実には、やっぱり子どもたちの状況は悪い。あるいは、そういう子どもたちが大人になって、いろんな意味での歪みが出てきている。それが社会問題化してきているという状況がある。まだまだ私達が頑張らなくてはいけないと思います。特にCONEはですね、これからはもっともつと結集していく方向が必要なのかなと思います。かつてはそれぞれの団体が、独自で動

いていたものが、なかなか情勢的に厳しい状況になってきている、ということも背景にあって CONE ができあがってきたんです。

2002 年には自然体験推進議員連盟ができた。今、国会議員の先生方と自然体験活動推進法といったものを作ろうとしています。それを後ろ盾にして国家的な動き、あるいは予算や待遇をきちっとしてもらえるような対応も必要なんじゃないのかなと感じております。そろそろ若い人たちに引き継いでいくためにも、きちっと社会的に認知されていくことを目指していく必要があると思います。

岡島：連携ですね。いろんな人たち、地域の人たち、いろんな方々が、世代を越えて、連携して行って盛り上げていきたい、そうする必要があるんじゃないかというお話でした。大西さんいかがですか？

大西：私はですね、今本当に自然体験というのが、なかなか文化として定着していないというのが問題だと思うんです。本当に田舎はですね、自然に近い地域というのは生物多様性がすごく高いんですね。生物とはいろんな生き物とかそういうものなんですけれども、人間の多様性もすごくあるんです。こんな変わった方が、という人も田舎にはいるんです。田舎というのは、すごくいろんな方を受け入れる多様性が高い。受容性が高いと思うんです。なのに、どうして、都会で厳しい辛い生活をしている若者が多いのかなと思って、すごく残念だと思います。インターネットカフェで住んでいる人とか、なぜ田舎に来ないんだと私は思うんですね。そういう人たちは、田舎はそういう住みやすいところだっていうことをご存知ないと思うんです。それは小さい頃から知らなかったからだと思うんですね。若者を田舎に送りこむ制度もあります。田舎で働き隊とか、集落支援員、そういった制度もあるんですね。徴兵ということではないんですけれども、徴田舎制（笑）、強制的に田舎に送りこむ、みたいなものをなんとか制度にさせていただいて、田舎がいい、自然がいい、こういった価値観を持ってもらうことが大事で、そうすれば無理なく田舎や自然が好きになるかと思っています。

岡島：イギリスでは大学の受験が終わって入学が決まると、一年間、世界中どこに行ってもいいからボランティアをしてきなさいという制度がありますよね。そういう制度があったらいい。ボランティアとか田舎体験とか芸術体験とか何種類か用意して必ずそれを通してしないとイケないとかね。下村さんいかがですか。

下村：先ほど、必要枠ですか？私はそうは思わなくて、地域での日常的な遊び方とか、体験が復活したって、やはり大西さんと佐藤さんのような NPO の人たちが必要だと思っています。それは、学校や家庭や地域で日ごろできないような、例えば、圧倒的な自然の中での五感で感じる自然体験ですね。それはやはり教育効果、学習効果が高いと思うんです。だから、地域の伝統的な自然遊びが復活すればいいんじゃないかと私は思いません。田舎体験、自然体験は必要だと思っています。それから、国立も今、事業仕分けという厳しいことになっているんですけど、公立の青少年教育施設もかつて、昭和 34 年に第 1 号ができてから 30 年、40 年、50 年経って、施設が老朽化になって、耐震のお金

も得られないということで、たくさん廃止になっている。ピークは、平成14年には718校の公立の施設があったんですが、平成20年では516で、200ぐらいこの時一気に減ったんです。国立は国立で事業仕分けということになっております。それで、先ほど国民運動というのがあったんですが、私ども今年度から始めたんですけれども、こういうチラシを置かせていただきました。体験の風をおこそう運動というものです。もちろん私どもだけではなくて、CONEさん、中央青少年団体連絡協議会、ボーイスカウト、ガールスカウトさんなども入りまして、国民運動にできればしたいなということでやっております。10月を体験の風をおこそう推進月間としています。この間の10月23日ですか、民間団体の多くの方が参加しておりましたが、まだまだそういうことやっているなどということをご存知無い方が多くいます。まだ始まったばかりでございます。こういった形で幅広い方々が連携して国民運動にしていきたいと思っております。

岡島： 節田さん、全体を見てどうでしょう。この手のものの将来性というのか、課題も含めてなんですが。

節田： そうですね、私の個人的な体験も含めてそうなんですけれども、国としてまさに一番大切なこと、一番投資しなきゃいけない部分だと思います。下村さんがおっしゃるように、なんとか国民的な運動に持っていくためのオペレーションをそろそろ具体的に考えないといけない。その中に佐藤さんが言ったような活動も必要だなと思いますし、先ほど、岡島さんが自然学校は1,000か、1,500ぐらいですか、全国に。そういうその学校の実態調査等もしっかりできてないですね。そういう人たちにもっと声をあげていただく、あるいはそういう人たちがどうやったら支援できるか。私のいた山と溪谷も含めてマスコミの応援というのも非常に大切なことだと思います。

岡島： ありがとうございます。節田さんにシンポジウムのまとめをしていただきました。それでは、この辺りで終わりにしたいと思います。会場の皆さん、長い間ご静聴頂きありがとうございました。またご出席の皆さんありがとうございました。

(一部抜粋)

特集2 環境思想シンポジウム「環境思想の現代的意味を問う」

2011年3月28日(月)

日本の自然体験や野外活動のプログラムには欧米からの輸入プログラムが採用されることが多い。しかし、欧米のプログラムにはそれぞれバックボーンに欧米の思想がある。日本の思想とは若干の違いがあるため、欧米からのプログラムを直輸入すると消化不良を起こしやすい。こうした問題を改善するため、欧米の環境思想と東洋的な環境思想との溝を埋める作業が必要となってくる。仮に日本で環境思想がある程度形作ることができれば、それを基礎に欧米からのプログラムを日本的なものにアレンジすることが可能となるに違いない。また日本型プログラムを欧米に紹介しやすくなるだろう。一方、欧米で発展してきた環境思想を日本の古典と比較検討することにより、東洋における人と自然との関係について、欧米の人々にも説明しやすくなる。地球環境問題が複雑に絡み合っ解決への道が見えない中、現代の環境思想は世界の英知を結集して一日も早くその方向性を見出すべきであろう。安藤百福センターではこうした基礎的な課題に対して、研究を重ねていく方針で、センターの開設初年度から環境思想の研究に取り組んでいる。今回のシンポジウムはその第一弾であると位置付けている。

講師	「欧米の環境思想」	加藤尚武	(京都大学名誉教授)
	「儒教と環境思想」	佐久間正	(長崎大学環境科学部学部長)
	「現代の環境倫理」	鬼頭秀一	(東京大学教授)
	「江戸の環境思想」	関 智子	(青森大学大学院准教授)



第1部 基調報告

岡 島： 昨年の五月にこのセンターが出来まして、いろいろな講座を開いておりますが、今日は哲学者の加藤先生はじめその道の専門家の方々にお集まりいただきまして、それぞれの分野よりお話しいたします。そして4人の方のお互いのディスカッション。時間があれば、皆さんとの議論もして頂くということにしたいと思います。福島原発もまだまだ危ない状況が続いている中で非常に厳しい選択ではありましたが、良く考えてみるとこの原発の問題は環境思想の課題でもあることなので、予定通り開催することになりました。それでは早速始めたいと思います。お一人目の講演者である加藤尚武先生は日本の哲学者の第一人者で、どなたもご存知の方です。私の方で欧米の哲学思想という非常に大きなタイトルをつけてしまいましたが、選んでお話しいただけるとと思います。加藤先生、宜しくお願いいたします。

加 藤： 欧米の環境思想をどういう風にまとめるかといいますと、1つは神様をどう見るか、



自然をどう見るかが欧米では密接なつながりがあったと考えます。たとえば有神論 (theism)、理神論 (deism)、汎神論 (pantheism)、無神論 (atheism) のうち有神論 (theism) は神様が無から自然を作る。それから、無から神様が自然を作ったというので創造神という風に考えられます。そして、それを裏付けするのがキリスト教とは無関係なプラトン主義でありまして、我々が肉体を持って見たり聞いたりするものは全部インチキであり本当の世界は純粹

な観念(イデア)の世界であると言います。決定的なあの世主義的考え方です。こういう見方は、教育論では獣性克服論になります。教育は子供の中に宿っている獣と同じ性質を消して精神の秩序を作り神様に近づけること。教育論だけではなくて庭を作る時も木は自然に生やしておくで余計な生え方をするので幾何学的に樹木を整えれば精神に近づいていくという考え方になります。人間の精神は自然よりも上だというので法、規範、社会制度、国家、都市、数学、幾何学、記号、文字、機械、道具これらはすべて自然が人間にもたらしたのではなくて人間が自然にもたらしたものである。その究極の根拠は、人間は自然を超えたイデアの世界と繋がりを持っていて、イデアの情報を持って生れてきているからという考え方です。ですから超越神(世界の外にいる神)が無から自然を創造したというプラトン主義的有神論が西欧の自然観の中心にあるものです。それに基づくと、登山の文化では初登攀を狙うと桑原武夫さんの『登山の文化誌』に書いてあります。自然を征服したいという強い気持ちで臨むことが彼が経験した登山の文化だと言っております。シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』

には「自然がその前に向かってこれこそが人間だというような男」というセリフがあり、これは全自然に真っ向から対決できる人間、これこそが本当の人間だという人間観を表しています。自然を征服する反自然的な存在こそ人間だという見方がヨーロッパの中にはあります。これほど反自然的な思想はヨーロッパ以外の文化では乏しかったのではないかと思います。

ところが、これを裏返しにした自然主義が現れてきます。有名なのはジャンジャック・ルソー（1712-1778）で、教科書では自然に還れと述べた人と書いてあります。研究家に言わせると「自然に還れ」という言葉はルソーの書いた本の中に1行も書いていない。だが、それに近い表現がいくつかあります。もっとも代表的なのは『エミール』の中の、自然は人間を幸福で善良なものとして作ったが、文化が人間を墮落させ悲惨な状態にしているという言葉です。ゴーギャンがタヒチ島に逃れたのもルソーの影響でありますし、ターザン映画が作られたのもルソーの影響です。野生児が文明人よりも優れた能力を持っているという野生児信仰がありまして、それを最初に取り上げたのがルソーです。最近日本で盛んになったゆとり教育がどこから始まったかといえばルソーからです。ルソーは消極主義という言葉を唱えて、教えないのが最高の教育であるといえます。人間の本来持っている自然の力を発揮させることが教育であるから、それを捻じ曲げたり、押し曲げたりするのはいけない。例えばルソーの時代には赤ちゃんをぐるぐる巻きに包帯を巻いて寝かせるという育児法が盛んだったが、それに対して、子供の自由を束縛するといつて非難したのはルソーです。また、「あんよ紐」をつけて歩かせることに反対したのもルソーです。そして、安全な環境を与えてそこで自由に遊び、動けるようにしなければならないといいました。「神即自然」という汎神論を背景にするとルソーの考え方は大変わかりやすくなるのではないかと思います。ルソーの場合には環境保護の考え方が出てこないのです。自然に対する愛、自然は美しい、素晴らしい、自然の精神を完成させる。だが、自然を保護するという観点はルソーからは出てこない。自然は弱いという観点が入らなければならないです。そこで自然は弱いことから自然を守る姿勢が必要で、文化も自然の一つの変容だが、それは自然を守ることによってこそ文化も守られるし、自然を破壊してしまつては文化も破壊されてしまう。こういう立場が現代の自然保護思想のもとになっていると思います。温暖化や臓器移植、遺伝子操作、核開発というのを挙げたかという、19世紀までの技術では温暖化は、臓器移植、遺伝子操作、核開発は19世紀までの技術には無かった。19世紀までの技術はどんなに人間が自然を加工しても、自然そのものが持っている理法、掟の枠の中に含まれている。だから、「人間は自然に従うことによって自然を征服する」というフランシス・ベーコン（1561-1626）の有名な言葉で、技術を表すもっとも根本的な考え方です。これは、征服するという風に重点があるわけですが、これを逆に取れば人間がいくら自然を征服したつもりでも、それは自然という枠の中でしか行えないわけです。ところが、温暖化や臓器移植、遺伝子操作、核開発

はベーコン的な意味での技術の限界を破って自然そのものがここで止めればよいという限界を打ち破る面を持っています。自然に従うのでもなければ、自然を征服するのでもなくて自然を守らなきゃならないという立場が 20 世紀の真ん中から後半に出来上がった自然保護思想です。

ハイキングや鳥の観察に関係する考え方で、神学的には神と自然は根源的に一致するという理神論 (deism) という考え方があります。理神論 (deism) はイギリスの自然保護思想の原型になった思想です。『自然における神の知恵』というのが理神論の代表的な著作です。これは植物分類学のジョン・レイ (1627-1705) が書いた本です。ジョン・レイの本の中味をそっくり盗んだペイリー (1743-1805) という人がいまして、この方は天才的な小説家でそれを上手にまとめて本を書いた。ダーウィンはペイリーを読んだ時にペイリーの基になったジョン・レイを読んでいけばそこに生物の種というものの最初の明確な記述があつて種は永遠であるという考え方に気づいたはずですが、まだジョン・レイを読んだかどうかわかっていない。今 3 つあげた中で、有神論は、自然を征服しようとする立場、自然を征服する時には文化は自然より上だ、肉体の方が精神より上だというのは幻でアイデアが本当の存在だという考え方です。それに対して反文明主義、自然は人間が幸福になるように作ったが、社会制度は人間を不幸に陥れているというルソーの立場がある。それから現代の技術の発展によって逆に理神論や無神論の立場から自然保護の考え方が出てきたことが大枠ではないかと思えます。これは、ゲーテ (1740-1832) が、自然の中にいた時に自然の生命を感じるという文章ですが、「やせた砂丘の斜面を這っている灌木が、自然のふところ深く燃えている神聖な生命を、ぼくに明らかに示して見せてくれる。ぼくは、あふれるばかりの豊かさを感じて、まるで自分が神になったかのような気がするのだ」この『若きウェルテルの悩み』に出てくる文章は、汎神論的感情を表現しています。

ゲーテが教会に離れた理由の一つは神様はそこ (教会) にあるものじゃないというルソーもゲーテも女性と永年同棲した後に、正式に結婚しています。決定的な喧嘩はせず、キリスト教会と一生涯関係を保ったというのが女性関係からみたゲーテとルソーの特徴である。理神論や汎神論といわれる立場で教会とうまくやっていった。このゲーテ的な汎神論的自然観はエマソンやソローのようなアメリカの思想家と共通しています。「精神が受ける影響の中で、時間的にもっとも早く、もっとも影響があるのは自然の影響です。日ごとに太陽、そして日没のあとは夜と夜の星達。いつも風が吹きいつも草が茂ります。学者にとって自然とは何でしょうか。神がおりあげるこの布の不思議な続き模様」これは典型的な理神論的考え方です。この中には連続的考え方が入っていて、自然には秘薬なしという考え方も含まれている。そして、「始まりもなく、終わりもなく、いつも自分自身に立ち返る循環能力が備わっている」これは、自然の中には連続はあるけれども自然は永続するという見方です。たとえば、麒麟の首が長くなったということをエマソン (1803-1882) に聞いたら認めますと言うでしょう。

いつか地球上から生物がいなくなるかと聞いたら、自然の再生能力というのはいわば自然そのものの根源的な力であって、自然はどんなに傷つけても再生していくというでしょう。

では、福島原発の事故から農業は再生するのでしょうか。チェルノブイリの農作物が作られるようになったと言っても元のチェルノブイリは無いでしょう。そういう風に考えると自然は根源的に循環的で自己再生能力を無限に持っている存在ではなくて、自然にある人工的な変容を加えたならば、それは元通りにはならない。そういう弱さを自然は持っている。自然は永遠に循環しているという見方よりも、傷つけられたら元には戻らないという考えの方が正しいのです。

次にダーウィン(1809-1882)ですが、「自然には固有の目的が存在するのではなく、さまざまな生物種の環境への適応が、あたかも合目的性が支配しているかのように見えるだけである」という考え方を述べています。

エマソンにしてもゲーテにしても自然の中にはどうしてもこれを実現するんだというある目的性があるそれが自然物に内在していると考えています。しかし、ダーウィンによれば、目的のように見えるものはすべて生物種が環境に適用しようとする個別的な因果関係の長時間にわたる総合の結果である。ダーウィンは、自然の中から合目的性を追放してしまう。「自然の合目的性は、生物の自然淘汰、性選択の結果である」ということになります。欧米の自然概念は、有神論、理神論、汎神論をへて、無神論となる。ダーウィンという人の学説は、その当時では認められていないし、最近になってやっと認められたわけです。私はアメリカでクリックと共同で DNA の構造を明らかにしたワトソンに会った事がありますが、ワトソンは我々の科学的な知識が乏しいことをよく知っていて、初等的な素晴らしいレクチャーをしてくれました。それで、ダーウィンとメンデルは会うことがなかったが、自分の研究、つまり DNA の研究によってダーウィンとメンデルをちゃんと科学的に裏付けができたわけです。そういうお話をワトソンから聞かされたことがあります。ワトソンの DNA の発見によって初めてダーウィン主義の裏付けになったわけです。実は、ゲーテは自然科学の歴史の中では一番有名なのはニュートン批判をしたことです。ルソーは自然はすばらしいと言ったけれども、その自然がニュートン力学的な自然なのか、それともフラゴナールが描いたような絵の中の自然なのかを何も考えていなかった。ゲーテの段階になって初めて物理学、化学、生物学という 3つの領域が自然科学の中で成り立つのだということがわかって、ゲーテはその問題に一生涯取り組むんです。ゲーテとダーウィンは会わなかったけれども、話題は非常に共通していたんじゃないかと思います。ゲーテはイタリア旅行する時も、お付きの召使がやめろと言うのにどうしても石を拾って馬車の中に入れるんです。ダーウィンもまた石のコレクションが有名でありまして、ゲーテとダーウィンは石のコレクションをめぐる一晩中でも話し続けたんじゃないかと思います。ゲーテの晩年の著作には『親和力』という小説があるんですが、素晴

らしい小説なんですけども、親和力というのは科学用語で、英語で言うと **affinity**。これは、化学結合が起こる時にある特定の元素はある特定の元素と結合のしやすさがあり、その結合のしやすさのことです。ラヴワジェの『化学原論』(1789)を読むと、その当時の代表的な化学の教科書ですが、読んですごいなと思ったのが親和力について、スーパーケミストリー、今の訳語で言うとメタケミストリーと規定しています。メタケミストリーの領域に属するものでそれを論証する方法は無いから自分はそれについてあえて言及しないが非常に重要だという趣旨のことが書いてあり、ゲーテは多分それを読むことが出来たんですけども、ゲーテは科学上の親和力が男女関係の選択の力として働くのではないかという設定で、素晴らしい恋愛小説を書きました。ぼくは映画にしたらいいと思います。ドイツでは評価が低くて、ゲーテの本の中で1番売れないというくらいです。ダーウィンが注目したのもどうして生物はセックスの相手を選択するのかという問題で、これはいわゆる自然淘汰とは別に性選択論というダーウィンの大きな研究領域があるので、ダーウィンとゲーテが会ったならば(ダーウィンはゲーテを読んでいたが『親和力』は読んでなかったんじゃないかと思いますが)おそらくその問題ではずいぶん話を沸かせたと思います。生物学の知識では断トツの違いがあって、地質学の知識でも断トツの違いがあって、それはゲーテにとってショックになるはずだと思います。何ヶ月間かの観察では間に合わない20年、30年と1つの領域を緻密に観察して記録を残していくことによって初めて明らかになるような領域だということにゲーテが気がついてショックを起こすかもしれない。ゲーテもその当時の自然科学としては最先端に近いところにいましたが、ゲーテとダーウィンの間には非常に大きなギャップがあります。それは、ゲーテがあくまでも自然の目的は自然に内在するという内在目的の立場をとっていたからです。ダーウィンの場合には目的は内在するという考え方を徹底的に追放出来るかという観点から自分の自然観だとまとめていったわけです。

こういう風にキリスト教文化の中での自然という考え方は、キリスト教が無かったら一気に進んだかもしれないのにキリスト教があったおかげで様々なキリスト教の傾向やキリスト教との距離感があって最後にダーウィンに到達して現代生物学が出来上がっていくことになりました。キリスト教文化は、無駄足の文化といたらキリスト教徒が怒るかもしれませんが、ひどい無駄足だったのは確かです。

そこで、鬼頭さんの領域になると思いますが、アルド・レオポルドはダーウィニズムが現代的な意味で完全に理論化、科学化されるだろうという見込みをどの程度知っていたかはわかりません。「あるものは生物共同体の統合、安定、美を保つ傾向にあるならば正しい **right**、反対の傾向にあれば間違っている **wrong**」「正 (**right**) とか「不正」(**wrong**) とかの法律用語と価値用語として使われるライトやロングは結局生物共同体の中での総合の度合いから解釈されるべきだ。だから、人間も人間でないものも全部一つに包んだような価値体系が可能だということを書きました。書の場合にはお

互いに約束を守る信頼度について相互了解が成り立っているわけですから、人間世界の中での約束や規範と、言葉を通じている約束が出来ないことを、ひとつの全く完全な共同体にするということには初めから無理があったと思います。

もう一つは、現代世代と未来世代という問題です。これは、1970年以後になって非常にはっきりしてきたことです。1970年までに書かれた多くの物を見れば、未来の世代は現在の世代よりも良い生活をする事ができるという考え方が出ています。現代世代が豊かになればなるほどそれを超えてもっと未来世代は豊かになるだろうという成長理論が色んな形で作られてみんなが感心して何だ日本はこんなに低かったのか。もっと上まで行けるんじゃないか、という風に考えていた。ところが、『ローマクラブ報告・成長の限界』（1972）が出版された後になります。現在の世代が多く使えば未来の世代が使えるものは少なくなる。廃棄物について現在の世代が多く排出すれば未来の世代の利益が少なくなる。現代世代と未来世代は対立する利害関係にあるので、現代世代は繁栄と経済成長を遂げれば未来世代の条件は悪くなる。現代では経済成長を最大限にすることが政治の目標になっています。本当は、未来世代と現代世代のいわば妥協点をどこで図るかという形で資源を管理し、廃棄物を管理するというのが政治と経済の根本的なあり方にならねばなりません。選挙になるともっともっと成長させて私の党に投票すれば経済成長をやってみせますと言う。

アルド・レオポルドに対する見事な反論を書いているのがエピクロスです。「生物のうちで互いに加害したり加害されたりしないことに関する契約を結ぶことのできないものどもにとっては、正も不正もない。互いに加害したり加害されたりしないことに関する契約を結ぶことができないか、もしくは結ぶことを欲しない人間種族の場合でも、同様である。正義は、それ自体で存する或るものではない。正義は、人間の相互的な交通のさいに、互いに加害したり加害されたりしないことに関して結ばれる一種の契約である」この言葉を語ったエピクロスはローマ時代の人ですが、奴隷も女性も人間として平等に扱うという原則を貫いています。結局近代法はエピクロスの思想の再確認です。

ルーブル美術館にプッサンの「アルカディアの黒人」という作品があります。これはアルカディアという実在しているけども実は空想的に美化された自然の楽園の牧人なのですが、羊飼いであるはずなのにすごく知的な顔をしています。これは、牧歌的田園という理想郷がキリスト教文化の中での異教文化という形で続いていたということがヨーロッパの自然観にとっては非常に大きな歴史的な意味を持っています。人間は自然の牧人です。自然を見守りつつ保護するのです。自然を守るというのは自然を人間の共同体の一員にするということではなくて、人間は人間の共同体として自然に対して責任を負うべきだという考え方。レオポルドをそのまま使うのではなくて、むしろレオポルドの精神を生かそうとするならば、人間は自己の共同体の全責任において自然を守るべきだという自然に対する人間の責任の考え方でレオポルドを受け止め

直した方が良いと思います。

10 万年のうちの歴史から現代の産業革命後の文化を見た時、産業革命から始めた化石燃料を使い果たして、歴史上最高の量的な繁栄を記録したが、貧富の格差を縮めるところか拡大し、人類は生物種を大量絶滅させた結果、荒廃した大地だけを残したと言われかねません。10 万年先の歴史家から、こういう風に言われたいようにするということが私たちの課題になるのではないかと思います。

最後に、自然を支配せよ、自然に従え、自然を管理せよという三つの選択しかないのであれば、我々は責任を持って自然を管理するという対処をせざるをえないと思います。

持続可能性の必要条件ですが、人間が産業社会を維持するとしたならば、まず第一に再生不可能型資源への依存からの脱却が必要です。エネルギー資源は循環型資源に置き換える。金属については可能な限り再生利用するが、究極の解決方法は再生不可能な使用形態を禁止する。再生可能であるような使用形態に限って金属の使用を認める。軍事目的の金属使用を禁止するのが良いのではないかと思います。第二は、廃棄物の累積の回避です。CO₂だけでなく、様々な分解困難な化学薬品、鉛などの金属も累積しつつあります。抑制に成功したのは、フロンガスぐらい。三番目は、いかなる生物種も絶滅させない。生物種の開発を促進する。これはいろいろ異議が出るかもしれないが、おそらくあらゆる資源は全部生物だけになってしまう可能性がある。その時に生物種の開発をしないで人類が生き残れるかどうかは厳しい課題になるのではないかと思います。

ですから、結局、自然に対して合理的な管理をするということが歴史的な課題になり、持続可能性こそが産業社会の基盤になるようにするというのが今私たちの社会に対する改造目的になるのではないかと思います。

岡 島: 加藤先生ありがとうございました。それでは続きまして長崎大学の佐久間先生お願いいたします。加藤先生は欧米の事を中心にお話しいただきましたが、佐久間先生は日本思想史の先生です。そして、日本環境思想史というものを作っていきたいとおっしゃっています。今日は儒教などを中心にお話しただけだと思います。

佐久間: 佐久間でございます。加藤先生にかなり広い見通しでお話ししていただきましたので、私は東アジアの問題についてお話ししたいと思います。儒教について喋っていただきたいということですが、実は仏教も非常に重要です。私が最近取り組んでいますのは近代日本の環境思想ですが、4 人の重要人物がいます。1 人は、足尾銅山鉍毒反対運動を戦った田中正造。それから南方熊楠。それから宮沢賢治。そして、金子みすゞ。金子みすゞは近年は教科書にも載っている詩人ですが、例えば「大漁」という詩。「朝焼小焼だ／大漁だ／大羽鰯の大漁だ。／浜は祭りの／やうだけど／海のなかでは／何万の／鰯のとむらひ／するだらう」これは彼女が 20 歳の時に書いた詩です。非・人間中心主義をこれほど平易な言葉で印象深く述べたものはないように思います。彼女

は山口県、現在の長門市の仙崎という漁港で生まれました。そこは非常に浄土真宗の信仰の厚い地なんです。仙崎の向かいの青海島には、世界で最初に日曜学校、当然仏



教ですけども日曜学校が 19 世紀前半に発足した地です。仙崎は狭い港町なのですが、7 つほどの寺院があってそこでは、現在鯨は獲れないんですが、今でも捕獲した鯨を慰霊する鯨法会という浄土真宗の法会をやっているわけです。シー・シェパードなんかは捕鯨に反対だと言っているわけですが、何を食べるのかというのは文化です。私は犬を食べません。しかし、吉林大学に言った時「佐久間先、犬を食べに行きましょう」と言われ、その時は食べました。家に

帰ってきて妻に、実は犬を勧められて食べたと言ったら、当時犬を飼っていましたから、妻から「あんた何なの」という非人間みたいな感じで見られました。問題は、生物に対して絶滅させるような形で付き合わないことが重要だと思います。

今日は儒教についてお話します。儒教は環境思想の中でしばしば人間中心主義と評されます。これからお話することからもわかりますように確かに人間中心主義と言えましょう。その意味では非常に評判が悪い。それに比べると仏教、あるいは老荘思想、そういうものは環境思想に対して親和的だという理解が一般的です。そうではないんだというのが私の主張で、むしろ、もっとも理論的に、環境が劣化し生物が絶滅しないような形で付き合わなければならないということを、我々にわかりやすく述べているのが儒教だと考えています。以下、お手元の原稿をご参照ください。

儒教思想を体系化した南宋の朱子（1130-1200）が端的に指摘するように、儒教の基本は「修己治人」（「大学章句序」）ですが、しかし儒教には意外なほど豊かな環境意識—環境思想が認められます。先ず儒教には、資源の適切な使用と生物の保全の意識が明瞭に存在するとともに、適切な利用による生物資源の持続的確保こそ「王道政治」の前提であるとされます。生物資源の適切な利用の基本は、生物のライフ・サイクルを踏まえた利用「以時」（時を以てす）です。『論語』述而篇では、「子釣而不網、弋而不射宿」と述べられ、稚魚まで捕獲してしまう細かな目の網などは用いず、帰巢した鳥は狙わず、過剰な漁獲や狩猟をしない孔子の行動が規範的なものとして示されています。『孟子』になるとさらに関連する記述が多くなります。梁恵王上篇では「不違農時、穀不可勝食也。数罟不入汚池、魚鼈不可勝食也。斧斤以時入山林、材木不可勝用也。是使民養生喪死無憾、王道之始也」（類似の表現は『荀子』王制篇にも見られます）と述べられ、季節の推移に応じた適切な農作業や山林の作業を行い、稚魚は捕獲しないように、適切に配慮することによって、穀物や材木、漁獲を十分に得ることができる」と指摘しています。孟子は、このような適切な自然資源の利用によ

って得られる、生活に必要な資源の安定的な供給こそ、人民が満ち足りた生活をおくる前提であり、理想的な政治である王道政治の始めだと言うのです。だからこそ、梁恵王上篇や滕文公上篇で民生の安定を第一とする、「恒産・恒心」論が述べられるのです。「牛山の木の喩え」としてよく知られている『孟子』告子上篇の一節では、「牛山之木嘗美矣。以其郊於大国也、斧斤伐之。可以為美乎。是其日夜之所息、雨露之所潤、非無萌蘖之生焉、牛羊又從而牧之。是以若彼濯濯也。人見其濯濯也、以為未嘗有材焉。此豈山之性也哉」と述べられ、かつては緑なす山であった牛山が都市が近いために濫伐や過放牧によってはげ山になってしまったことを指摘し、牛山のこのような変化を心のあり方に関連させて、自然と心のあり方における「養」（自然の保全、「良心」の涵養）の決定的重要性を強調します。朱子の注釈書である『孟子集注』では「山木人心、其理一也」と注します。私はこのような論理における自然を、＜思想的範型としての自然＞と捉えています。『礼記』は、月令篇や王政篇など適切な自然資源の利用についてふれる箇所が少なくありませんが、祭義篇では曾子と孔子の問答が「曾子曰、伐樹木以時、殺禽獸以時。夫子曰、斷一樹殺一獸、其不以時、非孝也」と述べられています。この「以時」という自然資源を利用する際の原則は、先に見たように『礼記』に限りません。そのような理解の前提には、四季の移り変わりを基軸とする自然の循環への深い関心と、生活-労働はそれに則るべきであるという認識があると言えましょう。『易経』繫辞下伝で「天地之大徳曰生」と端的に言われるように、儒教の天地観の特質の一つは、「生生」「造化」「化育」などと称される、万物を生み育むダイナミックな働きを中心に天地を把握するところにあります。そして、「天地」は「万物之父母」とされ（『書経』泰誓上）、万物の母胎としての自然の根源性が指摘されます。人は、「天地」によって生み育まれるという点では他の生物と同じですが、それらと異なりそれらにもまして「天地」に厚く育まれているが故に、「万物之靈」（『孝経』聖治）あるいは「天地之子」（張載「西銘」）などと称されます。このような人間把握は徳川日本にも深い影響を及ぼしました。「ばんみんはことごとく天地の子」（中江藤樹『翁問答』）、「高キモイヤシキモ皆同ジク天地ノ子」（貝原益軒『五常訓』）、「万民はことごとく天の子」（石田梅岩『儉約齊家論』）などと述べられ、そのような理解は人間の尊厳性を自覚させ人間の価値的平等の意識を支えるものであったのです。それでは、この世界における人のなすべきことは何か。『孟子』尽心上篇では、自らの道徳的修養を前提に「親親」「仁民」「愛物」が示されます。この3者は明確に区別され、「親」（血縁の人々）、「民」（一般の人々）、「物」（人以外の生物）に対するいわば愛の差等性（「差等」の語は『孟子集注』に拠る）が述べられます。「愛物」について、朱子は『孟子集注』で「物、謂禽獸草木。愛、謂取之有時、用之有節」と述べ、時季を考え禽獸草木を資源として適切に使用することであると指摘しています。朱子が「言天道」章とする『中庸』第22章では、この世界において人のなすべきことは「尽性」（「天」から賦与されたあるべきあり方を

実現する)とされ、人は自らの「性を尽くし」、さらに他の人々及び物の「尽性」をなし得れば、「天地之化育」を賛助することになり、「天地」と並び立つ存在になるとされます。それでは「天地之化育」を賛助するとはいかなることか。『朱子語類』巻64(中庸3)では次のように記されています。現代語に訳します。「天地の化育を賛けるというのは、人は天と地の真ん中に居て、天地と理を一にしているけれども、天(地)と人との所為にはそれぞれ自ずから分担があり、人のできることで、天にはかえってできないものがある。例えば、天は物を生むことはできるけれども、種まきや耕作にはどうしても人を用いなければならない。水は物を潤すことができるけれども、灌漑にはどうしても人を用いなければならない。火はよく物を焼くことができるけれども、炊事にはどうしても人を用いなければならない。ほどよく取りはからって天地の働きを助けることは、人がしなければならない。これらはみな賛助にほかならない」。人の営為は自然的秩序の内に包摂して捉えられているのです。まさに「天地」は人に対して規範的意味を持っていると言えましょう。

以上述べてきた儒教の環境思想を咀嚼し最も整理された形で示しているのは、管見の限りでは、徳川日本の朱子学者貝原益軒(1613-1714)です。益軒は『大俗訓』巻1の冒頭で、人とそのなすべき「人の道」を天地と関連づけて次のように述べています。ここに論述されている内容は、彼の思想の最も基本的かつ中心的なものです。

「天地は万物の父母、人は万物の靈なりと尚書に聖人とき給へり。……天地は万物をうみ養ひ給ふ中にも、人をあつくあはれみ給ふこと鳥獸草木にことなり、こゝを以て万物のうちにて、もはら人を以て天地の子とせり。されば天を父とし、地を母として、かぎりなき天地の大恩を受けたり。故に天地につかへ奉るを以て人の道とす。天地につかへ奉る道はいかんどや。およそ人は、天地の万物をうみそだて給ふ御めぐみの心を以て心とす。此の心を名づけて仁と云ふ。仁は人の心に天より生れつきたる本性なり。仁の理は人をめぐみ物をあはれむを徳とす。此の仁の徳をたもち失はずして、天地のうみ給へる人倫をあつく愛し、次に鳥獸草木をあはれみて、天地の人と万物を愛し給ふ御心にしたがひ、天地の御めぐみのちからを助るを以て、天地につかへ奉る道とす。これすなはち人の道とする所にして、仁なり」。

社会生物学を提唱し生物多様性の意義を強調するハーバード大学のウィルソは、人が生まれながらにして持っている生物に対する親しみをバイオフィリアと名付けましたが、私はそれに接した時すぐ儒教の同様の考えを思い浮かべました。明代の王陽明(朱子学を批判する陽明学を樹立しました)は「万物一体の仁」と言います。洋の東西を問わず、私たちが先天的に有している生物に対する親和感が指摘されているのです。

ところで、先の益軒の文章では、天地の根源性に基つき人間存在の特質が述べられていますが、その要点をまとめてみます。(1)「天地は万物の父母、人は万物の

靈」である。そして人は「万物の靈」として天地に厚く育まれているが故に、「天地の子」とも称される。(2) このように、人は「かぎりなき天地の大恩」を受けているから、「天地につかへ奉る」ことこそ「人の道」である。(3) 人は天地の「万物をうみそだて給ふ御めぐみの心」を「本性」として賦与されており、「仁」がそれである。(4) この仁の実践こそ「人の道」である「天地につかへ奉る道」の内容であり、具体的には、①仁を保持する、②人倫を厚く愛する、③鳥獸草木をあわれむ、ことである。②と③をまとめて言えば、「天地の御めぐみのちからを助る」こと＝天地の「化育」の働きを贊助することである。

以上についていくつか補っておきます。(1)に見られる天地一人関係は、『大和俗訓』巻1で「人となるものは天地を以て大父母とする故、父母の恩をうくるがごとく、きはまりなき天地の恩を受けたり。天地のめぐみにて生れたる恩のみならず、身を終るまで天地のやしなひをうくること、たとへば人の身の父母より生れて後も、父母のやしなひによりてひとゝなるがごとし」と明確に述べられるように、父母一人の関係に擬制化されています。だから、(2)の「天地につかへ奉る道」は「天地につかふる孝」とも述べられます。ここに示されているのは天地の絶対的根源性にほかなりません。(4)において注意すべきは、②と③の、さらには②と③のそれぞれの内における軽重の順序です。これは先に指摘した愛の差等性の問題に他なりません。『五常訓』巻2の一節は平易にこの点を述べています。

「天地ノウメル処ハ人ト万物ナリ。天地ノウメル人ト万物ヲアハレムヲ以テ、天地ニツカヘ奉ル道トス。……人倫ハ皆天地ノ子也。人倫ヲアツクスルハ、即チ天地ニツカヘ奉ル道也。人倫ヲ愛スルトテ、ワケモナクヤウニ人ヲ愛スルハ、道理ニソムケリ。墨子ト云ヒシ人、仁ヲマナビソコナヒテ、天下ノ人ヲヤウニ兼愛スル道ヲ立テタリ。是レヒガ事也。人ヲ愛スルニ、シタシキトウトキト貴賤ニヨリテ、自然ノシナアリ。品ナケレバ、オヤヲモ路人ヲモ一ニ見ルナリ。人倫ノ中ニ、トリワキオヤニツカヘ孝ヲ行ナフヲ專一トスルハ、人倫ノ本ヲアツクスル也。次ニ兄弟・夫婦・朋友ナリ。君臣ノ義ハ、又父子ノ親シミト同ジク尤モオモシ。……人倫ヲ愛シテ、其ノ次ニハ鳥獸虫魚草木マデ愛スルハ、是レ又天地ノアハレミ給ヘル御心ニシタガヒテ、我モアハレム也。天地ノ万物ヲウミ給ヘル中ニモ、取りワキ人民ヲ尤モアツクシ給フハ、人ハ万物ノ靈ナレバ、禽獸草木ニ同ジカラズ。天地ノ性、人ヲ貴シトナス（『孝経』聖治）。コヽヲ以テ、天地ノ御心ヲウケテ、マヅ専ラ人倫ヲアツクアハレミ、次ニハ鳥獸草木ヲモ愛スベシ。君子ノ道ハ、只一スヂニ天地ノ御心ニシタガヒテ、ソムカザルニアリ。是レ天ニツカヘテ、孝ヲ行ナフナリ。是レヲ仁ト云フ。……孟子（尽心上）ニ、親ヲシタシミ民ヲ仁シ、民ヲ仁シテ物ヲ愛ストイヘリ。君子ノ仁愛ヲ行ナフ、其ノ次第カクノ如クナルハ、其ノ品ニシタガヒテ、心ヲ用ウルニ厚薄アリ。是レ自然ノ理ニシタガヘリ。マヅ父母兄弟ヲシタシミ、次ニ親戚ヲシタシムハ、皆是レ親ヲ親シム也。次ニ、民ヲ仁ス。民トハ万民ナリ。其ノ内ニモ貴賤親疎ノ次第アリ。次ニ、物

ヲ愛ス。物トハ、トリケダモノ草木ヲ云フ。トリケダモノ草木ヲ愛スルモ、各ヲノ次第アリ。先ヅ鳥獸ヲ愛シ、次ニ草木ニ及ブベシ。親ヲ親ミ、民ヲ仁シ、物ヲ愛スルハ輕重ノ次第アリ。親ヲ親シムハ尤モアツク、民ヲ仁スルハ是ニツギ、物ヲ愛スルハ民ヲ仁スルヨリカロシ」。

肉親から草木に至る、この愛の差等性の指摘との関連で述べられる、鳥獸虫魚草木（生物）の保全の主張についても益軒は留意しています。『大和俗訓』巻3では次のように述べられています。「易（繫辭下）に、天地の大徳を生といふ。この理よくあぢはひてしるべし。生とはいきて死なず、いかしてころさず、生々してやまず。この故に天地は万物をうみそだて給ふ万物の父母なり。物をあはれみていかすことをこのみ、ころすことをきらひ給ふ、是れ天地の大徳なり。生の理なり。人は天地の子なれば、其の心に天地の大徳、生の理そなはりて、天地のめぐみの心を生れつきたり。是れを仁と云ふ。仁は人物をあはれみ愛する心にして、是れ即ち天地の生物の心なり。万物は皆天地のうめる所なり。その中に、取分人倫は最も天地のめぐみあつし。万物の内にていと貴くして、天地の子とする所なり。この故に天地の御心にしたがひ、仁心を以て物を愛するには、人倫におみてことさらあつくすべし。人倫をあつくするは、是の天地の御心に順ふなり。人倫を愛するにも次第あり。……亦その次に鳥けだもの蟲魚を愛してみだりに殺さず。次に草木を愛してみだりにきらす。是れ人をあはれみ物を愛する次第なり。……されば禽獸も草木も皆天地の生ずるものなれば、みだりに是をそこなふは、天地に対して不孝なりとするべし」。

鳥獸虫魚草木（生物）は、人と同じように、天地によって生育したものであるから、みだりに殺したり傷つけたりしてはならないという主張は、生物の保全について明確に述べたものと言ってよい。『五常訓』巻2では次のようにも述べられています。

「トリ・ケダモノ・ムシ・魚ヲスベテ物ト云。物ヲイカス事ヲコノミ、コロス事ヲキラフハ、人ノ本心ナリ。……イノチヲオシミ、死ヲオソルハ事、物モ人モ同ジ。コロサルハ時、イタミクルシム事、物モ人モ同ジ。子ヲ愛スル事モ、物モ人モ同ジ。タバ物ハ智ナクカナク物イハズ。是人トカハレリ。……仁ニ志アラン人ハ、物ノカナシミヲカヘリ見テ、アハレムベシ。コロス事ヲコノムベカラズ。……禽獸虫魚ノイノチヲオシミ、草木ノ其ノ生ヲトゲントスル理ハ人ト同ジ。イカンゾミダリニコレヲコロシ、カラヲキリ、根ヲタツベキ（「カラ」幹・莖。）」。

しかし、人が命をつなぎ生を維持していくために他の生物の命を奪い傷つけることは不可避です。他の生物を自らの衣食住のために利用せざるを得ないことは必然的です。この点に関して益軒はどのように考えるのか。『五常訓』巻2では『礼記』王政篇及び祭義篇の記述を踏まえて次のように述べられています。

「儒者ノ道、鳥ケダモノヲコロスハ不仁ナリト云フ人アレド、ソレハ道ヲシラザル人ノ言ナリ。君子ハ、故ナケレバ禽獸ヲコロサズ。故ナクシテミダリニコロスハ、儒者ノ道ニアラズ。……コロスベキ理アレバ、人ヲモコロシテ義ニアタル。イハンヤ

鳥ケダモノヲヤ。コロスマジキ理アレバ、草木ヲモキラズ。鳥獸ハサラ也。曾子曰ク、樹木時ヲ以テキリ、禽獸時ヲ以テコロス。孔子曰ク、一樹ヲキリ、一獸ヲコロスモ、其ノ時ヲ以テセザレバ、不孝也（『礼記』祭義）。是レミダリニ木ヲキリ、物ヲコロスハ、天地ノ物ヲソコナフ也。不孝ト云ベシ。イニシヘノ人、田ハタケニ作レル五穀ヲソコナフ鳥獸ヲコロシテ、民ノタメニ害ヲノゾキ、是レヲ用ヒテ、宗廟社稷ノ神ヲマツリ、老ヲヤシナヒ、賓客ニソナフルタメ、民ノ隙ヲ用ヒテ、武事ヲナラハシメ、軍法ヲオシエンガタメ、四時ノ狩ヲシテ、鳥獸ヲコロセシハ、理ナリ。……禽獸ハ愛スベシトイヘドモ、時ニヨリ、事ニヨリ、殺スベキ義アリ。是レ又分殊ナリ。サレドモ是レヲ用ウルニ、時アリ礼アリテ、ミダリニ殺サズ。草木ヲキルニモ、時アリテミダリニキラズ。イニシヘハ、春夏ニ草木ヲキラズ。成長スル時ナレバ也。山林ニ入テ木ヲキルニモ、鳥獸ヲコロスニモ時アリ。獸ノ子ヲトラズ。鳥ノ卵ヲトラズ、胎アルヲ殺サズ、巢ヲクツガヘサズ（『礼記』王制）。皆此レ天道ニシタガヒ、物ヲアハレム仁ナリ」。

すなわち、人が他の生物の命を奪い傷つけ、生命の維持から文化・文明の形成に至るまでそれらを用いることができるのは、他の生物が存続していくことを妨げない限りにおいて、そうすべき「理」がある場合なのです。朱子学の理一分殊説が適用されるのはまさに朱子学者らしい論述ですが、その場合でも生物の存続が配慮されていることを看過すべきではありません。生物の保全の主張と指摘した所以ですが、私は益軒のこのような主張は、徳川日本における生物保全の主張として最もすぐれたものの一つと考えています。そして、それが、単に利用すべき資源が枯渇するからという理由のみからではなく、末尾の文章に見られるように、天地のあり方を範型とする人のあり方から論じられていることに留意しておきたいと思います。

最後に、「天地の御めぐみのちからを助る」こと＝天地の「化育」の働きを賛助することをめぐってやや詳しく益軒の主張を見てみましょう。

「天道流行して万物を化生す。万古以来生生して息まず、覆育窮まりなし……天は無心にして自ら成すことあたはず、故に独り其の過不及を制することあたはず。必ず人力の裁成補相待ちて、其の生育の功を成すこと有り（『真思録』巻4）」。

「裁成補相」は、先に引用した『朱子語類』巻64の一節で「ほどよく取りはからう」と訳した語句ですが、ここでは、天と人の相違が朱子の場合のように捉えられています。そして、『君子訓』では、為政者の職務に関連して次のように敷衍されています。

「天地は万物の父母なり。その徳広大にして限りなく、万物を生育してやむ事なし。人は殊に天地の正気をうけて生れ、仁義の性をそなへたれば、万物の靈にして、貴き賤しき、みな天地の御子なり。なかについて、国土を治め給ふ君子は、天より専らこの人を厚くかしづきて、人民のつかさとし、下を治めしめ給ふ。そのゆゑは、天地は人を生じ出し養ひ恵むを以て心とし給へども、天もの言ざれば、自ら命令を下して人を治むることあたはず。君子を取立て、官禄をあたへ、其の地の人民を預け給ふなり。

然れば、凡そ国土人民を司り治むる人は、各をの其の主君より命を受くれども、その実は、天より立て給へる代官なり。故に天職といふ。君子と称するは、国に君として民を子とすといふ義なり。天職とは、天に代りて民を治むることを司るなり。凡そ国天下の君、その宰臣および一郡一郷の司まで、その任大小異なれども、皆君子にして天職を分かち任ずる人なり」。

すなわち、「人をめぐみ物をあはれむ」こと、すなわち「天地の御めぐみのちからを助る」（天地の化育の働きを賛助する）ことは、為政者の場合、「天より立て給へる代官」としての「天職」の実践として要請されるのです。このような把握に注目して、為政者を「天の代理人」と評したのは私の恩師の一人である石田一良です（『徳川封建社会と朱子学派の思想』、1963、『東北大学文学部研究年報』13下）。環境思想史研究においては、ジョン・パスモアの『自然に対する人間の責任』（原著、1973）に見られるように、西欧のキリスト教的伝統には、世界の世話を任された「神の代理人」として、あるいは自然の完成させるために「神に協力する者」として人間を捉える傾向があるという指摘があります。このように、天地の根源的な働き＝万物の生成（化育、造化）を助けることが人のなすべきこととされ、政治もまたその重要な一部とされるのです。このような把握に基づいて、徳川日本の代表的な経世論者である熊沢蕃山（1619-91）は『孝経外伝或問』において、「徳を以て造化を助くるは聖賢の事也。政を以て造化を助くるは人才也」と指摘し、政治の理想態である聖賢による徳治政治と区別された現実の政治を「政を以て造化を助くる」として明確に定義し、現実の政治もまた自然的秩序のうちに包摂して捉えました。環境保全論の嚆矢と言ってよい蕃山の特有の治山治水論の前提にこのような政治観があることに留意しておきたいと思います。農工商三民の業にあっても事情は同様です。朱子学者室鳩巢（1658-1734）の著とされる（近年異論がある）『不亡鈔』巻3の一節を見てみましょう。「農人は天地生植の財を主どる。田畠を開きて八穀を布き、桑麻を植え、山に入りて薪をとり、野に趣きては萱をかり、総て山野河海の食物を取つて天下の衣食に勞す。工人は天地器用の材を掌どる。……総じて万の器を作り、天下の用に勞す。商人は天地の偏倚をたすけ、有を省きて無を補ふ。余り有るを取りて不足に与へ、総じて天下の財を遍して、天下に其の化育を蒙らしむ。……農工商の人、何の故にか如斯なる。是れ天下の心を心とし、天地の道を為道、天地の化を為業、人々相見ること一家のごとく、人に勞することを好み、人を勞する事を悲しみ、天地の道を助け、天地の化をほどこし、我が辛勤を顧みざるものなり。是を以て農工商の人ともに相患へ、ともに相勞し、ともに相やしなはれて、其の成功に居る人なし」。末尾の「ともに相患へ、ともに相勞し、ともに相やしなはれ」という共同的存在としての人間把握が天地との関連で述べられていることにも注意しておきたいと思います。

時間が大分過ぎましたので、発表原稿の「終わりに」は皆さん読んでください。要するに今まで儒教は環境思想としてあまり注目されていないが、そうではないん

だ。たとえば、欧米の研究者ジョン・パスモアやキース・トマスやいろんな人が、レオポルドも触れていますが、アジアあるいは東アジアに注目するわけです。そうした欧米からの問いかけに、日本の我々が十分応えきれていないのが残念ながら現状です。そういう点ではやはり自分の足元を見て、学ぶところがたくさんあるんだと、ぜひ皆さま方にもこの点を訴えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

岡 島：佐久間先生ありがとうございました。日本の思想、儒教も始まって政治思想ではない所からの読み返しというのが大事だというご指摘で、まだ日本人も読み返していないそういうところでこれから日本の勉強もしていかなければいけないというご指摘でした。続きまして鬼頭先生、環境倫理で最近も本を出されました。ちくま新書の『自然保護を問い直す』という有名な本がありますけども、その辺から始まって今、環境倫理について研究されております。それでは宜しく申し上げます。

鬼 頭：鬼頭と申します。今日は、現代の環境倫理という課題を与えられたわけですが、いわ



ば現代の環境的な課題に対して私たちが環境倫理でどういう風に考えていったらよいかを今日は話します。

今、環境ということで私たちが考えていったときに、地球温暖化防止のため炭酸ガスをどう削減していくかが問題になっていますが、温暖化の原理を考えた時、人によっては炭酸ガスが原因じゃないから炭酸ガスを減らさなくていいという人もいます。実はそういうことではなくて、本質的にはそもそも我々が化石燃料を使ってきたのだが、これをどうするのかを考えていかなければい

けない。また世界的に南北問題といって格差の問題があります。それから、将来世代に対する責任と、そういう所に対して我々がどう考えるかというところが実は地球温暖化に対する倫理で一番重要なことだと思います。

次に生物多様性の問題。これは、リオデジャネイロで地球サミットが開かれたときに、生物多様性条約と地球温暖化に関する気候変動枠組条約という二つ国際条約が結ばれました。地球温暖化とともに生物多様性の問題が重要だが、わかりにくいメディアで取り上げにくいので、いつも温暖化の陰に隠れてあまり議論されないが、昨年名古屋で生物多様性条約の COP10が開かれてやっと我々が議論できるようになってきた。これにはいろいろな問題があります。生物多様性の問題は生物保護すればいいという風に考えるが、じゃあ保護するとは一体何だろう。そもそも自然保護と言ったとき何を守るのか。守るべき自然とは一体何なのか。考え始めると実は非常に難しい問題です。それから自然再生がそれに絡めてやられているが、自然再生とはそもそもどうという自然に戻すのが再生なのかという事体も実はよくわからない。それから生物資

源管理をどうするかという問題が生物多様性を考えると重要です。つまり生物多様性は自然を守るだけではなく、私たちが自然のいろんな資源を使う時に自然の資源をどう管理するかを問う見方について、いろんな議論があります。もう一つは野生生物とどう付き合うかという問題で、先ほどもクジラの話がありましたが、クジラの問題だけじゃなく一般的には狩猟問題をどう考えるかは国際的にも問題です。日本国内でも問題です。いわゆる獣害問題をどう考えるかというのがあり、生物多様性問題はいろんな問題をかなり理念的に考えなきゃいけない。

保護を考えると、我々が安全性や利便性を追求していくことと、自然を守るということは「トレードオフ」という言い方をされてきました。私はトレードオフと云われているのは、トレードオフという形で社会構造的にそういう形に追い込まれているからトレードオフであって、トレードオフではないような社会のあり方はありうると思っています。そういう意味で災害に対する安全性と環境保護の関係をどうするかということか考えなければならない。福島原発の事故がありましたが、原発の問題というのは、非常に高度的な問題です。私が見ている中で20世紀型の技術のあだ花のように咲いた原発がこの事態を迎えたと本当に思います。20世紀のあだ花がどういうことかを後でお話しします。こういう問題を私たちが環境倫理という枠の中で、考えなければならない。現在、大災害や事故が起きている中で非常に重要な問題だと思っています。それをどう云う風に考えていくかということ、リオ以降の課題という形を視点にたどるなかで、それぞれどういう問題が出てきて、私たちがどういうところに立っているかを明らかにするべきだと思います。

環境思想に関しては、70年代に人間中心主義の克服というような形で人間以外の生物や環境に対して権利を与えたりなどの議論がある。先ほども加藤先生からレオポルドの話がありましたが、それと共に90年代リオデジャネイロ以降の時代の中で大きな喧嘩があります。今申し上げたように、人間中心主義の克服が70年代非常に大きな課題になっている。先ほどの佐久間先生も人間中心主義が批判されるということは人間主義のような問題で形をとらえることを我々はその行動の中に追い込まれてしまっていて、なかなか抜けきれない。なにか言うとあなたは人間中心主義なのかと言われる。そもそも言い訳するやり方、もっといえば人間と自然を対立させて「あなたはどっちにつくの？」というような言い方自体が根本的に違うのではないかということが明らかになるのではないかと思います。地球サミットはある意味では環境問題を地球レベルで考えていこうという大きな流れを作った。そういう意味では、グローバルな形で環境問題をとらえる期待があったが、その時環境倫理は、人間が自然に対してどういう風に考えるかを、そしてリオデジャネイロの地球サミットの時に、環境倫理が形を以ってあったのは一時期グローバルスタンダードのように取りあげられたが、最近力は失っていて、違う形が出てきた。典型的なのは、南北問題です。いわば、グローバルな形で考えれば考えるほど、西洋近代の先進国が今までずっと化石燃料を使って

きて近代文明を作り上げてきたということと、途上国がこれから先進国と同じような経済成長を目指す中で、その時間的なずれをどう考えていくか。先進国においては、さんざんやり尽くしたのでそろそろ環境の事を考えなければならないわけですが、途上国においては、これから経済成長したいという時にそれが駄目だと言えるかどうかの問題がある。それと同時に、途上国が経済成長したいというところで、例えばカメルーンは伝統的な生活を今でも行っている人たちで、先住民族の問題が出てきます。そういうところで、哲学の理念を守ればいいという議論を70年代にしていたが、それが本当にいいのかという話にもなるし、去年の生物多様性条約のCOP10では里山イニシアチブを日本政府が言い始め、里山というのは依存する可能な社会の一つのモデルだから、それを世界に発信していこうという議論も出てきた。これは私たちが自然を守るとか自然とどう付き合うかという時に、手つかずの自然を守ることと里山を守るという話は全然違うわけです。では、今まで手つかずの自然だと言っていたのが急に里山になってどういう風に考えるのかということが90年代以降いろんな自然との付き合いを見直さなければいけないという風になってきた。

ということで、私は関係論的アプローチという言い方をするが、つまり私たちが人間と自然との関係性をどういう風にどうとらえていくかを考えることが必要になってくる。90年代には『ラディカルエコロジー』という有名な本ですが、欧米の環境思想の中には、森林伐採に対して反対をしているという写真が載るくらいの時代です。こういう話をしていく中で、**Environmental justice**という環境正義という話が出てくるんですが、それはアメリカ社会の中で80年代から生まれてきた問題です。アメリカ合衆国では、**Office of Environmental Justice**といういわば連邦政府の中にもそういう部署があるくらい関与政府が問題だったわけですが、基本的には82年のノースカロライナ州でPCBの大量廃棄があり、そこでアフリカ系の人たちが非常に多く住むところで廃棄された。明らかにこれは、民族差別に関係しているわけで、つまり**Environmental racism**という環境的な人種差別主義だということですが、結局何なのかというと、つまりPCBというリスクに関して白人が住んでいるところと、アフリカ系の人住んでいるところが全く非対称な形で扱われる。それに対するリスクに関しては白人と非白人が非対称になる。いわばリスクの分配が不公平という問題です。この問題は現代的な問題で、日本の水俣病だってそうだという問題でもあります。

今の福島原発の事故の話ですが、東京の電気を福島で作っています。しかもリスクは東京にはなくて結果的に大きなリスクは福島の方負っている。これはリスクの問題だけではなく、ハンティングや野生生物の関係という分野も大きな問題です。カメルーンの例ですが、若い人たちが調査をして新しい枠組みが分かってきました。このスポーツハンティングというのは我々日本にとっても不思議だが、気持ちが悪い部分もある。これは何かというと、欧米のお金持の方がスポーツハンティングをしたい、アフリカで狩猟をするということが何よりも楽しみである。いわば、大枚をはた

いてくるわけですから環境主義になる。それと環境を守ることと経済を両立させるということで、ジンバブエでキャンプファイアーという有名な事例があります。つまり、スポーツハンティングでいっぱいお金を落としてもらって、しかも持続可能なハンティングをすれば野生生物も守られる。そして、落してくれたお金で国も潤うし、それで環境教育などをすれば経済も環境もうまくいくだらうという典型的な環境と経済の両立する事例として言われていました。ところがキャンプファイアーで言われていることは単純ではない。つまりスポーツハンティングは管理されているようだが、野生生物の管理はそんなに簡単ではないので、本当に管理されたスポーツハンティングが可能かは分からない。その一方で今まで伝統的に狩猟をやってきた人たちが狩猟すると密漁だと言って逮捕され、反対に大枚をはたいて欧米から来ている人たちのハンティングに対してはそれが持続可能だからいいということで、国と観光業者とWWFも入り、（ハンティングが）共犯関係で行われている。そもそもこれは、サステナビリティがあるからいいという問題ではなく、要するに資源をどう公平に分配するかと、リスクをどう分配するかという問題に関して、実は不整備があるということなのです。その問題を環境正義として捉えようという議論になっているわけです。

一方でこれも生物多様性の問題で、生物多様性だから自然を守る話かと思っていたら、遺伝子資源に関する議論が出てきて多分皆さんびっくりしたと思います。つまり今までどちらかという先進国が医薬品などいろんな形で遺伝子資源をハンティングしていく。いわば、先進国が先進国の人たちに利益をあげる。ところが、そこで得られた利益が途上国に行かないというような遺伝子資源の利用形式に利益配分の問題が出てきていて、この問題と全部繋がっている。こういう問題は人間と自然との関係—人間が今まで採りすぎたからだんまりした方が良くという問題ではなくて、自然を前にして人間と人間が社会の中でどういう関係を持つかという問題なんです。ですから環境思想、環境倫理と言っても人間と自然との関係だけではなくて、資源やリスクとかの自然環境の問題に対し、人間社会の中で倫理的に公正な環境を考えるかが大きな問題であるといえます。

歴史的に考えると、当然のことながら自然を利用していくという議論の中で、実際産業革命でかなり有機製品等々比較されるわけですが、一方で反問題主義のような形で危険を防止することが出てくるわけです。基本的にはsharingというプログラムを社会的に産業革命という形で実際にする。特に20世紀になって、戦後は国家的なレベルで進めてきたということだと思います。その徹底した中で環境思想の問題が出てきているわけです。70年代はリン・ホワイトの指摘があったような形で、人間的主義に対する反省というような議論があって、それに対して自然の権利であるとかの議論があった。しかし先ほど申し上げたように、同じように人種差別主義の話があって環境正義の話が一方であった。

ですから、実際の環境の現場ではディープ・エコロジー的に自然保護をするという

ことが結果的に先住民の権利であるとか、マイノリティの権利を奪うということにもなりうる問題をどう考えるか。それでもなおかつ自然に戻ることが大事なのか、そうではなくて人間社会における理論があるわけです。その中で環境の課題が変わってきた。なぜかという、自然主義を前にして人間の営みということ人間と自然との関係だ、人間が今まで自然に対してインパクトを与えてきたことがいけないとなると、手付かずでなるべく引きましょ、また、人間が自然に対して何かするのもあまりよくないという議論になるわけですが、実際人間が自然に対して適度な形で関わっていくということ、それは人間が自然と関わることによって文化を作っていく。人間が文化を作ってきたことの意味をどういう風に考えているかは、たとえば里山は典型的ですが、適度にに関わり適度に手を入れながらずっと関わってきた自然とのつき合いをどう考えるか。もちろんこれは都市化などによって、結局はげ山になってしまったという時代もありました。一方で安定的な形で持続可能な形で出来るというやり方もある。人間対自然と言う形ではなく、その関係のあり方を考えていくことになる、二次的な自然の保全をどう考えるとか、人間にとっての景観をどうとらえるのか、住民参加をどうとらえるかという問題が出てきます。そういう問題が出てきたということは、自然の管理が徹底していないということが20世紀になって分かってきました。それと共に徹底していないということになった時に人間の関わり、文化も含めて不確実性を前提にして自然とどう関わるかが出てきたし、人間中心主義と非中心主義、また人間と自然を対立させてあなたは人間の周りにいるの、自然の周りにいるのということではなくてもっと違う形で考えることが出てきた。

二つの留意点を考えてみたいのですが、現代の環境思想を考えた時に重要なのは人間が自然を支配するというイデオロギー。それは一つの思想としてはあるかもしれないが、それは実はできないということがわかったということもある。典型的には20世紀の最後の日本の河川審議会です。今までは洪水に対してどうするかと言ったときに、堤防を作る、ダムを造る、可動閉塞を作る、津波があれば防波堤を作るという形で、一滴も水がかぶらないという河川工学の想定でずっとやって来た。基本的には河川の管理をやってきたが、20世紀最後の河川審議会の答申では洪水を許容することも含めてやっていかなければならないという風になったわけです。つまり、今まで徹底的に自然を管理してやることは20世紀に崩れた。それはできない。それはある意味では簡単なわけです。何が簡単かという、例えば川の水が下りて災害が起こる。それで50年に一度でこのくらい堤防を作ろうと思うわけです。そうすると50年に一度堤防を作れば災害がそのくらいの洪水が出れば守られるけれども、100年に一度くらいの大きな水害があると壊れてしまう。それで、しょうがないから100年に一度に耐えられるようにしましょうと。どんどんイタチごっこで高くしようと。高くしていくとどうなるかという、災害があった時の災害の度合いが激しくなる。だから、典型的に低い堤防であればもし水が出たら確かに水が出て浸水する。田畑が駄目になるし、家屋が

水につかる。でもそこで人が死ぬということはあまりないですよ。ところが、堤防を高くしていくとそれを乗り越えてきますからこれが土石流のようになってくる。どんどん乗り越えてくるような形になってくると、200年に一度くらいは守られるが、それを超えてきたものに対してはとてつもない大災害になる。そうすると今回のような1000年に一度のような大災害になってくると、あるいは、地球温暖化によって災害がどんどん頻発していくとそれを高くしていくのが良いのかとなるとわからなくなるんです。ですから、今回の津波でもいろんな議論があると思います。あんな津波で、もっと防波堤を高くすべきだったという人もいます。でも防波堤を高くすれば済むのかと言えば、高くしても軽々乗り越えてきて非常に大きな災害になっている。それでは私たちはそれについてどう考えるかという、そもそもそういう形でコントロールすることは不可能だという前提に立たないとだめだという形になるわけです。

もう一つは、人間中心主義の呪縛の問題があり、人間中心主義の克服ということが結果的に社会的な不幸性を呼んでしまうことがある。私たちは社会的な構成と自然とうまく付き合うことを考えると、人間中心主義という所で考えると、克服することではなく、もっと違う枠組みを考えなければならぬ。つまり、自然との関係性の中で私たちが公正な形でしかも豊かに生きるということを実現することが課題になってくる。実は自然の支配に対するイデオロギーが破綻してきたという話ですが、根底には不確実性ということを前提にして自然と付き合うというやり方が出てきている。例えば、順応的な管理です。Adaptive managementという考え方です。それはどういうやり方かという、生態系を管理するやり方です。今までは生態系を管理して物を作ったり、デザインするとなると、普通は、設計図を描く所から始まるわけです。設計図を書いて、それをきちんと埋めていってどういう形でやるのか。例えば、公園であれば公園を作る前に設計図を作ってその通りに施工していくのがやり方です。でも、そういうやり方だと生態系を相手にしていると生態系はよくわからないわけです。わかっているなら、わかっているなりに全部徹底的にきちんと作りこめばいいんです。わからないことを前提にするとどうなるかという、そこにデザインをして実際にやりながら学んでいくという過程なんです。今のやり方としては、とりあえず仮説を立てて少し手を加えてみましょう。手を加えて生態系はこういう風に反応するのかということをおぼろげに学んでいく。学びながら、じゃあこういう風に反応するのであれば、こういう形でやればいいのかということをやとりしながらフィードバックしながらやることを順応的な管理と言っています。これは生態系だけじゃないです。一般的に都市計画とかいろんな国土政策もそうだと思いますし、あるいは社会の仕組みもそうだと思います。日本は法律を作ると現実性がないものもありますけども、多分法律とかいろんなことも含めてもっと順応的に解決していくことが必要になってくると思います。ですから、順応的な管理という思想が出てきたということは大事だと思います。

それから、リスクマネジメントと予防原則。リスクマネジメントというのは、そも

そもリスクはゼロではない。私たちは、やはり少しでもリスクをゼロにした方がいいと思うわけです。ですから、治水であれば水害はゼロの方がいいと思う。でも、そうではなくて水害を受けるとリスクをかぶることを前提に、そのリスクをどうみんなで分け合いながらうまく社会の中で暮らしていくというやり方をしなければならない。それが本来のリスクマネジメントなんです。ですから本当は原発の事故でもリスクマネジメントは重要だし、どうやってうまく多くの人と共有するかと言うリスクコミュニケーションの問題が重要であるはずなのですが、皆さんご覧になってもわかるように今はほとんど原発の事故においてリスクマネジメントとリスクコミュニケーションは破綻しています。なぜ破綻しているかという、要するにリスクコミュニケーションがそもそもできない技術を相手にしているから破綻している。私たちがもしリスクマネジメント、リスクコミュニケーションをちゃんとやりながらみんなでリスクを分け合いながら社会を築いていこうと思うと、それなりに使える技術、使えない技術があることを考えなければいけない。その時にも順応的なリスクマネジメントの中で予防原則は非常に重要で、予防原則というのは科学的にはっきりしなくてもどこかで何か措置をしないと危ないことがあるということです。ですから完璧にはっきりするまで待っていたら、とんでもないことになってしまう。例えば、水俣の時にも有機水銀が問題になっています。どうして、無機水銀が有機化するのかが全く科学的に判らなかった。そんな科学的な解明を待っていたら、だめなわけです。結局、水俣病は10年間放置されたために、被害者も拡大してしまいました。温暖化についてもそうです。炭酸ガスが原因じゃないという人もいます。でも問題はこれだけ私たちの生活の問題や災害の問題などが変容してきたことです。それを私たちが科学的に正しいか、正しくないかではなくて何をやるべきか考えなければならないという問題があって、そういう予防原則も考えなければならない。これは基本的にいずれも相手が不確実である、あるいは状況が不確実であるということを経験してやっていく。不確実だから何もできないわけじゃない。不確実だけでも、それでも何かを決定してやるということが21世紀の大きな課題になると思う。

その時に重要なのは、ローカル地。それぞれ地域に蓄えられた、いろんな伝統的に積み重ねられていった知恵をどう私たちが掘り起こすかが大事だと思う。今の宮城県の名取川でも津波があつてあんな津波なんて我々考えられないと見ていたんですけども、研究者の中では実はもう1,000年以上前に貞観地震、貞観津波があつてその津波によって堆積した地層があつてあそこは千数百年前に大地震があつて津波があつたことが明らかになっている。しかも、それだけ長いとなかなか人間のいろんな付き合い方も難しいですけども、ただ実際に現代でも海をきちんと見るような形で逃げた人は助かるわけです。だから、海の様子をどう自分で読みこんで行動するかというような知恵を持っていた人は助かった。そうでないと、近代的なものにだけ頼っているのは駄目である。やはりローカルな知恵、あるいはトラディショナルな伝統的な知恵みたい

なものをどういう風に活用するかということが今大きな課題になっている。つまり専門家や政府が行って管理するんじゃないくて、もっと多くの人が参加をしながら決めていくやり方をしましょうとか、そういうガバナンスのあり方をどうするかということが今課題になっています。

これを考えた時に自然との付き合いを考えた時に国連がミレニアム生態系評価というような枠組みで、大きなプロジェクトを立ち上げました。その時に、生態系サービスという形でとらえるという経済学者も関わってできたやり方が、非常に参考になるし興味深いです。もちろん限界もあるんですけども、これをもう少し発展させるというのではないかと思います。

生態系サービスというのは供給サービスと言って、つまり普通私たちが利用すると、生活の糧にするというのは供給サービスなんです。それに対し、自然そのもののあり方は人間は結局自然に依存していることを考えると人間や動物の基盤となるようなもの。今までこの2つが依存していたんです。

つまり、私たちはやっぱり自然は利用する相手じゃないか、いや、やっぱり自然は人間の生存の基盤で大事なんだという論争でできていたが、もっと中間的なものが出てきたんです。1つは調整サービス。実は生態系と言うのは、自然を調整する機能がある。例えば温度を調整する、都市においてもヒートアイランドと言っていますが、緑があるだけで温度の調整をしてくれる。川が氾濫すると、河畔林があるだけで洪水を防止してくれる。実は自然の中に自然のいろんな災害やリスクを調整する能力がある。さらに、人間が自然の中からのいろんな環境教育もそうですし、いろんな楽しみであるとか、精神的なものを受け取るような文化的なものがある。そういうものを私たちがトータルに考えていくことが大事になってくるわけです。今までは、供給サービスか調整サービスかみたいな話だったので、私たち人間が生きていくためには、どんどん資源を活用しなきゃいけないんだという話になるわけです。たぶんこの中で、供給だけを最大化していこうと思うと供給を最大化すると調整機能、文化機能、基盤機能が全部だめになるので破綻してしまうんです。供給を減らせば良いかと言うとそう言うことではなくて、ですから供給サービスをある程度人間の生活に必要なだが、その一方で調整サービスがあることによって、人間の安全性、安心が得られる。一方で、人間が文化的で豊かなものが得られるためには、ちゃんとした自然がないといけない。そういう物をどういうバランスにするかという事で、どれかを最大化にするのではなくて、いわばバランスをとるような形で私たちがどういう風に受けとるかということが重要で、こういう経済性生産性に限定するのではなく、経済性生産性にも意味をもった安心を支えるような機能や精神的な恵みとかそういうものをどうとらえるかが重要です。

ですから、そう考えると私が人間中心主義は駄目だと言っていたが、実は人間中心主義が駄目ではなくて、効用中心主義が駄目だとなった。つまり、効用を最大化する

ということを私は人間中心主義みたいな感じで言っていたわけです。これは、先ほどの生態系サービスで言えば、いわゆる供給サービスを最大化するという形です。ずっとやっていて、これは駄目だとなった。それをどういう風に改めるかということであって、そもそも人間中心主義を改めることではなかったんじゃないかということであるわけです。ですから、それを考えていかないと多分、人間中心主義を否定すると、例えば先住民の人たちがアフリカで狩猟する。狩猟して生活する。今まで人間は勝手なことをしてきたから狩猟もやめた方がいいのではないかという話になるわけです。でも、狩猟するということは実はその国の文化でもあるわけです。それぞれの文化の中で食べるということは、供給を採るだけではなく文化的な食文化をはぐくむわけです。今までの手付かずの自然を守るというようなこと自体が人間と自然との関係性を人間が利用するということも含めて、もう一度再検討しないといけないし、そのための理念を考えなきゃいけない。そのときに、生態系サービスもそうだし、現代的にいろんな考え方が出てきたものをうまく取り込みながら理念化、思想化することが大事だろうと思います。

1995年くらいまでは、人間と自然を対立的にして、利用して守るというような言い方でしたが、そもそも、生態系はダイナミックに変動している。ある意味、タイムスパンを長くして自然を考えたときにその中で人間の活動がどのように絡み合うかが重要で、そのダイナミックに変動する自然の中で人間の営みもうまく埋め込んでいく。これは先ほどの佐久間先生にまさに日本の儒教の思想の中にあるという話がありましたが、そういう考え方をどういう風に整理していくのが今の大きな課題ではないかと思います。つまり、適度で継続的にかく乱に意味があるし、先ほどの文化をどう考えるかが意味を持ってくる。

最後に重要になってくるのは恵みも災いも、というところで、恵みを持っている、あるいは安全性を確保するというのと、自然を守るということの行動が大きく転換してきたわけです。ただ、安全性をえるとか資源を確保するということは、自然保護と矛盾するような言い方がされていたが、実はそうではない。自然を守ること自体が調整サービス、文化サービスをきちんと保全することであり、あるいは供給サービスのバランスの中で人間を豊かにしていくということにもなる。という形で考えていくと、私たちがどういう形で開発をするのか、どういう形で保護をするのかということとをどのように生活の中に組み込んでいくか、そこをを考えなければいけないということになると思います。

日本の場合、明治以降、自然を全部コントロールできて水は一滴もかぶらないという前提で都市計画や生活管理が出来てしまったために、我々は全く用意が無い。要するに、自然に対して何もできない。なにかあったらおろおろするだけという形になってしまった。私たちが災害とどう付き合いながら、ある程度リスクも受け入れながらもリスクを軽減するための自然をどう保護するかが大事です。だから、自然保護

するということはリスクの軽減にもつながる。そういうものをトータルにどうマネジメントしながら私たちが生活していく区域を作っていくかということが今求められているということです。

徹底的にコントロールするのではなくて、ある程度不確実性がある所でやる。考えてみると、実は工学、engineeringという学問は元々はそういう学問なんです。工学の設計という考え方は大体普通はスモールスケールで小さい模型を作ってやるわけです。それでうまくいくんです。実際この通りに作ってやってみると大体うまくいかずトラブルが起こり、事故が起こるんです。だから一番重要なのは、事故やトラブルがなるべく最小限のリスクになるような形で技術をコントロールするのが大事で、要するに事故をゼロにするのは無理なんです。ところが、原子力技術の特徴は何かというところ、リスクをゼロにしなければ稼働できないという、あり得ない技術です。もしリスクをゼロにしなければいけないということになったら、それはもちろん今の高性能な技術をやればある程度の所までは出来るけども、もうそれを超えたら出来ない。どこかでリスクがあって事故が起きたりトラブルがあることを前提とする技術の本質は変わらない。今まででもそれでやって来たわけだからずっとそれでやるしかない。そうすると私たちはリスク、事故、トラブルを受け入れられるような技術を発展させていく。受け入れられないような技術は辞めるしかないということだと思います。それが非常に明確になったわけですから、多分、福島原発は20世紀のあだ花というのはそういう意味だと思います。

この不確実を前提としたところが今の環境思想の考え方に大事だろうと思いますし、災害の場合も基本的にはそうだろうと思います。これは先ほどお話ししましたが、ローカルな地域のいろんな知恵、歴史的な知産、あるいは専門家ではないがそういう人たちが持っているような感覚。何か危ないなと思っている感覚。もちろん先ほど言ったように海の事をよく知っている人は、海がこれは何か危ないと感じるそのような知。それは暗黙知なんです。明確な形では言語化できない。そういうようなものを私たちが、ある部分を言語化し、あるいは地域で共有しながら社会の中で共有していく。世界倫理はいろんな議論がありますけども、将来世代に対して私たちが何を伝えていくかといった時に、ただ資源をどうするのか、廃棄物をどうするかだけではなく、今までそういう風に自然と地域特有の問題があるんです。先ほどあったように、例えば貞観津波というのが本当に1,000年以上前にあったと。そういうような事の社会の作り方、土地利用のあり方というような事をいろんな形で掘り起こしていくことが必要です。

これから、日本の復興や地域の災害時の問題がありますが、多分災害時の復興で一番大事なのはそれだと思います。簡単に言えば、自然は強大だから伝統技術は結局それをなだめながら生きざるをえなかった。しかし、近代技術があって私たちがコントロールできると思ったので、普遍的な技術がうまくいくと思った。でもそれもううまくいかない。そうなれば、伝統技術における自然を見極めて、自然の中でうまくなだめ

るような技術を今の近代のハイテクでうまく活用するということが必要だろう。つまり、元に戻って昔のやり方でやればよいというものじゃなくて、昔のやり方、昔の精神、・・・自然と人間とのあり方の関係が技術にもきちんと根強くあるわけです。その技術を現代のハイテクでもっと人間が楽に、あるいは人間にとって社会の中でうまくできるようにやっていくことが大事なことだと思います。

終わりに、私たちが環境と考えた時に、3つの「自然環境」「社会環境」「精神的環境」をいわばトータルなものとして統合的な環境のイメージとして捉えることが重要です。それから人間と自然との倫理だけではなく、自然を前にして人間と人間、人間の社会における倫理のあり方を考える。これは、地域間、世代間の倫理がある。精神的な環境をもう一度見直す。豊かさとはどういうことであるかをもう一度考える。また、不確実性を前提にした時に、私たちがどういう技術を開発するか、どう自然と関わるかということが重要になってくる。私たちがこういう時代においても一度自然と人間とのあり方、倫理のあり方を考えながら、どういう形で日本が再建していくか、あるいは復興していくか。いわばこういう技術のあり方を性格的に考えて行くということが環境倫理、環境思想の非常に重要な役割だと思いますし、今こそこういうことを皆さんと議論していかなければならないと思います。これで私のプレゼンを終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

岡 島： 鬼頭先生ありがとうございました。本当ならば、お一人最低1時間半の大学の一コマくらいは必要なところでしたが、加藤先生が全体的なお話をされて、その後、佐久間先生が東洋の知恵のお話をされ、里山の問題など新しい観点で鬼頭先生はフロントライン、現場で起こっていることと繋げるというお話をして頂きました。次は関先生で新進の方です。佐久間先生は大きい話をされましたけども、それでは江戸時代の日本人は何を考えていたのか一人一人の思想家のことについて扱った研究をされています。先程、政治思想だけではなくて別な観点からいろんな本を読んだらどうだろうかという提案の中で、関先生は三人の思想家を自分なりの形で環境思想の視点、政治思想ではない点から見つめ直してみましたということです。佐久間先生のご指導もありましたが、三人の先生方と比べるとまだまだお若い先生ですので、皆さんの間で質問していただければと思います。では関先生お願いいたします。

関： みなさんこんにちは。青森大学の関と申します。三人の先生からお話いただいたのですが、私は本当に環境思想の研究者としては初心者です。この場に立たせていただいたのは非常に僥越ではありますが、このような機会を頂きましてありがとうございます。私は元々、野外教育、自然環境教育の現場を20年ほど経験し、今この研究をテーマに取り組んでいるところです。これまで心理的効果などの研究に10年ほど携わってきました。その後、分野を横断し、環境教育の基礎としての自然体験の現場の実践と研究に努めてきました。このように私の仕事が分野を横断したことがあったかもしれないのですが、次第にある疑問がわいてきました。といいますのは、現場にいま



すといろんな対応に追われてこなすことに一生懸命になってしまって、そこだけに終始してしまうんです。そうしますと、指導をしているうちにどこかに漂流してしまうのではないかという不安にかられてきたということなんです。つまり外からいろいろな情報が、例えば「持続可能な発展」などの言葉も頭上から降ってくる印象が当時はありました。「それは現場ではどう教えればいいのか？よくわからない」というのが実際のところの感覚で、おそらくこの中の皆さんも同じ感覚を持ってらっ

しゃる方がいるのではないかなと思っています。そういうような疑問、あるいは不安を感じながら現場を積んでいくうちに、何を研究するかという着眼が環境思想に向くようになっていきました。ということで、私が環境思想の研究を始めたきっかけはこうです。大学では分野ごとに授業が行われますので各先生方が専門知識を持って、あるいは考えを持って特定分野の自然環境教育が行われているわけですが、それに携わっているうちに、あるいは自分が行っているうちに、断片的で部分的な感じが強い自然環境教育の仕方というのはいかなものだろうかという疑問を感じてきました。それから私は青森に暮らす中で、またぎや鷹匠のように自然と溶け込んでいるようなそういう暮らしをされている方々とお会いすることがあり、古来の文化が色濃く残る土地に居ますと、欧米から輸入した環境教育プログラムなどが浸透しないような状況が何となくわかってきます。都市型が強い地域では比較的受け入れられているのかなとも思うんですけど、そういうものがなぜ広がっていかないのか。それから三番目、これが一番大きいんですけど、私が現場を持つ上で、誰かの受け売りではなく間違ってもいいので自分なりの考えをまとめる上で、あるいはビジョンを確立する上で何かしらの明確な判断基準が欲しかった。こういうものが研究を始めたきっかけになっています。そして地球環境問題の視点から必要なものであるということでぜひやりたいと思い、取り組んできました。環境史、自然環境史、時代史、生活史、文化史、思想史、いろいろありますけどもそういう基礎的な資料を踏まえた日本型環境教育のイメージをとらえる、そういう仕事が必要ではないかと思いました。

なぜ江戸期を選んだかと申しますと、江戸期というのは日本の現在の社会の原型、ルーツであるという知見に基づいています。我が国の宗教や政治、経済のルーツ、それが一定の価値づけをもって安定した時代ということです。それからよく言われますが、江戸時代は循環型社会がおのずと成立していた社会である。これを考えて江戸期を選びました。

江戸期思想の特性として「理」を挙げることができます。秩序化を求めるこの時代の社会の風潮で、風土や文化、風俗などが社会に定着する上でそれらがどんな意味を

持っているのか、そういうことを人々が模索していたことを示すキーワードです。そして、仏教がそれまでずっと日本の地盤にあった一方で、江戸時代の仏教は力が弱り、少数派ではありましたが儒学が主導的な立場をとるようになります。さらに職分論の台頭。例えば町人の学問ですとか、そういうものが台頭してきたのが江戸時代の特性ということです。私はこういった江戸期の特性を、誰の著作から入っていかを選定するための一つの基準にさせて頂いていました。江戸期の中でも三人の思想家を選び、江戸思想を環境思想的側面から読み直し、わが国における環境教育の基礎としての有用性あるいは有効性について検討するというところに着目いたしました。今振り返ってみると、読み始めた当初は字面を読もうとしていたため、何を主張したいのかよくわからなかったです。ただ、何回も読んでいくうちに読み方が変わってきました。そうしますと意味がわかるようになり、共感に近いような形で著者の言いたいことが自分の身体の中に入ってくるというような経験をしました。レイチェル・カーソンは感じる、体験の重要性を説いていますが、古典を読むときにも活かされるんだと感じ、とてもいい経験をしたことを思い出します。

ところで、私は三人の思想家を対象としてこの研究を始めました。年代順には熊沢蕃山(1619-1691)、石田梅岩(1685-1744)、安藤昌益(1703-1762 ※生没年が定かでないともいわれる)という風になっていまして、身分が武士、商人、医者ということで三人とも異なります。それから主な支持層ですが、蕃山は、蕃山が仕えた岡山藩主の池田光政などの為政者、武士層から主に信望されていました。一方、梅岩は主に庶民層に支持され、昌益はこの時代には危険思想ということで書は葬られてしまいましたが、明治時代になり狩野亨吉(1865-1942)によって発見され世に紹介されることとなります。思想の内容は重なるところもありながら、それぞれ違うアプローチをしている三人を選んだつもりです。

先に結論から申し上げさせていただきますと、この研究をやって見えてきたことがいくつかありました。まずこれら江戸期思想家は、今日でいう環境思想的要素をそれぞれしっかりと保有していたということです。さらにはその応用としての社会・政治思想、各種実践理論などが発展的に構築されていることが明確に読みとれました。二つ目に、三思想家は思想の最もベースとなるところに人間と自然の関係を置いていることにおいて共通していた。そして三つ目ですが、三思想家の環境思想的要素の特徴は、人間と自然が一体であると言うような表現をしているところではないかということです。人間と自然の距離感が非常に近いのか、重なっているのか、あるいは自然も自分の体の一部というような抑え方をしているのか、とにかくそのような表現が散見されます。四つ目は、三者の人間と自然の関係性の価値観には共通性が認められる一方で、それらは多様なアプローチへと応用されるということです。これにつきましては、後ほど図によってご説明したいと思います。

これらを通じて、日本思想、古典思想をもう一度見直すことの必要性が身をもって

わかりました。先程、環境教育をやっているんですがなかなか普及しないと申し上げましたが、その原因がすべてではないが見えてきました。一つの理由として思想的な要因があるのではないかというような自分なりの考察、そこまで漕ぎ着きました。また、読んでいて今すぐにでも使えるようなノウハウがたくさん詰まっているなという感触を受けています。例えば石田梅岩ですが、今も読んでいる経営者の方がたくさんいらっしゃると思います。今すぐここで使えるような考え方やノウハウがあります。今回、三人を対象にしていますが、江戸期の著作を網羅していくと大変な知恵が詰まっているのではないかと想像します。それから、現代の私たちは自然（環境）とある程度距離を保って暮らし、ある時はまた自然の中に入って、というスタイルが主ではないかと思うのですが、その視点から読むと読み違える所がたくさんある。江戸期には人と自然の関係がもっともっと濃密な中で培われているということを前提にイメージして想像して読むしかないのですが、そういう思想には非常にパワーがありまして、（自然と人間の関係のことが）よくわからなくなってしまった現代人に非常に大きなメッセージを発してくれるものだと思います。とんでもないパワーがあります。この三人の方たちは思想家と表現していますが、1歩間違えると殺されかねないようなそのような時代背景で自分の価値観を守っているわけなので、今でも影響を及ぼす力があるのではないかと感じています。

では、具体的にご説明します。熊沢蕃山ですが、江戸期の初期の人です。岡山藩ではじめ池田光政というお殿様に仕官し、一時、為政者として活躍をしました。光政は土木事業に力を入れた政治をしており、その傍らで今でいう環境政策を執行することで蕃山は力を貸すわけです。最終的に蕃山の思想がいき過ぎてしまい、経済を考えたらいんじゃないかという光政の意見とぶつかり、最終的には藩を出ていくことになってしまいます。ただそこで自分の考え方を曲げないわけで、その後も全国を転々としながら、幕府の政治を批判しながら人生を送り、最後は古河に幽閉されます。蕃山は「万物一体の仁」を掲げていますが、非常に高い人格を求めている思想であることがわかります。そうでないと、結局、環境保護はできないんじゃないかと感じさせる主張です。具体的に蕃山が何をやったのかということですが、伐木の停止、造林、立木の計画的伐採、貨幣経済の弊害を指摘、山川の地理に精通しているものを助言者として採用する、新田開発の反対、などです。蕃山研究の中では、彼が林業としてこれらを遂行したのではなく、この時代にあくまでも山林保護、今でいう自然保護のために行ったところをもっとも評価すべきであると指摘しています。また日本で初めて自然保護を行った人として位置づけをされる方もいらっしゃいます。その基に人生論、言葉上ではすごく難しいんですが、自然との真の共生というのは徳によって初めて可能であるというベースがあります。だから誰でもそのままできるものでなくて、自分を鍛えていかないと環境保護は出来ないんだなということを改めて考えさせられました。そして、蕃山の大きな影響力だと思うんですけども、『諸国山川掟』という幕

府が発布した決まりごとがありました。江戸幕府がこれを発布する前にすでに岡山藩では蕃山が山林保護を指導していたこと、条文が岡山藩の山林保護のそれと酷似していたこと、蕃山から強い影響を受けた久世大和守広之が老中として、中心的に『諸国山川掟』発布の仕事に関わっていたことなどから、蕃山の影響によって江戸幕府の政策にも反映されるようになったのではないかという仮説もあります。このことは証明されていませんが、もし事実であったなら、地方が生んだ政策が全国に広まるという公害時代に私たちが経験してきたこと、すなわち、各県で実践されていることがうまくいってそれが日本の環境政策なるという事例の先駆けだと思います。蕃山が思想の根底に備えていた「万物一体の仁」というのがどういうものなのか、私が一番に捉えたポイントは、万物は人のためにあるものと言いきっているところです。しかし、だからといって好き勝手にしていいということにはならない。人間は他の生き物と違って徳がありますから、という表現をしています。つまり、人のために宇宙のすべての物は存在するが、人間は徳をもって万物に配慮すべきだという思想を広めたのです。

次に石田梅岩です。初めて読んだ時はさっぱり分からなかったです。先ほど佐久間先生が儒教もすごく環境のこと、自然のことを考えている思想だとおっしゃいましたが、何度も読み返すうちに正にそうだと思います。この人は商人ではありませんでしたが自分で勉強を積んで儒学者として45歳で講席を開き、現代では石門心学の開祖として位置づけられるようになった人です。農業をしていた経験もあり、あるいは商人になってからも現代でいう自然に優しい暮らしをし、その暮らしぶりはおそらく江戸の人たちの中でも突出した徹底ぶりだと思います。それを実践しつつ、築き上げた梅岩の思想、私は自然との共生生活思想と表現しました。特徴の一つとして儉約の至極があります。儉約というのは自分のためにやるものではない。自分のためにやるのはケチだそうです。天下のためにするのが儉約だということです。その儉約も国のためにやるか社会のためにやると思っっているうちは本当の儉約とは言わないだと述べています。無意識に、自然体として行動できるようになるまで本物とは言えないと書いてあります。蕃山もそうですし、それから梅岩も昌益もそうですが、徹底した実践の修練を経た後の無我の境地を表現しているようなところがあるのではないかと思います。そこには仏教的なところがあるのではないのでしょうか。また修験道に通じるような暮らしぶりというか、そういう要素が多分に見受けられました。「勤勉」「勤労」ということが日本人の特徴として言われることがあるが、やはりそういう特性が強かったのかなと読みとりました。それから「商人の道」。当時の商人は階級的に虐げられている立場でありましたが、梅岩は商人というのは儲ける、金銭を稼ぐというのが商人の仕事であって、商人は金銭を正しく流通させる番頭であるということを言っています。あるエピソードの中ではお金持ちであっても使うべき所でないときは一銭も使わないというような考え方があり、使うべきところでは、そのお金は戻ってこない前提で差しあげてしまう、そういうような世界に役立つ使い方というのを商人の道の中で

説明しています。

最後に安藤昌益です。昌益は秋田の出身ですが、青森の八戸で医者として高く評価された人でした。1700年代に生まれた方ですが、彼のはっきりした記録は、ある時から残っていないとされています。京都に出て仏教を学んだりいろいろな学問をするんですが、何か自分に合わないということで最終的に医者になります。そして幕府から高い評価を受けるようになりますが、私は初めに安藤昌益の『自然真営道』を読んだ時、驚きました。学問、あらゆる思想、宗教などの存在を全否定している内容で、当初私は大変反発を感じながら読んでいたものです。そして人間に必要なのは農耕労働だけであると言っています。じゃあそれ以外の仕事はどのようなだろうという風に読むわけなのですが、それも何回も何回も読んでいくうちに、実は、昌益の思想に該当しない人々を彼は拒否しているわけではないのではないかと、という読み方に変わっていききました。確かにいろんな職業がありますし生き方もあるんですが、やはり人間の生きる原点に食があり、農耕労働を万人がやることによって人間同士の共感が生まれるというのは考え方としてあってもいいのではないかとこの気持ちになります。そして影響を受けました。さて、昌益の思想の特徴ですが、具体的な言葉では「活真（かつしん）」などの理解しづらい造語がたくさん出てくるんです。つまり既成の考え方から外れ、一から自分の考え方を確立しようという独立心旺盛な立場をとっています。ということで、使っている用語も見たこともないそういう表現をされているものがあり、ちょっと読んだだけでは意味がわからないです。解説を読んでもなかなかわからないのですが、よく読むと、例えば蕃山や梅岩が考えている人間と自然の関係に近いところがあるんじゃないかと考えています。以前、昌益は全学問否定をし、この人独自の考え方を構築しているのではないかと論文に書きましたら、仏教史ご専門の先生が「この内容はやはり仏教ベースでしょう」とご指導してくれたことを覚えています。よくよく読んでみると、独立心旺盛であったとしても確かに仏教に通じるところがあり、日本人のベースが活着していると判断したことがありました。

さて、三思想家がどういう思想的構造をなしているのか、私なりにそれを整理してみることにしました。欧米の環境思想ですと、環境思想が「分野」として成立している中に専門知識が組み込まれ発展しているように思いますが、江戸期思想では、日常の暮らしの問題、日々の暮らしの問題などが端々に扱われていまして、あるいは生きることとは何なのかとか、学問とは何だというようなことまで含まれる総合的な思想であって、江戸期の日本人というのはそういう思想の築き方をするのだな、と私なりに全体像をとらえました。人生に必要なものすべてを題材に自らの思想を築きそれに依っている。ある部分に特化したものではなく、ホリスティックな思想とも言うべきものを築いているのだな、ということがわかりました。

三思想家にどういう共通点があるんだろうと思って図式化を試み、私は3つのレイヤーによる構造化をイメージしました。コアに環境思想的要素が根づいており、それ

をベースに社会・政治思想があり、そして各種実践活動思想があるのではないか。このような視点から考えてみると、蕃山、梅岩、昌益ともアプローチは異なるが、最も重要なコア部分に共通点が認められました。ここが一番重要ですが、三思想家の「自然と人間の関係性」の価値観には仏教や儒教などの考え方がとり入れられています、あくまでも自らの生活体験、観察能力、インスピレーションによって再構築したものではないかととらえています。

ではこのような日本の古典思想を現代の環境教育にどのように生かすんだ、という話に戻ります。私は、環境教育は最終的には総合的あるいは、ホリスティックなそういうものの形をとる必要があるのではないかと自分の中では仮説を持っています。ホリスティックな世界観とはどうやって伝えていくのか考える意味で、多少自分が勉強したものを整理しようと思っています。極端な二つのモデルとして「万物一体、人間が自然に包まれる、心理的に自然の内部に存在、人間と自然の心理的距離なし」それからもう一方のモデル「人間は自然の一部である、観察の対象としての自然、心理的に自然の外部に存在、人間と自然の心理的距離あり」を考えました。ひょっとすると、これまで現場の中で私が感じてきた違和感や疑問点は、両モデルが教育現場の中でごちゃごちゃに使われ、ぶつかり合っているのではないかと考えています。具体的な例として、私はどちらかという自然の活動をしようとする自我を無くし、自然に共感したいという傾向がありますが、その状況で自然観察などを強いられた場合、自分がやろうとする精神活動を阻まれるという感覚に陥ることがよくあるんです。そのため、導く人は参加者についてよく見極め、しかもその土地の風土、文化、歴史などの特徴を把握しつつプログラミングをしていく段階に入りつつあると考えます。非常に難しい作業ですが必要なのではないのでしょうか。それらを行うことによって、日本人に浸透しやすい環境教育の特徴と補うべき部分が明確化していくのかもしれない。

私の拙い研究結果をもとに、環境教育と環境思想をどうつなげればいいのかということをお話しさせていただきました。まだ三人しかしっかり触れていないため、何とも言えないところが多いので、皆さんからご指摘いただければありがたいと思っています。これで私の発表を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

岡 島：関先生から私もこのテーマを聞いた時にはやはり若いことはいいな、と思いました。こんな膨大なものに、刀一丁で飛び込んでいくのは心意気があって女性ながら感心しました。これからどんどん皆さんの中からも同じような考え方を持つ方が出てくると研究分野も活性化していくのではないかと思います。どうもありがとうございました。

第2部 ディスカッション

加藤：西洋哲学の歴史はあまりにもまだ未開発でありまして、特にユダヤ教の思想とイスラム教の思想が部分的に混ざり合っただけで出来たいろんな分派の思想だとか、ユダヤ教内部での違った考え方などは、日本でほとんど紹介されておられません。今、日本で行っているのは古典文献の部分的な翻訳を若い人がしている段階なので、世界全体のあらゆる古典文化が明らかになっていったならば、東洋と西洋という分け方自体があまり重要ではなくなると思います。

岡島：私も一度新聞記者の時にですね、東洋思想の方が環境的にすぐれていて、西洋思想は違うという先生方がいらしたものですから、そう簡単に言えるのかなあとと思って、インド哲学の中村元先生のところに行き、もうお亡くなりになりましたけど「(このことについて)いかがですか」とうかがったところ、中村先生は「そういうことを言う人は勉強不足ですね」とたった一言で終わりました。簡単に東西がどうだというふうには言い切れない部分があると思うんですね。今、むしろ混沌としている中で急いで歩いてきたんだけど道を見失ったので、見失った所まで戻る。山登りではいつも道を見失うとまた一旦戻るわけですね。どうも今人類全体がそんなような感覚で昔の考え方とかそういったようなものももう一度勉強し直すようなところに一步戻ってみる必要があるような状況ではないかという気がしております。続いて、佐久間先生から儒教のお話がありましたが、佐久間先生は短めにお話しされたので、もうちょっとおっしゃりたいことがあったのではないかなと思いますので補足をどうぞ。それと一点だけ関先生との関係もあつたんですが「山川の掟」についてですね。あれは徳川幕府が日本中の木を簡単に切っちゃいかんということで行ったものでした。久世大和守広之が老中の時に行ったので、彼と蕃山とは親しい関係があつたから蕃山の行ったことが幕府に影響を与えて、それが全国的に広まったのではないかということに関先生がおっしゃってましたけど、その辺の検証のようなものは行われているのかどうか。その二点をお話頂ければと思うのですが。

佐久間：後半の方のご質問は、はっきりわかりません。(蕃山と)関係があるのかもしれませんが。ただし、必ずしも蕃山のみにもみられるものではないので、例えば「山川は国の本なり」これはあの蕃山もいうんですが、徳川日本では結構、各藩から出される法令の中に謳われていたりするわけですね。それをむしろ我々が明治以降忘れていて、もう一度そのようなことを考え直そうという背景ですので、はっきりとした証拠というのはよくわかりません。それから最初の方の問題で、先程からいわれている洋の東西というのは正にそうだと思うんです。これまでの日本の研究では、儒教は、政治思想として「儒教というのは身分差別思想だ」とか「結局支配と被支配ということを正当化するんだ」など、そのような方向の主張が主流でした。非常に評判が悪かった。私はちょうど中華人民共和国が誕生した時に生まれました。文化大革命の時、儒教はもう

コテンコテンにやられました、今はもうまったく違います。人類の遺産として汲むべきものがたくさんあるだろうと。さきほど中村元先生のお話がありましたが、たぶん仏教の方が儒教以上に環境の問題はあるかもしれない。そのことに先鞭を着けたのは明治 1867 年に生まれて 1941 年に亡くなった南方熊楠という非常に変わった人です。彼は当時、土宜法竜という真言密教の、日本でもっとも学識のある人と対等に話ができるほどでした。熊楠は仏教信者ではないんですけど、仏教について相当勉強しているわけですね。例えば今、神社が一応残っていますけども明治政府はあやしげな神社をつぶしていった。19 万ほどあった神社が 4 分の 1 くらいになるんです。だから昔はもっと神社とお寺は親密だったんですね。さらにその神社もたくさんあったんですが、彼はこの政策に対して反対しまして、大正期になってからこの政令が撤回されるんです。田中正造の反対運動は敗北するわけですね。こういうことを踏まえても深く考えている人がいるわけで、やはりそういうものをもっと研究する必要がある。もちろん我々はヨーロッパ、欧米から学ばなくちゃいけない。それは加藤先生が様々な形でされているように、と同時に自分の足元にもあるんだという……。例えば私が知っている限り、仏教の環境思想における意義を主張したのはシューマッハです。『スモールイズビューティフル』を書いた彼が、「仏教経済学」と表現した。ぼくはぎょっとしましたですね。彼は現代の経済学と比較して仏教に汲むべきところがあるんだという。あるいは今日は神道には触れませんでしたけど、そういう点でももちろん欧米のものを学ばなくちゃいけないけれども、同時に我々の足元のこの列島の営みを本当はもっと学ぶ必要があるのではないかと。

岡 島： はい、ありがとうございます。佐久間先生のお言葉で私もいつも使わせて頂いているものがあります。「今正しいと思っていることの中に、間違いがあるかもしれない」。原発などはそうかもしれませぬ。そして「古いとか後れていると思って捨て去っているものの中に正しいことがあるかもしれない」。大変名言だと思います。

それから鬼頭先生、自然を前にして人間と人間との関係というところが今までのいわゆる自然保護論ではなかなか言及されなかった部分で、そこも考えていかなければいけない。今までは自然保護というと「人間と自然の関係」ですが「自然を前にして人間と人間との関係もある」ということは、指摘している人がまだ少ないんじゃないかと思うんですね。そんなことも踏まえながらもう少しお話して下さい。原発の話でも結構ですが、お願いします。

鬼 頭： 自然と人間の関係だけじゃなくて、自然を前にして人と人との関係が重要だとしましたけども、今日の特に佐久間先生のお話から、あらためて儒教というのはある意味では人間と自然の、要するに自然の摂理とあるいは人間社会の摂理があえて一体となった、ある意味では自然の摂理の中に人間もそういう形で詰め込まれている、と考えられていることを認識しました。先程も自然的な環境だけじゃなくて人と人との関係が重要であることをお話しましたが、社会的な問題、それからもっと精神的な問題で人

がどう豊かに生きられるかという問題を一体に考えないといけない。儒教の環境思想というのは、それを一体として捉えているというところが大変意欲的だなという感じがします。今までのどちらかというところとアメリカの環境でいえば人間中心主義という形になっちゃうわけだけでも、「人間中心主義」か「自然中心主義」かというのが大事ではなくて、もっと一体としてあったものを私たちはやっぱりどう学ぶかというのがずっと大事なことだなというふうに思いました。

それから例えばよく自然資源の管理でいうとですね、現代的に言えばその地域の人が、自然の資源というか、自然に対してすごく畏敬の念を持ってきちんとそういうことをやっているというような解釈がありますが、調査するとそこに暮らしている人は、実はあまり考えてなくて、規則が厳しいのは何であるかというコミュニティのあり方ということが彼らにとってメインの問題だったりします。そこで永続的に暮らしていくということを考えていった時に、結果的にそれが自然管理、いわば自然保護、環境保護にもなっているわけです。つまり、意識的にやられているわけではなくて、結果的にそのようになっている。そこに暮らしている人たちは、自然資源との関係よりも人と人との関係の方が大事なわけでも、それが結果的には自然との関係にもうまく派生しているところが面白いと思うんですね。だからこれは人のことしか考えていないから結局だめだということではなく、その辺りはもっと一体的なものとして捉えた方がいいんじゃないかということなんです。コミュニティのあり方、自然に対してどのように向き合うかというようなことが一つの文化になっているわけですね。里山で例えば実際にいつ伐採するのか、それをまたマキに使って・・・などの形で里山を管理します。決して自然をそのままにしておけばいいということではなく、むしろ自然をきちんと利用しながら文化をどうやって将来につなげていくかということです。ただ里山のことでは、昔のように例えばマキしかなかった時代と違う。実際に落ち葉などを、例えば農業に使ったりというようなことだけでなく、多様な利用法について、僕らはやはり考えていかなくてはならないということもあります。昨今のエネルギーのことを考えると、薪を使うというのは大事だなんていう認識をもう一度、僕らが持つということは重要だと思うんですね。前にエネルギーの専門化の工学系の人と話をしていた、いわば例えば実際に里山を管理しているんなバイオマスですよね。そのバイオマスをどのようにやったら一番効率がいいんだろうという話をすると、結果的には薪が一番効率がいいよね、ということになります。だから結局、薪をそのまま燃やした方がいいじゃないの、と。そうすると薪ストーブはもう少しそのような視点から見直した方がいいのではないかと。だからそういう意味では里山の文化をもう一度考えるということが、ライフスタイルを僕らが見直すということになるし、落ち葉を使って堆肥にして農業に利用するという循環型農業などをうまく取り入れるということ、昔に戻るというよりはそのような昔のシステムで為してきたことを、今の僕らがこれから未来に向けてどのような里山の文化を創っていくか

ということについてもっと働きかけていくことが多分大事なのかと……。現代の私たちのライフスタイルを新しくしていくということは、実は過去にやっていたことなんだということに気づく。そういう深い意味がある。人間の社会的なあり方のような問いを、もう少し現代的にしかもその新しい文化運動のような感じで考えていけたらすごくいいんじゃないかなと思います。

岡 島：ありがとうございました。それでは質問や抱負などをご自由にお話しただければと思うのですが。

鬼 頭：先ほど、加藤先生がレオポルドの紹介をされました。レオポルドの考え方に関して、要するにレオポルドが実際にあるものは安定を保つという傾向で、反対の傾向にある、間違っているという感じで、どちらかという人間の倫理と結びつけたという感じでおっしゃられたましたが、レオポルドがこう言ったということは今、多方面から再評価されていると思うんですね。その時にレオポルドがどういう人であるかということ是非常に大事だし、どういう時代にあったかということをやはり思い浮かべることは現代的にも意味があるのかなと思います。レオポルドは基本的には森林管理官だったんですね。ずっと森林を管理してシカの管理をやっていたわけですね。シカの管理はある意味じゃ天敵のオオカミとの関係で管理できるだろうとやっていたら、実はそう簡単にはいかない。その頃失敗がたくさん続いて、象徴的であるシカを食べるオオカミを駆除するというような単純なものではどうにもできないというところから、もう少し生態系そのものを考えていったという事と、ちょうど1930年代に彼らはドイツとかスイスに視察旅行に行くんですよ。徹底的に管理するというふうにいわれているところに行ったんだけど、彼は愕然とするわけですね。永続的にか徹底的に管理しているというが、こんなに土地が疲弊するのはおかしいじゃないかということで、彼は「土地の倫理」という話をしていると思うんですね。だから土地に対して、あるいはどういう土地にどうするかということに関して、人間が徹底的に管理することに関して彼がどうも根本的に疑念を持ったということがすごく大事なところだと思うんですね。人間がコントロール出来ない中で自然というものを見つめて、まさに土地の疲弊というようなところの中で「美」とか「病む」とかですね、そういうような言葉を使いながら主張したのではないかなと思うんです。その辺を加藤先生がどのようにお考えかが知りたいです。

加 藤：今、鬼頭先生がおっしゃったように、レオポルドの思想の面白さというのはもうこれ以上自然そのものの持っている自分の生命を維持する力をいじめるようなことをやったらダメだということをよく見抜いていたところにあります。それで生態学のいわば割合進んだ考え方を土地に対する人間の態度の中に導入する必要があるというところが非常に重要なところですよ。そこから持続可能性という概念と、レオポルドとは直接つながらないんですけども、結局レオポルド的な考え方をすれば、廃棄物を累積していったら絶対地球全体が住めなくなりますよってというようなこと

が出てくるわけですね。ところが、人間が権利だとか正義だとかの概念を維持していたことと動物の正義だとか生存権とかいうものと共通にすればいいじゃないかということになると、それはちょっと人間が管理しきれない共同体になってしまう。自然そのものと一体となった社会的なシステムを要求することになるのでそれが無理だったことは、すでにローマ時代からもうすでにわかっていた。結局アメリカの環境倫理学は、ナッシュなどは「エキスパンディングサークル」(圏の拡大) といって、権利をどんどん自然物にまで拡張しようという考え方を出したんだけど、それは結局、今ではそれを支持する人がどんどんいなくなっちゃっているわけですね。人間の秩序は人間としてやっていかなきゃならない。レオポルドの考え方とレオポルドの間違いと両方をいわばちゃんと考えに入れば、人間は自分同志の約束と社会的な制度を用いることによって、自然の持っている生命力を保持するように責任をもって自然を維持していかなければならないという結論になります。レオポルドそのもので突っ走ろうっていう人がまだいますけども、ちょっと無理なんじゃないかなと思います。ただナッシュなんかでもあの当時はまったく新しい倫理ができるんだって、カッカと燃えてましたよね。

- 岡 島:** 倫理のところまで考えてなかったかもしれないですね。生態学の側面から言っているのであって、哲学から考えると厳密性に欠けるということになる……。倫理、哲学の方で完全ではないけれど、レオポルドの言っていることは片方では正しいわけですね。それを全面的に人間もネズミも一緒だみたいに解釈するのではなくて、違いがあるまま今ここに存在するという解釈の仕方をすれば、それほど間違っていない。
- 鬼 頭:** おそらく人間と何かの動物との関係みたくなところの一般論にいくのではなくて、私たちが土地というものに対してどういうふうに向き合うかということに関しては、非常に謙虚ですね。最初はだから鳥獣管理というゲームマネジメント、……。ゲームというのは要するに狩猟ですからゲームマネジメントといていたんだけど、いやゲームマネジメントじゃないって言い出したんですよ。だから最初はウィスコンシン大学のゲームマネジメントのプロフェッサーだったんだけど、途中から名前を変えて「ワイルドライフマネジメント」に変えたんですね。そこで初めてワイルドライフマネジメントっていう新しい概念が出てきた。今まではゲームマネジメント、ゲームをというある意味じゃ人間にとって有用なものだけを管理するという。人間にとって管理してくるというのを、「ワイルドライフ」という、もう少し相対として管理してくるというように変わったところが大きなところだと思うんですけども。このようにいろいろな背景もあるし、そういう入り方の倫理というふうに考えればいいんだけど、動物とかそういうことの倫理になっちゃうとちょっと違うと……。
- 加 藤:** クリストファー・ストーン『樹木の当事者適格』(Christopher Stone(1974)“Should Trees Have Standing?” Toward Legal Rights for Natural Objects. Los Altos, Ca. :William Kaufmann. 岡崎・山田訳『現代思想』1990年11月号) が出て、それで

人間でないものにも代弁権があるという考えと法的権利が一緒になったので、日本でもヤンバルクイナの原告にそのヤンバルクイナそのものを入れると主張して、裁判所で却下されるというような事を何度もやってきたわけですね。その点はもうそろそろちゃんと整理したほうがいいんじゃないかと思うんですね。

岡 島: 皆さんの中では、アルド・レオポルドという人を初めてお聞きになった方もいらっしゃると思うのですが、エール大学を出てからアリゾナの森林官になった方です。そこで今、鬼頭先生がおっしゃっていたように、オオカミを殺せばシカが増えるだろうという単純な発想でオオカミ殺したらシカがドーンと増え、その年にシカが冬を越せなくてみんな死んじゃったってということで、オオカミがいたときの方がシカの数が多かったと、そのようなことを学んだんですね。アメリカでゲームというのはハンティングのことですね。ゲームマネジメントというのは日本ではあまり考えられないんですけど、アメリカではきちんとした学問になっていて、どうしたら動物を管理して、そこを撃って遊んでね、ずっと遊べるかっていうことを学ぶものです。

加 藤: あんまり管理し過ぎちゃうとおもしろくないから、野性味がないと困るというので野性味を維持することとハンティングの数として成果が上がるということの両方を兼ね備えるような管理が必要だって書いてあります。

岡 島: そういうことをやって、ある時オオカミを撃ったんだそうですね。母親のオオカミで、子供がそばにいたんだけどそのオオカミを撃って、オオカミのそばまで行ったら、緑の目がね、光って……。緑色に光って、それを見た瞬間「私は間違えていた」と思った、ということが書いてあるんだけど、その辺のところから倫理的に移って行って、それで森林官をやめてウィスコンシン大学の先生になってゲームマネジメントを教えるんだけど、あのオオカミの目が忘れられないんでしょうね。ハンティングするのにどうのというところからもう少し別次元に入って行って、それで深めていくと『野生のうたが聞こえる』に書いてあるような話になる。そういう目で私なんかを見ると、人間は自然の一部であることを科学者の視点からかなり明確に言った人じゃないかと思うんですね。今の環境倫理学等のスタートラインにもなっているというような人だったんですね。ですので、今その解釈をめぐって鬼頭先生からいくつかお話がありました。哲学的な観点から見るとちょっと直感的、荒っぽいところがあるかもしれない。しかしネズミも人間も一緒にここに住んでいるのは確かなので、その辺りのところを少し考えようということだと思うんですね。これ実は、捕鯨問題でアメリカはそこへぶつかってくるわけですね。クジラとネズミが最後に一匹、一頭残ったけどどっちか一方を殺さなきゃいけないとなったらどっちかというと、アメリカ人はほとんどネズミを殺せて言うんですよ。なぜだって言ったらクジラは頭がいいって言うんでね。そしたらバカは殺していいのかって話になるわけですよ。これ、レイシズムにつながってくるわけです。その辺りのところでレオポルドの話というのはアメリカなんかに行って論争するといつもおもしろいテーマになる。ですからぜひみなさん、

ぜひお読みになっていただくといいんじゃないかと思います。

佐久間: 私は考え方としては鬼頭先生の環境論が非常によくわかります。例えば高校に行って出前講義するんです。高校生は圧倒的に科学主義です。つまり科学が進歩すれば環境問題は解決するんだらうという。そういう考えが非常に強いです。中国の 10 億の人が日本と同じように車を持つなんていうことになったらもたないでしょうという話して、だから先進国は落とさざるをえないですね、これは。発展途上国は落とせとはいいません。彼らは彼らでやっぱり上がってくる。ここでうまく調和がとれてそこが資源の維持になればいいと思うんです。しかしこれを話しているとお説教になるんですよ、高校生に対しては。一方ではしかし、それを本当に子ども達にどう伝えていくのかっていうこれは独自の課題だと思うんですね。そこで例えば教科書はどうするかとか。ぼくなんかは例えば金子みすずの詞は全部とは言いませんけども、いい教科書になるんです。あるいは宮沢賢治も。例えば宮沢賢治のあまり使われないけどベジタリアン大祭というアメリカの東海岸のある島で世界のベジタリアン、菜食主義者の大会が始まり、そこにシカゴの食肉業者が殴り込みをかけるという話。日本から行ったベジタリアンが主人公ですね。あそこで議論されているのはほとんど今の我々が考えている生命倫理の問題です。彼が多分 24 才ころ書いた賢治のよく知られていない童話に『雲とナメクジとタヌキ』というのがあります。彼は非常にアクティブな日蓮宗信者ですよ。金子みすずは 1903 年に生まれて 30 年に 26 才で自殺しちゃうわけですね。賢治は盛岡高等農林で、科学者です。仏教者。家は裕福でした。最後は農民の中に入っていくといういろんな側面を持っていて、そういう点で近代日本文学の中で一番とっていいぐらい人気のある人ですけど、環境思想などの点からみると尽きないところがあるわけですね。環境教育の本当にわかりやすいテキストですね。今度、環境思想学会っていうのがもしできたら、その中のひとつの大きな仕事としてそういうこともやってみたいと思う。あるいはやれたらいいなと思います。

岡 島: ありがとうございます。フロアからいかがでしょう。

A 氏: どうも初めまして。貴重な講演いろいろありがとうございました。私現在 66 才でございます。長年、悪いことをしてきたつもりはございませんけども、環境に結構悪いことをしてきたのかなということを含めて、女房ともども勉強し直すとはいいながら、何をするかあということの中で、自然的な農業ですとかを趣味の傍らやっていきたいなあというようなことで、この小諸の地に越して参りました。そういう中で今日もいろいろ先生方のお話があった通り、先人の教えを忘れて古い物、後れているものはもうみんなすっ飛ばしてというような事を私の人生の中でやってきたのかなあということを考えてながら、何点か質問があるんです。質問は、加藤先生に未来世代に対して何を残せばいいのかなあということの結論めいたものはないだろうとは思いますが、具体的にお示しただけなら大変ありがたいです。それから鬼頭先生の、基盤という中で調整ですとか文化ですとか、そういうところに言及をされている部分につ

いて、どの辺りのことを評価するのかなあ、ということがわからないので教えていただきたい。佐久間先生につきましては私も漢詩だとかそういうものを読むのが好きだった方なんですけど、どうも読み方が難しいので、そんなことで何か参考になるものがありましたら教えていただきたい。関先生については野外教育ということで、私も孫がおるんですが野外教育というと西洋用語でいうとアウトドア。バーベキューやったりとか、キャンプファイヤーやったりとかの話になるのかなあと思うんですが、自然観察とアウトドアというのは当然違うのかなあとは思いますが、その辺の違いについて教えていただきたいなど。以上でございます。

岡 島：ありがとうございました。では順番に、加藤先生から。

加 藤：柳宗悦の「健康の美」という思想を日本人がもっと評価すべきと思います。ある時日本で建設される建物の数と現存の数というのを計算した人がいるんですけども、するとその年に建てた建物は全部 15 年以内で建て直し、壊さないと建築業が維持できない。そういう建物そのものをもものすごく短命化することによって初めて建設業という産業が維持できているということを、木俣修氏が指摘いたしました。それで私は建築家の安藤忠雄さんなんかと一緒に日本の住宅建設の耐用年数を 100 年以上にすることを提案しました。多くの人々がこの家に住んだら、もう次の世代、またその次の世代もここに住んでいくんだという。そういう思いで家を受けとめるような、そういう文化を築くべきではないかという提案をしたわけです。私たちの文化の中で長期的な展望を持って生活を見つめるということがあまりにも欠けている。あと 40 年で石油が枯渇するのに自動車が増えただけが増えていくことを、みんなが手柄話のような話をする。様々な金属が枯渇するときに、どうやって未来の世代、次の世代、次の次の世代の生活を維持していくかという問題にあらゆる人が心を寄せる、関心を持って我々の生活を捉える感覚を長い目でみる文化を養い、それを次の世代に伝えていくこと、それが今一番大事だと思っています。

岡 島：供給とか基盤というのは、多分生態系サービスの話だったと思うんですけどね。ご質問の内容についてもう少し補足いただけますか。

A 氏：供給と基盤というセンテンスの中で説明されていることは十分基本的に一次産業的な役割の中でよくわかるんですが、それが調整というカテゴリーと文化というカテゴリーというのが示されていて発展的になっちゃってるんで、私にはちょっと理解できなかったものですから、という意味でございます。

鬼 頭：要するに自然の仕様をどう使うかという、自然との関係というふうになるとそれを実際に、例えば食べたりとか、家の材料とか、着る物とか、なにかそういうふうになんか私たちがいろんなものを使うというようなのが、供給サービスの部分になるんですね。それに対して自然そのものが人間を支えるようなことを考えなきゃいけないんじゃないかということがずっと言われていて、それがここでいう基盤サービスということだと思ってるんですね。ですから今までは自然ということになると、いわば自然とは利用

する価値があって、そういうようなものだっていう考え方と人間を支えるようなものとして、母なる大地としてそういうものがあるんだってという考えの二つだったのが、実はその自然性だけっていうのはただ供給してくれるサービスだけじゃなくて、私たちの生活に安全、安心をもたらすような機能もあると。ですからある意味では人間がいわゆる生活の糧として利用するというよりも、人間の快適性、アメニティの問題にも関係してきます。いわば安全性を確保するというような形がどうもあるらしいと。それが調整サービスなんです。こういうものが非常に軽視されてきたので。例えば津波であれば大きな防波堤を造ったりというような感じでしか考えないんだけど、自然の調整機能っていうのをもう少し私たちがうまく使うようになれば、そんなコンクリートで固めたようなものを使うだけじゃなくて、もっと違うことができるでしょ、というようなことがだんだんわかってきたということでしょうね。

文化サービス、私たちが享受する自然からの恵みには、ただ食べたりなどの利用の側面だけではなくて、様々な森林セラピーに利用される森にみられるように森林浴や精神的な安らぎを与えるもの、あるいは野外教室であれば野外で子ども達が遊ぶことによって精神的にいろんなものが得られるなど、直接それがすぐにお金になったり、あるいは利用したりという部分ではないようなものが実はあります。だからそういう調整サービス、文化サービスというようなものが、実は自然とか生態系などを考える上で重要だということが明らかになってきました。私たちは自然とどのように向き合うかを考える時に、もちろん供給サービスでちゃんと利用するということが大事なんだけど、そのときにはちゃんと調整サービスを保持しましょうとか、私たちがもっと文化的にきちんと自然をアメニティとして感じとれるような形に自然が残っていないといけないでしょうと。そういうことがバランス良く対応するような形で私たちが自然と関わるというような入り方があるんじゃないかと。

岡 島：実はこれはわかってきたっていうけど、昔から熊沢蕃山などが言っているわけです。だから忘れてたわけ。それでもう一つ今日は長野中部の森林管理局長さんがいらしているんですけど、木材供給一辺倒だった林野庁がだんだん環境教育を扱い始めて現在は森林セラピーも実践している。しかし、林野庁は木材供給を中心にやってきましたね。戦後、木が足りない、住宅が不足しているといってどんだん伐採して、昭和36年には自由化した。今度は杉の花粉の問題が出てきたり、調整機能にも林野庁は着目して、現在ではこれ三つともやっているんですね。森林のことだけで考えてみると分かりやすいかと思うんですけど。局長さん、いかがでしょう。

B 氏：ご紹介いただきました中部森林管理局の者です。ちょうど今年は国連の国際森林年というのでして、そのテーマが森を歩くということで、先ほどこの職員の方に聞くとこの周りもミニトレイルを作っているということなので、ぜひ皆さんに森林に入ってもらって森の持っている価値をぜひ感じていただきたいなと思っています。私も、昭和20年に、戦後に林政統一ということで林野庁でも国有林という林の管理をさせ

ていただいているんですけど、これがいよいよ一般会計になることになりました。そうすると例えば環境省の出先機関、それから国土交通省所属の出先機関と同じような位置づけになって、はて何ができるかということをお我々一生懸命探して、今日もこのシンポジウムにそういったヒントがないかなと思って来たんですけど、予想以上というか実はありすぎてですね、頭の整理をするのが大変です。いずれにしてもその自然といった場合は、御案内のとおり日本の3分の2は森林ですし、そのまた3分の1は国有林ということなので、やはり国有林の管理をどうするかです。加藤先生のお話によってですね、従うか、征服するか、管理するかでは、管理するっていう選択肢しかないということですので、国有林を管理することを一般の国民の方に見ていただいて、民有林のあるいは私有林の管理をそれに見合っただけであればというふうに思います。

岡 島: ありがとうございます。A氏のご質問に戻ります。佐久間先生、お願いします。

佐久間: そうですね。例えば中国のそういう古典で儒教ですと、四書五経といいます。四書というのは『大学』『中庸』『論語』『孟子』。これは岩波文庫に全部あります。五経といいますと五つの中で『易経』が岩波文庫にあります。論語なんかはいろんなものにありますから。五経になりますと『易経』だけです。あとは『書経』『詩経』『礼記』『春秋』いずれも文庫本にはありません。それから朱子等は朝日文庫選という朝日新聞社が出した中に抜粋があります。ただし抜粋ですから私が引用したようなところは入っておりません。編者がそんなものは必要ないということで別の政治思想などになりますから。たしかに多くの人々がアプローチしようとしてもまだまだそういう状況で、これはもう専門家の私たちの責任です。それから日本の場合にはですね、中公バックスに『日本の名著』のシリーズがあります。これも多いのは抜粋です。だから運良くたどり着けばいいけども、例えば熊沢蕃山は文庫本がありません。安藤昌益は難解です。非常に難しいということもあって文庫本もない。文庫本は『統道真伝』という『自然真営道』と並ぶ代表作です。これだけは岩波文庫にあります。それから石田梅岩は『都鄙問答』という代表的な、これは岩波文庫にあります。そういった文庫を探していくというのが一番だと思いますし、本当はもっと私たちが頑張って環境思想の点からそういうものも多くの人に読まれるような形にしなければいけないと思うんですね。それすらもまだ十分ではないという。日本の古典を最近多くの人々が邪険にあつかうようになりましてから困っているんですけど。

岡 島: ありがとうございます。

関 : 私は野外教育のご質問をいただいたんですけども、野外教育の方法にはいろいろあるかと思います。どんな活動でも野外教育になりうると思いますが、自然の中に人が入りしかるべきリーダーが導くことで、参加者の心理的な効果が作用するのではないかということが日本の研究でも検証されてきました。初期では自己概念や社会性といったものが望ましく向上するといったことが頻繁に取りあげられました。簡単に申し上げ

げますと、良い現場では、参加者は全人教育的な意味で変容していく傾向があるということ、また具体的には道徳心が高まるなどの変化につきましても一定の効果が報告されています。それから環境教育にも深く関係しますが、自然認識というところについての変容につきましても言及されています。「野外教育をしている」という言い方は少し変なのですが、野外教育になっている状況というのは周囲にいる大人がある程度、自然そのものの教育力ということを踏まえてプログラムを考え、参加者を導くのです。そういう意味で運営側に共通認識がはかられている必要があると思います。・・・三つの点について私はよく言い聞かされてきました。野外教育では「自己と自己の関係」「自己と他者の関係」「自己と自然の関係」について考える機会を自然の中で与えることに最大の意義があり、必ずしも何かの技術や正解を教えるということに主要目的がおかれているわけではありません。子ども達に、あるいは参加者の方々に心構えやノウハウを教えることは、質の高い自然体験（より集中できる居場所で自分がどのように生きたいのかについてじっくり考えるチャンス）を提供する準備とも位置づけられるのではないかと思います。こういった側面に、野外活動と野外教育の違いがあると考えています。よろしいでしょうか。

岡 島：野外教育というと、アメリカの場合などはジョン・デューイの教育理論からの流れがあって、それなりの研究成果もずっとあるものですね。アウトドアエデュケーションという言い方をしています。教室の中で勉強することは教室で行う。外で勉強することは外で行う。二つに分けようというのがひとつのアメリカの野外教育の基本的な考え方で、両方必要だということなんですね。それでは次の方どうぞ。

C 氏：長野市の飯山市ってところで、薪ストーブをたいて生活しています。今日のお話をいただいて二つほどちょっと感想がありますけど。一点は関先生の言われていたことで、現場に足を突っ込んでいくとそれっきりになってしまっというところを言われて、僕も経験があることでした。僕は趣味で俳句を詠んでいてこの小諸にもゆかりがあるんですけど、高浜虚子という大正から昭和にかけて俳句界に大きな道を示した俳人が三年住んでおります。虚子が言った大きな思想のひとつに虚実皮膜と概念があります。虚というのは嘘というような、虚と実のあれですね。実は本当ということで、虚子も正岡子規から『ホトトギス』という雑誌を受け継いでいるのです。一番写生といった子規の概念を発展させていくんですけども。写生っていうのは自然界の中に入ってものを観察するということだと思っんですけども。でも観察して観察してそればかりだとなんかこう深みがなくなっちゃう。虚子はそれを「句が痩せてくる」と言うんですね。哲学とか思想、それをずっと深めて深めていくことも大事なんだけど、そればかりやると視野が狭くなってしまうとも言っています。両方とも大事であって、とことん発展することも大事だと。江戸市民の庶民の芸術はやはりそれ自体が僕は思想あるいは芸術になると思います。一茶の俳句ひとつとってもやはりそこにはエコロジカルな思想があります。

あと2点目ですけども、キリスト教的なそういうことの考え方も言われたんですけども、今フランスなんかでは生まれてくる子どもの二人に一人は結婚しないカップルからの子供だっというようにも聞いておりますが、やっぱり結婚というのとキリスト教、教会っていうのがすごく密接に関係している。だから19世紀後半、ニーチェが言ったことが今実態としてもう現実化しているのがヨーロッパ世界ではないかとぼくは思います。ぼくが今ちょっと興味を持っているのはフランスのコ・バレリーという文学者なんですけど、彼なんかはいくつか作品をアップしたけども、それよりもっと膨大な自分の日記を書いているんですね。彼はそれを書いた理由は自分を知るためだって言っています。自分を知るためにもすごい努力をしてそのために全精力をさくみみたいなことをやっています。そういうのをヒントとして自分たちを理解する。日本人はさきほど宗教は無いって言ったけども、ぼくは無いことは無いと思います。ただ表現できないだけだと思うんですね。

岡 島：俳句のすすめ。たしかにそれを研究したらおもしろいですよね。それと今お話になった結婚とキリスト教徒についてなど。いかがでしょう。

加 藤：私、実は哲学者の中では産婦人科です。長年厚生労働省の生殖補助医療の専門委員を務めまして、70才になった時に辞職願いを出して退きました。代理出産の委員会を学術会議でやるときには、ベテランだというので頼まれて参加しました。たしかにおっしゃるように婚外比率、シングルマザー率はフランスの場合にはどんどん高くなっていますし、ヨーロッパ全体でも家族は崩壊したといってもいいくらい婚外比率が高いです。しかし日本では婚外比率は高くなっておりません。だいたい2パーセント前後で水平に推移しているわけですね。フランスではお父さんのいない子供が社会保障を受けられなくなると不幸になるからその社会保障を手厚くして、そのことによってフランス人の人口を維持するという人口維持政策が立てられているわけですけども、日本の場合に婚外子比率が高くなるという想定で人口を維持するのか、それとも婚外子比率が高くならないという想定で人口を維持するのかっていう点について、私は日本人の場合にやっぱり子供は結婚して生むという普通の考え方が持続する方が、おそらく日本人のために良いだろうという線で基本的な政策を立てるべきであるという方向を打ち出しました。けども実際には単純再生産率が2.6からもう1.いくつまで下がっていて、厚生労働省がいつもはらはらしています。結婚率も高くなりませんし、出産率も高くなりません。そして今若者をみていますと例えば33才までに3人子供を産むとか、35才までに2人子供産むとかっていう、そういう目標を立てても個人の収入が確保できるような安定した就職ができない若者が圧倒的に多いわけです。ですからむしろ日本の婚外子比率の低さを維持しようと思うならば、若者に自立して生活できるだけの生活条件を保障しなければならない。それが基本になるべきではないかというふうに思います。

岡 島: はい、それではこちらの方、お二人順番に後ろの方からどうぞ。

D 氏: この町に住んでいます。若い頃に東大の自主講座の公害原論に行ったことがきっかけで柳宗悦に出会いこの町で今焼き物をやっています。自然エネルギーの普及活動をずっとやってきましたけども、とうとう間に合わないような事故が起きてしまった。それで、まずこのシンポジウムを企画していただいたことにとっても感謝をされていて、これだけのメンバーとこれだけの議論が深まったということ。それからぜひ実現していただきたいと思いますけども、環境思想シンポジウムを立ち上げていただきたい。今テレビでは原子力の専門家という方が出てきて、原子力推進の専門家なんですよね。そういう話ばかりが出ていて。私は実はこれから森を活用して子供の環境教育をやっていくという話の中で、おそらく森のきのこは取ってはいけません、何々は摂取してはいけません、というふうな話がどんどん広がってくるんだろうと思っているんです。ですからこの 3.11 を、事故があってからというのは甚だ人間としては情けない話ではありますが、最低限ここからきびすを返して折り返し地点にしていくということだけは、みなさん先生方にも責任があるし、ここの会場にいるひとりひとりの責任だと思っています。子供を産む産まないの話も含めて、もうすでに大丈夫なのかしらという話も世の中に出ているわけです。その辺のことを出してしまった以上は、これからの日本というのは拡散物質と共に生きていく世界がある。まあ受け入れたくないのもみんな割と気持ちを心の中に秘めながら、様子を見ているということなんですよね。一方で物理的な福島原発の収束をはかると同時に、世の中の社会的なおさまりについてシナリオを考え始めている人達の動きもあるわけで、下手をするともって信頼性の高い原発を作ろうっていう話で終わりがかねないという中で、ぜひこのテーマに関して先生方にディスカッションしていただければと思います。

岡 島: ありがとうございます。これは昨日の夜もずいぶん話しました。鬼頭先生、ひとつ地域レベルのエネルギーについてお話下さい。だいたい地震がこんなに頻発しているところであんな危なっかしいものを作ること自体がおかしいんじゃないかというのが、基本ですよ。それに則って、じゃあどうしたらいいかっていうような事を。どうぞ。

鬼 頭: 実は私はそれを実践してきた人間で、つまり太陽光発電を増やした分だけ原発を減らせるでしょうと言いたかったんですね。ところがエネルギー問題はちょっと短めにさせていただいて、哲学の問題として語っていただいた方がいいのかなと思った。エネルギー問題ってやはり加藤先生のお話にもあったように、日本は少子化です。それからエネルギー効率が上がっています。だまっていれば電力消費量は下がっていくわけです。それで困るのは電力会社。東京電力管内だけでも需要を増やすために始まったオール電化住宅という政策のもとで100キロワットの原発2基分の需要増があるわけですよ。だからエネルギー問題って、いや自然エネルギー増やしてもだめでしょ、みたいな話になりかねません。それから今の計画停電の動きの中で、なかなか今すぐ

太陽光が普及するという急な話ではなくて、せつかくこういうメンバーですので、環境倫理に絞ってお話いただけるとありがたいと思います。

岡 島：とはいえね、かなりこのことは言わなきゃいけないので、いやそれは D さんが自然エネルギーをすごく頑張っていてでもなぜ原発が今までこういう形で出来上がって、そういう世の中になっていったのかという事を、・・・そのひとつは社会構造的な、政治的な、経済的な構造などの様々な問題があるということと、もうひとつは技術的なレベルとももちろん規制緩和とか、法的な問題などとの絡みがあるわけですよ。果たしかに太陽光でやっても、結局例えば東京電力に買ってもらわないといけないという形なので完全に東京電力依存型なんですね。だからそういうようなことをせざるをえないことが今問題になっていて、そこをどうするかということなんです。自分たちが自宅で、あるいは地域で自然エネルギーを作ったものを、電気自動車などに充電し、そこで自給できるような形になると普通に使う電気についてはもう東京電力はいらないんですよ、という話になってくる可能性があるわけですね。それはすでに技術的に可能なレベルになってきていて、そのインターフェイスの問題をつめなければいけないということと、それがどのくらい普及するかというような問題にかかっているのです、多分ここ 2、3 年ぐらいで片付く問題だと思います。あとは地域ごとに実は自然エネルギーの種類が違うわけですね。風力がいいところもあるし、あるいは地熱もあるしと・・・。ですから今後はどうやって自給型の、いわゆる分散型エネルギーシステムに変えていくかっていうところがポイントですね。どうしても必要な電気みたいなものは、今の火力を動かせば十分にまかなえるので、基本的には原子力はいらなくなるということが技術的にはすぐ出来る。ある人はですね、エネルギー・イン・マイヤードって言って私の庭でエネルギーっていうエイミーというですね、これはノット・イン・マイ・バックヤードという、私の庭には作らないでという、迷惑しているので作らないで、という言葉のもじりなんですけども。そういう形でいわば分散型エネルギーでエネルギーを自給自足するというシステムは、多分これから技術的には出てくるはずなので、いかにそれを普及させるかという点ですね。これはある意味では非常に哲学的な問題なんですね。大量生産、大量消費、大量廃棄の時代のひとつのやり方ですよ。ですから電気にしても集中して、そこで要するに大量に作って、大量に作ったものを大量にいろんな家庭で使って、それが廃棄されているという形を、いわば分散化することによってどんどん少なくしていく。ここで非常に重要な点は原子力も問題なのですが、実は自然エネルギー・・・例えば風力もですね、あまり大きなものをたくさん作ると低周波の問題など多様な問題が起きるために、リスクが生じます。リスクの問題はどんな発電だってリスクはあるんだから、問題はリスクをどう分散させるかということが今重要なところなんですね。リスクを分散させればそれは自分たちが今の生活を考えて、少しぐらいのリスクは受けましようとなる。でも他人がたくさん使うリスクまで何で私が受けなきゃいけないのという話になるわけです。リスク

を基本的には分散してそれをみんなが分かち合って生きるという社会の作り方が基本だと思うんです。そのための技術開発は今できるし、できればそういう社会の仕組みにしていくってことが大事じゃないかな。倫理的にいうともう決着がついているわけですね。ただあと具体的にどっちが得か考えてみようとか。どちらの方がリスクが大きいのか。簡単にいえば福島原発の事故によって東日本に人が住めなくなったら、そんなリスクを背負う必要があるのかどうかですね。そういう話になって具体論になると思うんですよね。

加 藤：私は決して原発推進派ではないんですけども、今学術会議では高レベル核廃棄物の処理をやっています。哲学的な問題として私は学術会議では、現代の技術は千年間の安全の設計を可能にするかという問題で、東大の工学部の先生方は、みな千年間安全設計してみせるというふうにおっしゃったので、私はもし現在千年間の安全の設計をすると現在使われているデータ、その設計の元になっているデータが、あと千年間そのまま有効であるという想定をすることになる。つまり例えば金属の弾性率であるとか、あるいは地中のコバルトの含有率であるとか、それから水の流れだとか、岩石学のデータだとかっていうのが、今のデータが千年間そのまま続くという条件がなければ千年間の設計はできない。しかし最近の分析科学のデータなどはわずか 10 年間で 30 倍も変わっているっていうふうな地殻上のデータがあるので、千年間データが変わらないっていうことは科学史の常識からみてありえない。したがって千年間の安全の設計は出来ない。そういう答申をしました。

岡 島：ありがとうございます。それでは次の方、どうぞ。

E 氏：東御市から来ました。私は小さいころから森が好きで、森づくりをずっとしてきました。先ほど佐久間先生がおっしゃっていました子供にこれからどのように問いかけていったらいいかということ具体的を知りたい。私達は東御市食育ネットワークというのをやっております。それは学校の先生、栄養士さん、教育委員会、それからお医者さん、農業者などが入っているいろいろやっているわけですが、その中で「いただきます」と手を合わせますね、それからいただきました「ごちそうさまでした」。この問題をですね、子供達にどういうふうに教えたらいいか。やはり学校の先生達は、農業によって食べさせるものを作っているわけですから、農業者に対する感謝、それから給食を作っている、食事を作っている皆さんに対する感謝、これに対して子供さんたちにいただきます、ごちそうさまでしたっていう形で教育を行っている。今実際に行っているのだそうです。それも非常に大事なことなんですけども、もっと基本的な、今日の環境思想に関わると思うんですが、植物の光合成、それから食物連鎖ですね。特に地球上の歴史が始まって生物が生まれ、酸素ができ、我々人間が生まれ、今の形になっているわけなんですけども、この中で人間が最後に生まれてきて、やはり食物連鎖の最終的な段階で、あらゆる生物をいただきながら生きていくしかできない。そういう人間の状態ですよ。その食物連鎖の一番基本的なことなど、どちらかという自

然の摂理っていうんでしょうかね、そういうことをなかなか今の学校では誰も知らない。先生達も知らないですね。どちらかというと基本の一番大事なものを逆に小学生、今の大人のみなさんよりもこの子どもさんたちに向かって教えていくことが、環境思想の一番の基本的なものかなっていうような感じはしておりました。この辺をより具体的にお話いただければと思いますが、よろしくお願いします。

岡 島：はい、ありがとうございました。どなたかいかがでしょうか。日本環境教育学会の事務局長をなさっている F さん、今のご質問に対して環境教育学会としてはいかがなものかとまずお応えいただき、その後にもたお話を。

F 氏：紹介いただきました。学習院大学では教職課程というところに所属しておりますが、日本環境教育学会の事務局長をしております。今ご質問、話があったような問題意識を、環境教育学会としても持っております、子供達の環境教育をもっと深めなければいけない。その前にそもそも教員の環境についての認識というのもずいぶん低いのではないかと、というような意識を持っております。いろいろやるべきことはありまして、環境教育学会会長はやはり環境教育っていうのを学校教育の中できっちりと制度化する必要があるというような方向性を示しておりますが、まず取り組むべきこととして、私どもが今からやろうとし、そして可能性がありそうなのは、教員免許状の取得に環境教育、教員免許状の取得というのは、大学で所定の単位をとることが義務づけられていますけど、その中にぜひ環境教育を義務づけるような方向性が必要ではないかということで、働きかけを始めたところです。それにつきましてはこちらの岡島さんも行っていらっしゃると思いますので、若干そういう可能性のあるのではないかとというようなところで。

G 氏：東京多摩市から来ました。東京の公立小学校の教員を 30 年やっていて、ほとんどずっと環境教育をやっていました。八王子では校庭に一畳の畑を子供に一枚ずつ与えて、それで好きなものを作るということをやっていました。ただ総合学習が活潑なときはすごく応援して下さった方々がいらっしゃったんですけども、後半の状況は厳しかったです。今学校でこのような活動をしようとした時、多くの保護者はどちらかというと逆風の立場になる方が多いんじゃないかなと思います。自分は今、道志村の体験施設で農業を本格的にやっています。そこに来た親子に農業の大切さ、環境教育の大切さを伝えているんですけども、ただやっぱり厳しい。もう一つ、言うならばそこで今遊休地を抜墾しているんですけども、シャベルでやっています。そうすると村の人はみんな、これユンボでやったら楽だよっていうんですね。で、草刈りするのもほとんどの人が刈払機を使います。手で刈っている人はほとんどいないです。化石燃料を使って農業が行われている。これはもうネパール、ブータンに行ったときも感じたんですけど、ブータンでも日本の海外協力隊のある方が一期生で行っていて、本当にブータンの人のためだと思って機械を利用しているんですね。ですからブータンに行くと本当に農業機械がすごく使われているんですよ。ところがネパールに行くと水牛と牛

だけでやっているんです。日本人の感覚だとやっぱり機械化する方が楽、幸せだと思って一生懸命やったと思うんですけど、本当はその化石燃料を使うことがどうなのかなっていうことを現地に行って感じました。

今日の環境思想の現代的意味を問うという、このテーマを決めた時はまだ震災は起きていなかったと思います。ただ 3.11 になって、この現代的意味というのが本当にはっきりしてしまったと思うんです。それはエネルギーのことと、あと今の便利さですね。それを国民がどう考えるかっていうことを考える。それが環境思想学会にとってこれからすごく意味を持つことになるのではないかな。みんなで考えなくちゃいけないということだと思います。

岡 島: おっしゃる通りだと思います。F氏もおっしゃいましたが、今ご発言いただいた先生のような方が、問題なのは日本の教育界に何人いらっしゃるかということなんです。一部の先生はすごく熱心になさっている。しかしほとんどの先生はあんまり環境教育を熱心にされていないわけです。だから教育委員会とか学校の校長先生が了解した上で行われていない。制度としてですね、きちんと教えるシステムができていない。そこを直さなければいけないだろうと。私も中教審で発言してまいりました。環境と教育の関係をこの中央教育審議会でも真剣に取り上げてくれということ。文部科学省は環境教育をやっていないわけだから、環境省が環境学習をやっている。指導要領に載せてきてはいますけども、まだまだ本格的に取り組んでいないんですね。

佐久間: 私は環境科学部なんです。まず少なくとも大学生レベルで環境科学部ということだと、例えば田んぼのあのぬめつとした感触ね。水が張られていて、そういうの知らないわけですから。我々の長崎大学は 13 年目なんです。10 年目に外の人からのいろいろな学部の状態がどうであるか評価してもらおうというんで、その 4 人の委員の方の 1 人が岡島先生で、岡島先生がいらして言われたひとつはフィールド教育ですね。あるいは体験型教育といってもいいんですけど。それをとにかくもつとやれと。一ヶ月くらい。大学のキャンパスから学生を出してということを提言されて。現実的に一か月は無理なんです。これはもう私達の学部の教育の非常に大きな柱となっています。とにかく大学生でさえ自然に接することは重要です。おそらく小さいころはもつとですね。それがまず基本だろうと。それとももちろん教室での講義も必要です。そうするとやっぱりかなりこれが変わってくるというのは大学生のレベルでは実感します。ですから環境科学部で百姓になりたいというのが、我々 150 人、一学年 150 人ですが、10 パーセントはいない。1 割はいないんですけど、2、3 パーセント、つまり 5 名くらいは百姓になるんです。今土地がありますから。で、農業のために行きますと非常に喜ばれますから。きわめて当たり前なんですけども、若い人がそういう点では自然に接することを小さいころからするというのがひとつの大切な点じゃないかと思います。

岡 島: ありがとうございました。大変名残惜しいですが、予定通りの時間で終わりたいと思います。今日はみなさんどうもありがとうございました。

(第1部、第2部 一部抜粋)

特集3 新たな指導者制度について

2010年度からCONEと独立行政法人・国立青少年教育振興機構との間で新たな自然体験活動指導者養成制度を立ち上げようと本格的な協議が始まった。これまで民間が中心となって構築してきた指導者制度に国が大きくかわり、オールジャパンの体制に育てていこうという試みだ。2011年度中にカリキュラムなど内容を詰め、2012年度から新制度がスタートする予定だが、その方向性についてまとめていただいた。

1) 新たな指導者制度の展望

佐藤 初雄 (CONE 代表理事)

指導者の役割と資質・能力

自然体験活動を伝える手段としてはさまざまな方法がある。たとえば、書籍や映像、新聞、テレビ、ラジオなどのマスメディア、講演会、セミナーや研究会、そして実際の体験活動などがある。いずれの場合においても、とても重要な役割を担うのが指導者である。この指導者しだいで、参加者にとって深い学びにもなりうるし、ただの時間潰しにもなってしまう。したがって、良質な自然体験活動を行うには指導者の質が重要な鍵を握っているといえる。

それでは、この指導者に求められる資質や能力がどのようなものなのか、考えてみたい。

指導者が所属する組織団体の形態

人材養成を考えるにあたっては、その指導者が所属する組織や団体がどのような目的で事業を実施しているのか。また、具体的な活動内容はどのようなものであるか。その組織、団体が、市民活動団体か民間団体か公的団体なのかによっても違ってくる。特定できるのであれば、そのことを想定しながら具体的な人材養成が可能となる。

したがって、まずは、指導者の活動する団体の特定化が大切なポイントになる。

指導者の役割

次に重要なことは、指導者の役割である。ひと口に指導者といっても、実はさまざまな役割がある。

たとえば、一番わかり易い指導者のイメージは、直接参加者に指導する指導者だ。リーダー、インストラクター、インタープリターなどと呼ばれることが多い役割だ。また参加者数が多い場合は、この指導者を統括することや全体の事業の責任者としての役割を担うディレクターも必要になる。さらに、組織団体であれば、こうした事業を統括したり、組織全体のことを考えるマネージャーという役割もある。

このほかにも、こうした自然体験活動の機会を作り出す役割として、プランナーやプロデューサーと呼ばれる役割の指導者もいる。場合によっては、それらを支える会計、渉外、広報な

どの事務的な役割を担う人もいる。

このように指導者の役割によって養成の仕方は変わってくるのだが、ここでは自然体験活動の現場で直接指導を行う役割を担う指導者を中心に述べてみたい。

指導者に求められる資質・能力

指導者として求められることは、当然、自然体験活動に関する知識や技術や指導力ということになるが、その前提には、指導者の豊かな人間性というものが大切であることは言うまでもない。よく言われることは、明るく、元気で、前向きな人。人の嫌がるような雑用を積極的にこなす人。自然が好きで、人も好きな人。本気で取り組む意欲を持っている人。人間関係を良好に保つためのコミュニケーションを大切にしている人。ホスピタリティが旺盛な人。などなどがあげられる。こうした資質を身につけている人が指導者として望ましいといわれている。能力としては、自然体験活動を行う上での知識力、技術力、指導力である。

たとえば、知識力として学ばなければならないことは、自然体験活動概論、生物学、教育方法論、人間関係論、地域学論、対象者の理解など。技術力、指導力としては、具体的なプログラムに関することで、まずは、指導者自身が実際に行うことができなければならない。その上で、参加者に如何に伝えていくか。あるいは、学びとなるような支援ができるかということができなければならない。たとえば、自然観察、環境学習、森林体験、自然の中での活動ならば、登山、スキー、カヌー、安全管理やレスキューなどがある。

こうした資質や能力を持っている指導者が求められるのである。

これからの人材養成の方向性

これからの人材養成を考える場合、念頭に入れておかなければならないことは、これからの自然体験活動をどの方向に向けていくのか、あるいは、社会のニーズとして何が期待されていくのかということである。こうした未来予想的なことは現段階で明確に応えることは難しい。しかし今、環境問題の解決、地域の活性化、教育あり方、社会のありようなどが待ったなしの状況で問われている。つまり、私たちの行う自然体験活動が、社会を先導、啓蒙社会運動であるとする観点で考える必要がある。一般市民の人々がまだ気づいていないこと、または、気づいてはいるものの行動には至っていないことを提案し、運動していくことだろう。

他方、一般市民が欲することをうまく見極めかわりやすくハードルを低くする活動を提案する方向もある。この場合、私たちが目標と考えるレベルには遠いかもしれないが、それでも、少しでも前に進めるものを行うことには意味がある。こうした2つの方向性がある。

さらに今後、活動の内容はますます専門化され、細分化される方向と、複合化、総合化されていく方向が予想される。こうしたことを踏まえつつ人材を養成しなければならない。

また、別の観点では、自然体験活動自体が、事業化される方向のものと、ボランティア活動として行われるものとに二極化されていく。つまり、一方は専門的に行われ、いわゆるプロ化していく方向である。こうした活動のどちらにかかわるのかによっても指導者の立場は変わっ

てくる。

話はやや飛躍するが、自然体験活動を推し進めていくためには、さまざまなセクターと密接に協働していくことが重要である。これまでも、行政と連携し、政策提案や財政支援といった形で自然体験活動を推し進めてきた。また、国会議員とも連携することで、自然体験活動を推進するための法律を作ることも目指している。さらに、最近では、企業とも連携を深め、CSRの一環としてもさまざまな活動事例が誕生している。

このような状況の中で、人材養成はどうあるべきかを考えることは、かなり難しいことではあるが、実際に行動していかなければならないことは自明の理である。

さて、人材養成は一体誰が行うのか。その主体は誰なのかという問題点はあるが、現在では、行政、民間、企業、高等教育機関などさまざまなところで展開されている。しかし残念ながら、これらは、各々のなかで完結する形で行われているものが圧倒的に多い。これからは、お互いの役割を分担し、互いに協働・連携していくことが必要だと考える。そうすることによって、互いの強みを発揮し、より充実した人材養成が可能となることだろう。

自然体験活動推進協議会の指導者養成と登録制度はそれを実現したものだ。しかし、残念ながら、まだ理想の形までには至っていない。その構築のために、前述したセクター・団体が更なる連携と協働することが望まれる。

今、自然体験活動推進協議会では新しいセクター・団体との具体的な連携に向けた準備が始まっている。

一方、日本環境教育フォーラムが取り組んできた自然学校指導者養成講座は1999年よりスタートした。これまでに、100名を超える講座修了生を世の中に輩出してきた。この講座の修了生の多くは、何らかの形で自然体験活動の分野に関わりを持ち、しかも、プロとして活躍している。この講座の特徴は、約9ヵ月間にもわたる実習（6ヵ月1040時間）および座学3ヵ月（280時間）から成り立っていることだ。さらに、実習は、全国9か所の自然学校の中から面接で一つに決定され、そこで6ヵ月に及ぶ実践的なトレーニングを受ける。

今、日本環境教育フォーラムでもこうした人材養成制度と他団体の人材養成制度との連携を模索している。具体的には、日本山岳ガイド協会や日本スキー連盟である。こうした連携は自然体験活動推進協議会の例でもわかる通り指導者の質の向上や団体同士の連携という点でも大きなメリットがある。そこで、今後は、さらなる他団体との連携を模索するとともに大学や専門学校といった高等教育機関との連携も必要であると考えられる。

また、別の視点では、自然体験活動推進協議会はどちらかといえばアマチュアの指導者が中心である。日本環境教育フォーラムが行っている自然学校指導者養成制度で養成される人材は、自然体験活動を専業で行うプロになることを前提にしている。こうしたアマチュアの養成制度とプロの養成制度がいずれ一本化する必要性があり、そのことによって、質の高い指導者が養成され、自然体験活動の更なる発展のために寄与することが期待される。

そのようになれば、まさにわが国のナショナルスタンダードとしての人材養成制度が確立することになる。今後私たちが目指すべき方向性ではないだろうか。

2) 安心安全な体験活動のために ～青少年体験活動指導者等の養成と研修～

進藤哲也（独立行政法人国立青少年教育振興機構）

はじめに

楽しく安全に活動し、そして心の琴線を振るわせる体験は、子どもに溢れるばかりの笑顔と、小さくも大きな発見、そして感動を与え、時には畏敬の念を抱く機会となる。

また、様々な体験活動は、感性を培い知識を知恵に変え、物事に際して自ら感じ考え行動する力を育むことにも繋がるものである。

一方で、体験活動は多くの危険を伴うものであり、例年、青少年の生死に関わる事故が必ずといってよいほど発生している。その原因は様々であるが、指導者・引率者一人ひとりの的確な指導、確実な人員点呼、適切な危険察知・回避などがあれば未然に防げたものもあったように推察する。

各種機関・団体においては、指導者を対象に安心安全な体験活動の実施に向け様々な研修会を実施しているが、国立青少年教育振興機構でも、昨今の事故の発生状況を鑑み、実際に青少年を対象に指導をしている方々を対象として事故を未然に防ぐため「体験活動安全管理講習」を実施している。主な内容としては、「事故事例と法的責任」、「リスクマネジメント」、「実技体験」などであり、公立青少年教育施設の職員、民間事業者、教育委員会関係者等多くの指導者が参加している。

安心安全な体験活動を実施するためには、単に安全研修の実施することではなく、優秀な指導者を養成し、資質能力を高める研修が必要であり、重要である。以下、私見を述べる。

1. 青少年教育指導者等養成の現状

青少年教育指導者等といわれる方々は、地域子ども会の世話人から民間団体のリーダー、国公立青少年教育施設の職員や指導者など多岐多様である。

青少年教育指導者等の養成及び研修については、国のスタンダードと言えるような明確な基準、規準があるとは言えない。従って、各機関・団体が独自のシステムで、特有の資格を付与しているのが実態である。

対して、学校等の教職員は、大学等で養成され勤務する学校又は授業の当該免許状を持っており、それは、日本全国の当該学校で共通し通用するものである。

ならば、国公立の青少年教育施設の指導者は、どのような資格なり、免許状を持っているのかである。資格や免許状がすべてではなく、経験や知識・能力があればという考え方もあるが、学校教育に国のスタンダードと言える免許状があつて、青少年教育に無くてよいのかという疑問である。

青少年に安心安全で感動豊かな体験活動を提供することを目的に、青少年教育指導者等の資質・能力や指導力を養成し継続保持するため、全国で共通する一定基準を定め、資格等のスタンダードを構築していく必要があると考えている。

2. 青少年教育指導者等養成の新たなシステム構築

体験活動と一言で言っても、その分野・種類は自然体験、社会体験、生活体験、福祉体験など多岐にわたる。各分野・種類ごとの体験活動に関する指導者を個別に養成し、スキルアップの研修を実施することは必要なことである。例えば、中学校や高等学校教員の教科別免許状のようなものである。また、小学校教員が保持している全科免許状のような、青少年教育の指導者があってもよいと考えている。

各分野・種類ごとの体験活動指導者については、民間団体において、指導者養成・研修事業が行われており、教科別教員免許状のような全国共通となるスタンダード資格は見当たらなかったが、平成 22 年度から文部科学省委託事業「体験活動推進プロジェクト」において共通カリキュラムのもと「自然体験活動指導者養成」事業が行われ、唯一国のスタンダード資格となっている。しかしながら、青少年の体験活動全般に関して指導できる小学校教員免許状のような資格を付与する青少年教育指導者等を養成している機関・団体はない。

一方、社会を見ると、「体験活動」が商品として売り出される状況が見られたり、小学校学習指導要領が改訂され平成 23 年度から完全実施されたりと、また、「体験の風をおこそう運動」が国立青少年教育振興機構や民間団体が連携協力して推進しており、体験活動に関する青少年を取り巻く環境は、さらに整備されつつある。

そのような状況を見ると、繰り返しになるが、青少年教育指導者等の養成システムの構築及びカリキュラムの編成、さらには養成講座及びスキルアップ研修の実施が急務である。

現在、国立青少年教育振興機構青少年教育研究センターにおいて、「青少年の体験活動に関する指導者養成カリキュラム」(次ページ図参照)として検討を重ねているところである。

検討を重ねている段階の青少年教育指導者等の養成カリキュラム試案は資料にあるとおりである。まだまだ途中のものであり、今後、国レベル等での研修講座及び認定基準にもとづく青少年教育指導者資格の付与、及び専門性を高めた体験活動指導者資格の付与、また、養成システムの構築など検討していく必要があると考えている。

最後に

国立青少年教育振興機構では、平成 24 年度に民間団体と連携協力し、青少年の体験活動に関わる青少年教育指導者の養成、資格付与に関わる講座又は研修を実施したいと考えているところである。

青少年の体験活動を推進し安心安全に展開するために、地域子ども会で活躍いただくリーダーの保護者の方々から国公立青少年教育施設や民間団体の指導者や関係者、さらには指定管理者制度を実施している自治体などで、青少年教育指導者資格のコンソーシアムが構築できるかが、重要と考えている。

ここに横組みの図（1 ページ）が入ります

事業報告

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター 運営組織

顧問

荒牧 重雄	東京大学名誉教授・火山学者
林 貞行	元外務事務次官 元駐英特命全権大使
丸山 庄司	元全日本スキー連盟専務理事

運営委員会

委員長	安藤 宏基	財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団 理事長 日清食品ホールディングス株式会社代表取締役社長・CEO
副委員長	安藤 徳隆	財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団 副理事長 日清食品ホールディングス株式会社専務取締役・CMO
議長	岡島 成行	大妻女子大学教授、安藤百福センター センター長
委員	飯田 稔	びわこ成蹊スポーツ大学 学長
	芹澤 勤	小諸市長
	水野 正人	ミズノ株式会社 代表取締役会長

専門委員会

委員長	節田 重節	NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構 会長
委員	磯野 剛太	社団法人日本山岳ガイド協会 専務理事
	川嶋 直	財団法人キープ協会 環境教育事業部 シニアアドバイザー
	河原塚 達樹	公益財団法人日本レクリエーション協会 スポーツ振興政策担当マネージャー
	佐藤 初雄	NPO 法人自然体験活動推進協議会 代表理事
	佐藤 博康	松本大学総合経営学部 教授
	下村 善量	独立行政法人国立青少年教育振興機構 教育事業本部長
	中村 達	アウトドアジャーナリスト・プロデューサー 安藤百福センター 副センター長
	橋谷 晃	木風舎 代表
	平川 仁彦	財団法人全日本スキー連盟 乗務理事
	平野 吉直	信州大学教育学部 学部長

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
2010 年度自主開催事業・講座

5/21 安藤百福センター竣工式
安藤百福センター自主主催事業
8/21 第1回自然体験入門講座 テーマ：「身近な自然を知る、発見する方法」についてやさしく解説する入門講座
9/25 周辺住民の「施設見学と散策会」 見学会と通して周辺住民との交流や安藤百福センターのことを十分に理解してもらうこと
10/6 専門委員会
11/4 第2回自然体験入門講座 テーマ：「雪山歩き」
11/6 国際シンポジウム 「米国の事例に学ぶ、日本の自然体験活動の課題」
2/5 第3回自然体験入門講座 テーマ：「冬でも楽しめる自然体験」
3/25 専門委員会（地震のため延期）
3/28 環境思想シンポジウム 「環境思想の現代的意味を問う」
共同主催事業
8/28 第一回市民公開講座 鷹 赤兒氏による「表現について～舞踏の視点から～」講演会
10/18 環境公開講座 「自然の中でヒトになる」
10/19 環境公開講座 「環境理論とは何か」
10/20 環境公開講座 「地球環境保全と健康」
11/5 「アウトドアフォーラム」 テーマ：「日本のアウトドアズを再考する」
3/24 ロングトレイルフォーラム（地震のため延期）

2010年5月～2011年3月 利用状況

日期	利用団体名	研修会名
5/21	安藤財団	竣工記念式典
5/26～28	日清食品ホールディングス 株式会社	新入社員研修（森林整備研修含む）
6/11～13	NPO 法人 自然体験活動推進協議会	CONE トレーナー1 種養成会
7/4～7/5	日清食品ホールディングス 株式会社	ライフデザインセミナー研修会
7/11～13	日清食品ホールディングス 株式会社	自然体験活動指導者養成 （百福士事業「あやしいオヤジを正しオヤジに 変える」プロジェクト）
7/21～22	日清食品ホールディングス 株式会社	内定者研修（A. S. E. 研修含む）
7/25～26	日清食品ホールディングス 株式会社	ライフデザインセミナー研修会
8/1～4	早稲田大学	集中講義「産業構造の変化と地域の計画」
8/12～13	大妻女子大学家政学部 ライフデザイン学科	ゼミ研修
8/21	安藤百福センター	第1回自然体験入門講座
8/28	アウトドアライフデザイン 開発機構／安藤百福センター	第1回市民公開講座
8/28～29	日本アウトドアジャーナリスト 協会	理事会、総会
9/4～5	埼玉県ネイチャーゲーム協会	自然体験に関わるスキル向上
9/9～11	大妻女子大学	集中講義
9/11～12	NPO 法人 自然体験活動推進協議会	CONE トレーナー専門研修会「自然の理解」水辺の 安全講習会
9/25	安藤百福センター	周辺地区見学会
10/1～2	NPO 法人 自然体験活動推進協議会	CONE トレーナーフォーラム

10/2～3	NPO 法人 自然体験活動推進協議会	専門研修会「安全管理：リスクマネージャー研修」
10/6	JEEF 自然学校指導者養成	上級指導者の養成
10/6～7	安藤百福センター	専門委員会
10/9～10	公益社団法人 日本環境教育フォーラム	環境教育研修合宿
10/26～27	NPO 法人 国際自然大学校	職員研修
10/27～29	NPO 法人 川に学ぶ体験活動 協議会	RAC トレーナー研修会
10/28～29	NPO 法人 国際自然大学校	職員研修
10/29～31	NPO 法人 自然体験活動推進協議会	CONE トレーナー1 種養成会
11/5～6	アウトドアライフデザイン 開発機構／安藤百福センター	アウトドアフォーラム&国際シンポジウム
11/14	安藤百福センター	第二回自然体験入門講座
11/17～18	日本山岳ガイド協会	試験検定委員研修
11/24	浅間山麓国際自然学校	インタープリター養成研修会
11/27	浅間山麓国際自然学校	インタープリター養成研修会
12/4～5	NPO 法人 自然体験活動推進協議会	専門研修会および学校支援リーダー養成会
12/12	木風舎	学校支援リーダー養成会
12/18～19	NPO 法人やまぼうし自然学校	自然体験スキルアップ研修
1/14	小諸市議会事務局	長野県市議会見学会（県内 19 市）
1/24～26	立教大学大学院	集中講義
1/29～30	NPO 法人 自然体験活動推進協議会	CONE トレーナー1 種認定会
2/5	安藤百福センター	第3回自然体験入門講座
3/28	安藤百福センター	環境思想シンポジウム

CONE 利用者内訳

期間	研修会名	受講生	講師	スタッフ	備考
6/11～13	トレーナー1 種養成会	5	3	4	
9/11～12	専門研修会	4	1	2	
9/12	水辺の安全講習会	4	1	2	
10/1～2	トレーナーフォーラム	6	4	4	
10/2～3	専門研修会	13	5	4	
10/29～31	トレーナー1 種養成会	12	3	2	
12/4～5	専門研修会	8		2	
1/29～30	トレーナー1 種認定会	16	3	2	

68名

CONE 以外の利用者内訳（上級）

期間	研修会名	受講生	講師	スタッフ	備考
10/6～12/9	JEEF プロ養成	3	0	0	
10/26～27	NOTS 職員研修①	26	0	0	
10/28～29	NOTS 職員研修②	24	0	0	
10/27～29	RAC トレーナー研修会	8	0	0	
11/1	日本と自然・自然史	5	0	0	JEEF 研修聴講生
11/3	地域学概論	3	0	0	JEEF 研修聴講生
11/8	教育方法論	1	0	0	JEEF 研修聴講生
11/9	キャンプカウンセリング論①	1	0	0	JEEF 研修聴講生
11/10	キャンプカウンセリング論②	1	0	0	JEEF 研修聴講生
11/17～18	山岳ガイド協会研修	8	0	0	
11/29	国際関係論	6	0	0	JEEF 研修聴講生
12/3	プログラムデザイン①	1	0	0	JEEF 研修聴講生
12/4	プログラムデザイン②	1	0	0	JEEF 研修聴講生
12/6	野外活動論	1	0	0	JEEF 研修聴講生
12/18～19	やまぼうし自然学校職員研修	31	0	0	

120名

2010年6月11日～6月13日 第1回CONEトレーナー1種養成会 NPO法人 自然体験活動推進協議会

安藤百福センターで初となるCONEトレーナー1種養成会を開催した。講師に森美文氏（森環境教育事務所）、若林千賀子氏（若林環境教育事務所）、渡辺峰夫氏（日本ネイチャーゲーム協会）を招き、5名の参加者を得てトレーナー1種認定会までに必要な資質とスキルを理解するための研修を2泊3日で行った。

CONEの理解

研修は、定められたカリキュラムに従って実施された。まず開講式の後、アイスブレイクを行い、本養成会の趣旨やCONEの制度、関連情報の共有等が行われた。その中では、CONE設立から10年を迎え、CONEを取り巻く状況が変化しており、それに合わせてCONEの指導者制度も見直しを行っていることが説明された。また安全管理についても講義を行い、事象事例などを学びながら事故を起こさないようにするためにはどのようなことに気を付けなければならないか、学習した。



センター周辺での実地研修

2日目は自然の理解、自然と人、社会、文化との関わりなどを学ぶため、周辺のフィールド（敷地内の遊歩道および布引観音）に出て自然観察などを行った。とりわけ布引観音は「牛にひかれて善光寺」の伝説の舞台となった由緒ある寺であり、実地研修としては最適な場所であった。その後、指導法および事業評価についての講義を行い、グループワークを通して理解を深めた。

プログラムづくりの実習

3日目は、トレーナーにとって必須となる指導者養成事業のプログラムづくりについて、講義を踏まえて実習を行い、企画と運営を考える際の要点を整理した。そして最後に、認定会までに修得すべきこと（事前課題を含む）などを説明し、研修を締めくくった。

2010年9月4日～9月5日 ネイチャーゲームリーダー養成研修トライアル 埼玉県ネイチャーゲーム協会・長野県ネイチャーゲーム協会合同

埼玉県、長野県のネイチャーゲーム協会が合同で、次年度行う予定のネイチャーゲームリーダー養成講座のトライアル研修会を安藤百福センターにて実施した。埼玉県協会からは指導員5名、長野県協会からは指導員4名が参加した。

安藤百福センター内フィールド研修

初日は、安藤百福センター内のフィールドで、どのような研修プログラムを行うことができるかを検証、実践した。遊歩道には、参加者を集める広場や様々な樹木、植物があるので多種多様なネイチャーゲームを行うことができる。フィールドを確認した後は、実際に研修会でを行うためのネイチャーゲームのトライアルを指導員が交代で実施した。さらに室内において、トライアルの効果や課題を検証し、指導員の自然体験に関わるスキル向上につながった。

近隣フィールド研修

2日目は、安藤百福センターを出発し、近くにある布引観音へ向かった。「牛に引かれて善光寺」の伝説の舞台となった布引観音では、自然、歴史、文化、社会の関わりを学ぶことができるからだ。

参堂の入口には、布引観音の由来が書かれていたので一読し、ここから20分ほどの山道を登って行く。山道の途中には、不動滝、善光寺に通じると言われている穴、牛馬の顔をした岩など、数多くの歴史や文化を感じられる所があり、参加者の想像を掻き立てた。参加者は布引観音に関することを事前に予習していたが、実際に見て驚いたようだ。さらに、岩をくり貫いたトンネルを抜けると、真っ赤な観音堂に到着した。参堂入口から観音堂まで、自然や歴史に触れながら登り、あらためてそれぞれが繋がっていることを学習できた。



今後の活動

今回は、指導員の研修会場として利用したが、センター内外ともに多様なフィールドがあるので、今後のネイチャーゲームリーダー養成講座やインストラクター、コーディネーターの研修会場としても利用し、活動の幅を広げていきたい。

2010年9月11日～9月12日 第1回CONE専門研修会
NPO法人 自然体験活動推進協議会

第1回CONE専門研修会を開催した。これはCONEトレーナー等の上級指導者として必要なスキルを身につけるために、より専門的な内容の研修を行うものである。今回は名古屋で開催される生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)を前に「自然の理解～地球の歴史と生物多様性を学ぶ～」をテーマとし、森環境教育事務所代表の森美文氏を招いて、宇宙の始まりから翻って地球の歴史を俯瞰するとともに、なぜ生物多様性が必要なのか、その危機的状況と保全のあり方をさまざまな角度から探った。

地球の年表づくり

研修では、まず地球の歴史について過去46億年における主要なトピックを取り上げて理解を深めるとともに、その「見える化」として、時間の長さに合わせて変遷の様子を92cmの直線に示した。これにより、単細胞生物時代がいかに長かったか、また人間活動がいかに最近の出来事であるか(にもかかわらず、地球環境への負荷を急激に増して、どれほど悪影響をもたらしているか)が明らかとなった。



その後、COP10を前に理解しておくべきこととして、生物多様性とは何か、生物多様性がなぜ必要なのか、ディスカッションを交えながら理解を深めた。また、合わせて天体望遠鏡の使い方についても実機を使って学習したが、夜はあいにくの曇り空であったため、すぐに実践には生かせなかった。

フィールドにおける生物多様性

2日目は、前日の生物多様性に関する理解を踏まえて、フィールドにおける生物どうしの繋がりを発見するワークを行った。これはセンター周辺の遊歩道周辺で行ったが、普段何気なく見えているものでも、生物多様性に気を付けながら見ると様々な「気づき」があることが明らかとなり、生態系の多様さを再認識することができた。



今回は初めての試みであり、また夏休み明け間もないことから参加者は4名に止まったが、その分自然の仕組みについて関心の高い方々が参加し、少人数により理解度が高まって内容の濃い研修となった。

2010年10月2日～3日 CONE リスクマネジャー研修

NPO 法人 自然体験活動推進協議会

自然体験活動事業者は、安全に事業を実施することが求められており、第一に参加者のため、第二にスタッフの安全を守ることを念頭に置かなければならない。安全性を高めることにより団体自身が守られると考え、リスクマネジメントを常に心がける必要がある。この研修は、組織における自然体験活動の安全対策を担える人材の養成をするため、リスクマネジメント概論やアクションプラン策定などの内容で実施した。

ケーススタディ「事故発生から対処まで」

事故は突然起こる。参加者や関係者に正しく対応して、事故をトラブルにしない適切な対応をしなければならない。事故に遭遇した現場責任者がどう行動をとり、組織の責任者がどうリスクを管理するか、事故対応や情報を組織でいかに共有するか、を実際に起きた事故をモデルケースについてシミュレーションをおこなった。

アクションプランを策定

この研修で学んだことを踏まえて、参加者それぞれがアクションプランを策定した。優先的に整備すべきところを決めて、どういうスケジュールで進めていくのか、を決めるのがリスクマネジャーの役割。それぞれの団体の規模等に応じて、優先順位に従って無理のない範囲で行っていく。



リスクマネジャー【risk manager】

(定義) リスクマネジャーとは、活動におけるリスクを予測し、事故を起さないための対策や安全の推進及び提案を行う、団体の安全に関する管理者である。

また、活動の安全に関する情報の収集や発信、安全管理を普及するものである。但し、安全に関する全ての責任を負うものではない。

(役割) 各団体にリスクマネジャーを設置し、次の役割を担う。

また、団体の代表者はリスクマネジャーを兼務することができる。

- ① 活動の安全管理マニュアルの毎年の見直しを行う
- ② 活動のスタッフトレーニングの計画、実行の管理をする
- ③ 必要かつ適切な保険加入（人、施設、車両等）の確認をする
- ④ 団体において実施した「ヒヤリ・ハットアンケート」及び「事故報告」の分析をし適切な対策を施す
- ⑤ 最新の事故事例やリスクマネジメントに関する情報を団体内に提供し、共有する

2010.6.9 CONE 安全委員会

今後自然体験活動推進協議会では、安全な事業運営の継続と安全管理の普及の為、リスクマネジャーを団体または活動現場に1人以上設置することを目指し、登録制度を検討している。

2010年10月1日～10月2日 CONE トレーナーフォーラム
NPO 法人 自然体験活動推進協議会

CONE 初の試みとして、CONE トレーナーのみを対象としたフォーラム「トレーナーフォーラム」を1泊2日で開催した。これは、従来のトレーナー更新講習会では一部のトレーナーと数時間程度の意見交換しかできないため、CONE の今後のあり方やトレーナーとして果たすべき責務等について、深い議論ができるよう設定したものである。



公開講座「心に響け！自然体感」

基調講演は、ツリークライミングの第一人者でタレントのジョン・ギヤスライト氏を招き、「心に響け！自然体感」と題してお話をいただいた（この部分のみ一般公開としたので、小諸周辺をはじめ40名あまりの方が聴講）。日本でツリークライミングを行うに至るまでの生い立ち、そしてその後の展開について示唆に富む話をされ、また自然体験がなぜ重要なのか、わかりやすくウィットに富んだ話を聞くことができた。

CONE への期待とトレーナーの意義

講演終了後は、講師陣も交えて「CONE への期待とトレーナーの意義」について、夕食を挟んで約3時間に渡ってディスカッションを行った。CONE として行うべきこと、トレーナーとして果たすべき義務など、ディープな意見交換となった。

トレーナー更新講習

2日目は、通常のトレーナー更新講習会のカリキュラムに従って、CONE の現状と最新動向、事前課題の共有と提案、および安全管理について講習を行った。ここでも、前日の議論を受けて、CONE として今後どのような活動を行っていくべきか、具体的な提案や指摘がいくつも示された。今回は初めての試みであり、また秋の行楽シーズンということもあって本来想定していたトレーナーの参加者は3名に止まったが、講師陣も含めたコアなメンバーでの意見交換ができ、内容としては有意義なものであった。

2010年10月26～27日・28～29日 合同職員研修 NPO法人 国際自然大学校・NPO法人 千葉自然学校

NPO法人国際自然大学校と、NPO法人千葉自然学校が、合同で職員研修を実施した。それぞれの団体が青少年教育施設の管理運営を行っているため、全員一緒に参加することができなかったため、二班に分かれて研修を行った。ピッキオの野鳥の森ガイドウォークと、地域文化・特産の見学、安藤百福センターでは、情報交換と自然学校の課題と展望について議論した。

ピッキオの野鳥の森ガイドウォーク

秋の軽井沢の森林を歩き、動植物の解説をしてもらった。参加したほとんどの職員は、普段指導者として人前に立って野外活動のプログラムを企画、実施しているので、他団体のプログラムに参加するのは貴重な経験になった。ピッキオのスタッフの方の解説はとてもしっかりと分かりやすく、参加者の興味をうまく引き出し、飽きさせない話し方は、大変勉強になった。さらには、私たちの質問に対して、回答はもちろん、補足情報まで提供できる知識の豊富さに驚き、自分たちも日々技術を磨かなければならないと、良い刺激をもらうことができた。



地域文化・特産の見学

軽井沢周辺の地域文化・特産を知るため、繁華街や白糸の滝、マンズワインのワイナリーなどを訪問した。自然学校は、野外活動を提供する機能に加え、地域の資源を活かしたプログラムを開発することで、地域貢献や地域活性化につながるような機能も果たすことができる。軽井沢周辺でプログラムを企画する際の材料集めをし、また、自分たちの団体の地域で活用できるものを探った。



情報交換と自然学校の今後

千葉自然学校へ国際自然大学校の職員が派遣されてはいるものの、各団体の職員が大勢集まって、じっくりと話し合いをする機会は今まで無かった。この合同研修によって、自然体験業界の課題や展望などについて、他団体の意見を聞き、共有する有意義な研修になった。業界の大きな課題は次世代育成だが、この研修をきっかけに、次世代を担う職員のつながりをもっと増やし、活用していけるよう、お互いに努力していくことを確認した。

2010年10月6日～12月9日 自然学校指導者養成講座 安藤百福センター協賛事業

公益社団法人日本環境教育フォーラム主催、安藤百福センター協賛で、自然学校で活躍するプロの指導者を養成する講座、「自然学校指導者養成講座」が開講された。この講座は、例年3月に開講し、9月までの半年間は、全国の自然学校において現場実習を行う。その後は、2か月におよぶ座学を行うという長期の養成講座だ。今年度で11期を迎え、修了生は105名にのぼっている。今年は、10月からの座学会場として安藤百福センターが選ばれた。今期の受講生は3名。泊まり込みの合宿形式で研修に臨んだ。

プロを目指すための講義

講義は朝10時から始まり、夕方18時まで行う。中には、池の平湿原や志賀高原に行き、フィールドワークを伴う講義もあった。講義を務める講師陣は多彩で、大学の先生、タレント、登山家、写真家、ジャーナリスト、インタープリターなど、業界の第一線で活躍されている方々にご協力いただいた。講義によっては、自然学校で活躍している職員も学べるように、広く聴講生を募った。また、一般の方々を集めて、公開講座とした講義もあった。



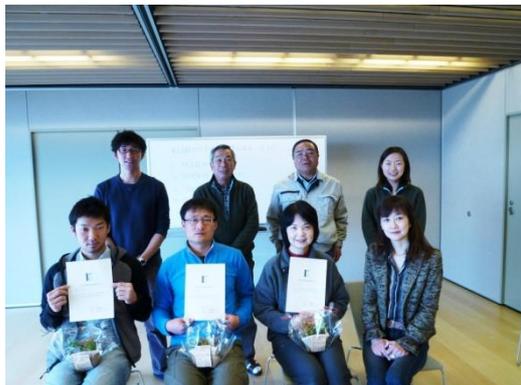
受講生の生活

安藤百福センターは研修施設のため、勉強以外の食事、洗濯、掃除などの生活面についての活動も、全て自分自身の手で行わなければならない。

また、長時間の講義を終えた後も、課題レポートが求められる場合があるので、受講生の1日はとても忙しい。そのような環境の中で生活していると、少ない時間を有効に利用するスケジュール管理能力も自然と身に付いてくる。受講生たちは、講義のある日は集中して学習し、休暇の日はそれぞれ登山、周辺の自然散策、資格の取得に向かうなどメリハリのある生活を送った。

修了式を終えて

9ヶ月間におよぶ講座の最後に、修了式が行われた。受講生それぞれから、今後の決意表明を行い、講座を締めくくった。「長かった講座がようやく終わった」という安堵感と、「これから新たなスタート」という清々しい顔つきが印象的だった。受講生の今後の活躍に期待したい。



11期受講生から、受講を終えての感想

①川道 光司

JEEF プロ養成講座は受講開始直後からすぐに自然学校でのOJTへ入ります。自然学校または環境教育という業界に関して全く知識がなかった私にとってそれはとても大きな負担でした。

私がOJTをうけた自然学校には、私たちJEEFの受講生以外にも、その自然学校で働くためにやってきたプロパーの研修生たちがいました。その研修生たちは私よりもはるかにたくさんトレーニングを積み、意識もとても高いものを持っていました。開始当初はとても不安でついていくのがやっとでしたが、結果的に見れば、否応なしにそのような状況下に置かれたことで、そのような周りの尊敬できる仲間たちから沢山の刺激を受けることができました。また、自分の立ち位置を理解することができ、それと同時に大きな危機感や不安、自分の無力さを実感しましたが、逆にそこに無限の可能性とモチベーションを抱くようになりました。この6か月のOJTを通じ、自分に何が足りないのか、自分が何をしたいのかを発見できたことは最高の成果だと思います。

そして、OJT終了後に小諸の安藤百福センターで受けた講義に関しては、受けた講義の内容以上に充実した時間を過ごすことができました。それはやはり、OJT中に見つけた自分の課題がはっきりとあったからだと思っています。最高の場所、最高の環境でひとりの時間を多くとれたため勉強に集中することができました。また、休日も積極的に利用し自然の中に出かけて行ったり、この業界の様々な人に会いに行ったり、資格をとったりと自分のスキルアップのために時間を費やすことができました。

この9か月間はあっという間でしたが、この講座は活かすも殺すも自分次第で目的と意欲を

持って望めば大変有意義な時間になると思います。これだけの自然学校とのつながりがあるのも JEEF ならではだと思いますし、環境教育分野に携わるそうそうたるメンバーから講義を受けることができるのも JEEF だけだと思います。現在私は自然学校職員となりましたが、9 か月間は私にとってとても大きな糧となっています。

②平城 早人

全くの異業種からの転身であったため、OJT（キープ協会）にて実務を経験し、この業界を選択したのは間違いのないことを確信できたのが何よりでした。そしてこの期間でさまざまなプログラムにスタッフとして参加しましたが、プログラム企画、運営、ビジターセンター業務などについて体験的に学ぶことができ、なによりキープ協会のスタッフ、外部スタッフ、参加者からさまざまな刺激をうけることにより、非常に充実した日々を過ごすことができました。現在、自然学校に勤務しておりますが、OJT での経験が私にとって一番大きなものとなっております。

また、今回の講座では、さまざまな方々と知り合いになることができました。自然学校関係者、JEEF 関係者、その他もろもろですが、これらの人脈はプロ養成講座なくしては作ることはできませんでした。現在仕事をするうえでも、これらの人脈は生かされております。プロ養成講座は、私にとって大きな人生の転機となり、自分の人生を見つめなおすことができました。思い切ってプロ養成講座に飛び込んでみて本当によかったと思っております。

③皆川 紀子

精密電子機器メーカーから電気メーカーへと転職をしましたが、26 年間、企業に勤めた後、1 年間の農学部科目等履修生を経ての自然学校指導者養成講座でした。6 か月の OJT 実習、安藤百福センターでの基礎課程・専門課程講座、自然学校での実習は、私にとっては、高校生の頃に一度は目指した道に帰るため、残りの人生を、自分が大切だと思うことに時間を費やす生活を始める準備期間だったと思います。

養成講座を修了して思うのは、自然体験活動や環境教育の普及活動は、発展途上にあるということ。自然の中にいること、生きものの営みやつながりを発見することは楽しいことです。人の暮らしと自然のつながりを実感することも楽しいことです。そんな楽しみを、経済活動に取り込まれて普通に生活している人に体験してもらい、ライフスタイルを見直すきっかけになるような言葉を届けられる指導者がどれくらいいるでしょうか。

私は、農学部の講義で水俣病問題を提示された時、自分が生きている時代に起きた恐ろしいできごとに関心を持ち続けていなかった自分を恥ずかしいと思いました。公害問題も環境問題も、便利で豊かな生活を求めてきた人間の活動が引き起こしたことだと思います。私にはまだ便利な生活をやめる覚悟ができていませんが、豊かな生活を求める経済活動が隣人の命を奪うことにつながるかもしれないということに想像力を働かせて、できるだけ質素に生活していこうと思っています。

2010年度 自然学校指導者養成講座 講義一覧

講義名	講師	主な役職
環境学総論	阿部 治	立教大学社会学部教授、日本環境教育学会会長
環境教育論	阿部 治	立教大学社会学部教授、日本環境教育学会会長
高山植物論①②	小林 政明	安藤百福センター職員、浅間山麓国際自然学校自然解説指導員
自然学校原論	岡島 成行	大妻女子大学教授、安藤百福センターセンター長
エンターテイメント論	清水 国明	国際A級ロードレースライダー、タレント、歌手、冒険家
環境思想、環境倫理	加藤 尚武	東京大学特任教授、京都大学名誉教授、鳥取環境大学名誉学長
森林セラピー論	今井 通子	登山家、日本泌尿器科学会専門医(株)ル・ベルソー代表取締役
アウトドア映像論①②	武藤 昭	山岳写真家
生態学概論	青木 良	東京農業大学非常勤講師
日本と自然・自然史	小泉 武栄	東京学芸大学教授
環境政策論	岡田 康彦	(社)全国労働金庫協会理事長、(公社)日本環境教育フォーラム会長
地域学概論	吉兼 秀夫	阪南大学国際コミュニケーション学部国際観光学科教授
リスクマネジメント論	佐藤 初雄	国際自然大学校理事長、自然体験活動推進協議会代表理事
NPO/NGO 論	岡島 成行	大妻女子大学教授、安藤百福センター長
教育方法論	西田 真哉	トヨタ白川郷自然学校学校長
キャンプカウティング論①②	森園 忠勝	大阪人間科学大学准教授、大阪府キャンプ協会事務局長
障害者理解	大野 幸男	(財)ハーモニーセンター事業統括本部長
自然学校運営の基礎	国際自然大学校	(実地研修)
生き方暮らし方	ホールアース 自然学校	(実地研修)
エコツーリズム論	広瀬 敏通	NPO 法人日本エコツーリズムセンター代表
国際関係論	眞田 陽一郎	(株)国際開発ジャーナル編集部
自然解説①②	若林 正浩	山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター館長
社会構造論	萩原 なつ子	立教大学社会学部教授
プログラムデザイン①②	若林 正浩	山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター館長
野外活動論	星野 敏男	明治大学教授
アウトドアマーケティング論	中村 達	アウトドアジャーナリスト、安藤百福センター副センター長
修了講習	若林 千賀子	若林環境教育事務所、NPO 法人自然体験活動推進協議会理事

2010年10月9日～10月10日 企業人のための野外活動入門 公益社団法人 日本環境教育フォーラム

公益社団法人 日本環境教育フォーラムの呼びかけにより、CSR・環境に携わる企業人4名を対象とした、野外活動初心者向けの1泊2日滞在型研修を行った。

小諸周辺のフィールド視察

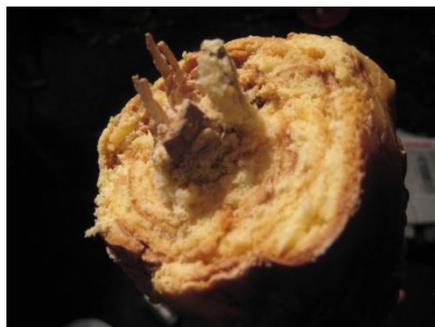
野外活動を行う上で重要となる地域の理解を深めるために、センター周辺のフィールド視察を行った。また、主要産業である、りんご農家の視察を行った。

当日は、あいにくの大雨となったが、雨天時における野外活動の理解を深めるため、安藤百福センターの小島氏と楊帆氏の協力のもと、野外調理を行った。まずは、自分の体温を下げないよう、服装の確認を行い、レインコートを着用した。次に参加者全員でタープの設営を行い、ロープワークや、効果的なタープ設営の方法・手順について学んだ。

続いて、火起こし・設営班と調理準備班に分かれて野外調理の準備を行った。火起こし・設営班は限られた資材と空間で快適な空間が創出できるよう、工夫を凝らして設営を行った。また、効率的な薪の並べ方などについて学んだ。調理班ではセンター内で、食材の準備を行った。

調理メニューとしては、バーベキュー、パエリア、汁物のほか子供向けの活動でも人気の「バウムクーヘンづくり」に挑戦した。

天候の影響により、天体観測等はできなかったが、ライトを全て消し、静寂の中でどのような音が聞こえるかを数え、夜の野生生物の息づかいを感じながら、五感で夜の自然を体験するミニ・プログラムも行った。



参加者の反応

センター到着後は気温も低かったため、雨天時の野外活動未経験の参加者もあり、不安が強いようであったが、自らタープを設営し火起こし・調理をする中で、必ずしも万全の環境ではなくても、野外活動を楽しめることについて理解を深めていただくことができたようだ。また、特に「バウムクーヘンづくり」は好評であった。各参加者から、今後より一層、野外活動を体験していきたいという声が聞かれた。

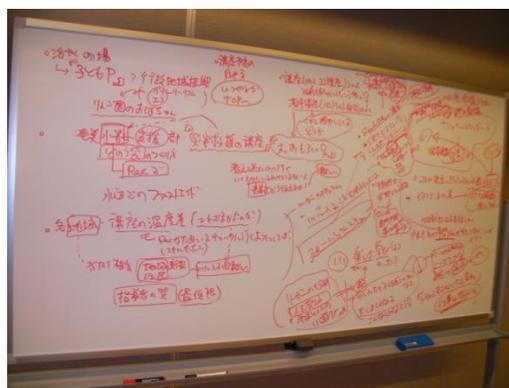
2010年10月28日～10月29日 RAC トレーナー研修会 NPO 法人 川に学ぶ体験活動推進協議会

NPO 法人川に学ぶ体験活動推進協議会(RAC)では、安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センターにて、RAC トレーナーを養成する研修会を行った。今回の研修会を受け、後日行われる CONE トレーナー1 種養成会に参加すると、その後は CONE トレーナー認定会を受講でき、合格すると CONE トレーナーの資格を取得できる仕組みとなっている。講師 2 名、参加者 6 名の方々に、各地からご参加いただいた。

講義内容

最初は、事前提出していただいた課題を参加者各自が発表し、共有化を行うところからプログラムが始まった。続いて、RAC トレーナーが RAC リーダーなどの指導者養成講座を開催するに当たって必要な、指導者養成講座および関連講座の実務について確認。その後は RAC リーダーなど、RAC の今後目指すべき指導者像を考え、指導者育成制度をワークショップ形式で検討したり、指導者養成講座を、学びや気づきの多いものにしていくためのテクニックについて学んだ。

最後は、川での活動を実施・中止する際の判断をするためのガイドラインについて、各自が考察し、研修会を締めくくった。



研修会を終えて

今回の研修会に参加した方々は、全員プロとして、川での自然体験に関する活動へ従事している方ばかりであったこともあり、CONE トレーナー1 種養成会・認定会へ参加するための要件を満たすために、各団体の実際の活動を通じた OJT を関係トレーナーが指導する方式で執り行った。

実務経験が豊富な方が対象で、かつ OJT を行う環境が整っている場合は、今回のような手法もとても有効だと思われる。

2010年12月4日～12月5日 第3回CONE 専門研修会
NPO 法人 自然体験活動推進協議会

「プログラムデザイン～創造的で実践的なワークショップを企画するために～」をテーマに、第3回CONE 専門研修会を開催した。講師には『ワークショップ～偶然をデザインする技術』の編著者で、有限会社プラス・サーキュレーション・ジャパン代表の中西紹一氏を招き、創造的・創発的なワークショップをデザイン・企画するための方法論を学びながら、ワークショップを通じて参加者に満足度の高い学びの機会を提供する手法の習得を目指した。

創発型ワークショップとは

研修では、7名の参加者と意見交換をしながら、創発型ワークショップとは何か、また自然体験活動プログラムを創発型ワークショップのスキルを活用して組み立てるにはどうすれば良いかを考えた。その中では、ワークショップの持つ参加性の高い学びがどのような効果をもたらすのか、企業や大学で行っているワークショップの様々な事例を見ながら検証し、その効用を明らかにした(中西氏は、広告・コミュニケーション戦略開発プランナーとして、様々なCMの企画などに携わっている)。



また、夜にはデジタルツールの活用方法について学習し、Macintosh や Windows で有効なツールの紹介から事例紹介まで、これまで講師が担当した具体例から様々な興味深い示唆を得ることができた。



プログラムデザインへの落とし込み

2日目は、前日の研修を踏まえて、創発型ワークショップのノウハウを活用し、自然体験プログラムのデザインを行った。具体的には、各自で自分が実践したいと思うワークショップについて検討し、それをプログラムデザインに落とし込んでいくとともに、プレゼンテーションおよび質疑応答、および講評を行って理解を深めた。

今回は異業種で活躍されている講師の話であったことから、普段の業務や研修からでは学べない知見を得ることができ、刺激を受けたとの意見が多かった。そのため、今後も同業者のみならず様々な分野で活躍されている方を講師に招いて研修を行うことで、研修内容もより充実したものになれると思われる。

2010年12月18日～12月19日 登録インタープリター2010年事業評価会 NPO法人 やまぼうし自然学校

やまぼうし自然学校では、年末に毎年1年間の活動内容の反省と交流を目的に評価会を実施している。例年は、東京（首都圏登録インタープリター）と長野（長野登録インタープリター）の2会場で、それぞれ別々に実施しているが、今年度は、近隣の長野県小諸市にできた安藤百福センターにて初めて合同で開催し、35名が参加した。



佐藤初雄氏による講演

NPO 法人国際自然大学理事長の佐藤初雄氏を招いて、今後の自然体験活動の動向に関すること、これから自然学校が取り組むべき課題、NPO で活動する上での心構えなどについてご講演いただいた。また、リスクマネジメントに関しては、組織レベルでの安全対策、現場レベルでの安全対策のポイントについてお話を伺い、安全管理マニュアルの作成、スタッフトレーニング、保険内容の把握、下見の大切さや現場で気をつけるポイント、実際に活動する上で注意しなくてはならないことなど、リスクマネジメントの難しさと大切さを改めて学ぶことができた。

事業評価会

登録インタープリターの方々から、事前に提出いただいている今年度の評価シートをもとに、2010年の反省と、2011年に向けて様々なテーマで意見交換を行った。やまぼうし自然学校は今年で10周年を迎えたが、今回初めて開催した合同評価会は、これからの活動と発展に向けて、とても貴重な内容となった。

2011年1月29日～1月30日 CONE トレーナー1種認定会 NPO 法人 自然体験活動推進協議会

平成22年度のCONE トレーナー1種認定会を開催した。講師として、養成会同様、森美文氏（森環境教育事務所）、若林千賀子氏（若林環境教育事務所）、渡辺峰夫氏（日本ネイチャーゲーム協会）の3氏が担当し、16名の参加者に対して、トレーナー1種に必要な資質とスキルを習得しているか、1泊2日の研修の中で検証した。

自然体験活動憲章の理解

認定会では、養成会で示した3つの事前課題に基づき、その習熟度をグループワークで確認した。

※グループは、団体や地域、年齢、性別に偏りが出ないように、4人ずつ4つに分けた。また、講師3名および事務局長が各グループのチューターとなって入り、課題に対する理解度を確認した。



まず、当日の課題として各自でアイスブレイクの技を披露し、活動に対する実践経験を確認



した。そして第1の課題、自然体験活動憲章の5項目について、伝えたいこと、思い、考えなどを自分の言葉で説明し(1項目に対して1人5分)、それに対して参加者同士で質疑応答を行った。

続いて第2の課題、指導者養成事業のカリキュラムについて、実経験をもとに(認定会までに養成事業の全カリキュラムに関わることを義務づけている)、活動内容や課題・成果などを各自説明し、実施において問題となった点や対策などについて議論を行った。

明し、実施において問題となった点や対策などについて議論を行った。

トレーナーとしての責務

2日目は、第3の課題、指導者の活用についての具体的な活動報告を各自行った後、養成した指導者の活躍の場をいかに作っていくか、トレーナーの責務として行うべきことは何か、検討を行った。

そして最後に、これまでの内容を踏まえた試験を実施し、トレーナーとしてふさわしい能力を身につけているかを確認し、研修を締めくくった(合否は指導者委員会で検討した後、理事会で承認される)。

第1回自然体験入門講座（2010年8月21日）

安藤百福センター初の主催講座である、第1回自然体験入門講座を開催した。安藤百福センター職員の小林政明が、「身近な自然を知る、発見する方法」というテーマで講義を行い、およそ140名の方々にご参加いただいた。小諸市の身近なフィールドである、浅間山とその山麓の話を中心に、山での安全管理や、生息する高山植物、動物などの解説をおこなった。



安全管理

山登りで最も重要なのは、自分の身を守るための安全管理方法を身につけること。山は基本的に自己責任で登る。まず、服装などの装備は、値段が高くて素材のよいものを準備することが大切。山では、天候が急変して、急に雨に打たれることがある。また、標高が高くなると気温が下がるので、かいた汗が冷えてしまう。そのままにしておくと、体調を壊してしまい、最悪事故につながることもある。多少、値段は高いかもしれないが、体温調整をきちんとするためにも防水透湿性、保温性などが高い素材を選び、装備を整える。

携帯食も持参すること。登山は、かなり体力を消耗するので、常に水分やエネルギーの補給を心がけ、例えば飴やチョコレートなどの携帯しやすくエネルギーを補給しやすいものをおすすめ。もしもの時の非常食にもなる。どんなに低い山でも甘く見ずに、装備や食糧を整え、しっかりとした登山計画を立てることで安全で楽しい山登りが可能となる。

浅間連峰の自然

浅間山は、現在も活動を続けている日本でも有数の活火山。独特の火山地形や貴重な動植物がたくさん存在している。浅間連峰には、およそ1,150種類の植物があり、中には、ここでしか見られない特別保護植物もある。高山植物の花が咲く時期は、4月下旬頃から9月の下旬頃までで、早い開花は「ガンコウラン」や「セリバオオレン」、遅い開花は「オヤマリンドウ」や「イワインチン」など。中でも6月下旬から7月上旬にかけて、高山植物の女王と呼ばれる「コマクサ」の花が見頃になる。

最後に、「今日の講座では、写真を使っていろいろな自然を紹介しましたが、まずは、自然の中に足を運んでみてください。自然が身近にありすぎて、なかなか行く気にならないかもし

れませんが、実際に行くことで、写真では分からない、いろいろな顔をした自然を発見することができると思います」という話で、講義が締めくくられた。

アンケートまとめ

受講者からの反応や意見：

- ・初心者向けで理解しやすく、身近にたくさんの植物が生きていることにびっくりしました。
- ・登山に必要な知識と本物の登山用具を見せて頂いた。身近な内容で分かりやすい。今回の講座を通して自然の素晴らしさに興味を持つようになった。
- ・花に興味があるから楽しかった。分かりやすく良かった。
- ・写真の説明が良かった。植物の写真が良かった。またこのような講座があればよいと思う。短い時間でしたが充実した内容でした。
- ・その他として、「わかりやすい」「山を登ってみたいくなりました」「基礎知識として役立つ内容でした」「山への憧れが具体になりました」「初心者にもわかりやすい内容で大変有意義でした」「興味深い内容。大変良い講座でした」「入門としての装備などとても参考になりました」「今後は山での実技をやってほしい」などの意見がありました。

第1回市民公開講座（2010年8月28日）

日本アウトドアジャーナリスト協会と安藤百福センターの共催事業として、第1回市民公開講座を開催した。俳優で舞踏家の「麿 赤児（まる あかじ）」氏をお招きし、「表現について～舞踏の視点から～」というテーマで、お話をいただいた。当日は、小諸市内外から約120名の方々にご参加いただいた。



講演に先立ち、今年8月、白馬村で行われた野外講演「星のいとなみ」のDVDを上映した。闇夜の中で、全身に金粉や白塗りをほどこした、総勢40名ほどの方々が舞い踊る映像は神秘的で、しばらくの間、参加者の方々は映像に釘付けになった。



麿赤児氏は、舞踏の表現には人類が合理的な日常生活を積み重ねる中で忘れてしまった原始的な名も無き動作を掘り起こす事によって、我々が天と地の間に在るのだという事を実感できる。天と地の間、人間も自然の中の一部であることをゆっくりと実感できる。これは自然体験活動の感動と同じかもしれない。そして、ご自身の師との出会いの経験から、「技術だけではなく、人々を導く事のできる指導者を育てて下さい」と、これからの安藤百福センターに対する期待を述べられた。

周辺住民の方々をご招待した見学会（2010年9月25日）

安藤百福センター周辺にお住まいの、大久保地区、氷地区、鶯久保地区の住民を招き、説明会および、見学会を行った。地域住民にとってこの時期は、稲の収穫で忙しい時期ではあるが、約70名の方々にご参加いただいた。



前半は、安藤財団荒金事務局次長から、安藤財団の設立経緯や活動について紹介。創設者の「食とスポーツは健康を支える両輪である」という思いを理念として、安藤スポーツ・食文化振興財団を設立。以来、子どもたちの健全な育成のために、陸上競技活動、自然体験活動、食文化活動、インスタントラーメン発明記念館の運営を4つの柱として公益活動に取り組んできたことなどを説明した。

また、安藤百福センターの紹介DVD上映を交え、創設者の生誕百周年事業であること、日本で不足している自然体験活動の指導者を養成するために設立したことを説明。日本初の専門施設であること、人材育成により、自然体験活動の普及と活性化に取り組むことなど、安藤百福センターの設立趣旨や事業内容について解説した。

後半は、施設内の見学を行い、皆さんは興味津々に館内を巡った。その後、天気にも恵まれていたので、屋外にある遊歩道を散策。子ども達が楽しそうに、ブランコをこいでいた。

センターが竣工して4ヶ月、地域との関わりを大切にしながら今後の事業を進めていきたい。



環境公開講座① (2010年10月18日)

環境公開講座の初日は、芸能界きってのアウトドア派と呼ばれている、清水国明氏をお招きして、「自然の中でヒトになる」というテーマで講演をおこなった。



アウトドアのプロ

自分はアウトドアのプロと呼ばれているが、人間はみな生まれた時からプロとしての素質を持っている。自然の中での強い生存意識を持って生まれたにも関わらず甘い環境の中で生活しているため、強い生存意識を失ってしまっている。その意識を取り戻したら、誰でもプロになれるはず。実際に、意識を取り戻すことで、見違えるほどたくましくなる子がたくさんいる。

現代の子供たち

ある時、子どもたちを自然の中へ連れて行くと、驚いたことに、鳥の鳴き声が聞こえない子どもが大勢いた。これは、本当に聞こえないのではなく、ゲームなどの機械音に囲まれた生活を送っているため、鳥の鳴き声ではなく、単なる雑音として聞こえたようだ。しかし、自然の音を聞こうとする意識が無いから、聞こえないだけなので、森の中で時間を取り、じっくりと耳を澄まして意識させると次第に鳥の鳴き声、水が流れる音、風の音も聞こえるようになる。また、野外で調理をする時に、マッチをうまく使えない子どもが多いが、何度も挑戦して成功することで、人間が本来持っている強い生存意識を引き出すことができる。

大人の役割

便利で快適に生活している、現代の子ども達に、人間として生きていくための、一番最低限のスイッチを入れることが、我々大人のミッションだ。

自然から遠ざかり、人としてあってはならないような不自然な出来事が、日常茶飯事に起きている。暑くもない、寒くもない、虫もいない、痛くもない、臭くもない、便利で快適な環境は幸せかもしれないが、それは自然ではなく、不自然なことだ。

子どもたちに、人間として最低限の、生きていくための力を目覚めさせるためには、大自然の刺激を入れさせることが必要であり、大人たちは、子ども達に、自然の中で元気にハツラツとしている背中を見せる義務がある。大人に向かって成長する力が、生きる力を育むのである。

環境公開講座② (2010年10月19日)

日本における環境哲学の第一人者、加藤尚武氏が「環境倫理とは何か」というテーマで講演をおこない、エネルギー問題、生物種の減少・絶滅問題、次世代への責任などの環境問題に対する基本的な考え方について解説した。



地球の現状

われわれ大量消費の現代文明は、近い将来、どのような未来が待っているのだろうか。それは、化石燃料の枯渇や地球温暖化を引き起こし、生物種の減少・絶滅への道へ向かっているだろう。地球を持続させていくためには、何が必要であり、何をやらなければならないのか、考える必要がある。地球の資源は限られているので人類が今のまま生活していくと、40年後には石油が枯渇してしまうが、代わりとなる資源がまだ登場していない。また、人間だけでなく、自然界の生物にも生きる権利があるにも関わらず、地球温暖化により生物種の絶滅が加速しているため次世代が見ることができない生物がたくさんいる。

現代世代の責任

現在に生きているわれわれの世代は、未来の世代に資源を残し、つないでいく責任がある。現在の世代が資源を使い切ると、未来の世代はどうなるのか。例えば、今の私は借金だらけ。評判が悪く、誰もお金を貸してくれない。その時、私は未来の孫の名前を使って、銀行からお金をたくさん借りる。自分は楽をして、贅沢な生活をするけれども、将来の孫はどうなるのだろうか。石油は使えば無くなる、生き物も乱獲すれば無くなるということを踏まえた、人間の生活設計がなければならない。

最後に

人間だけでなく、全ての生物に生存権を認め、人間が生物を守る義務がある。また、あらゆる生物が絶滅しないように、人間が未来の世代が生きていくための責任を持つ。そして、有限な地球資源を守るために、人間の利用速度が、資源の再生速度を超えるものであってはならない。どれも必要なことだと分かっているが、現実には軌道にのっていない。これを解決するのが環境倫理という考え方である。

環境公開講座③ (2010年10月20日)

環境公開講座最終日は、医師であり登山家でもある今井通子氏が、「地球環境保全と健康」と題して講演を行い、森林の持つ重要な役割についてご説明いただいた。



森林と地球環境保全

森林は、地球環境の保全にとっても役立っている。まず、地球温暖化の原因である二酸化炭素を吸収して気候を緩和する役割。次に大気を浄化して空気を清浄する役割。そして雨を蓄え、砂漠化を防止する役割。他にも、大雨や洪水による被害を防ぐ、生態系を維持するなど地球環境にとって様々な役割を果たしている。

森林と健康

また、森林は人間の健康面にも役立っている。現代生活から発生するストレスが、高血圧やうつ病、アルコール依存症などの生活習慣病を引き起こす原因の一つとされているが、森林での活動は、ストレスを軽減し、生活習慣病を改善・予防する効果がある。過去に、医療・福祉機関等へのアンケートを行った結果、森林空間の利用に対しての期待が高かった。

森林は二酸化炭素を吸収し、地球温暖化を防止、生物にとって有害な物質も吸収してくれる働きがある。また、森林の中に行くことで、健康維持、活性化、ストレスの解消、ガンなどの病気を予防する効果がある。森林保護活動は、地球環境を守り、人間の健康を守るという二つの面があることから、とても重要な活動である。

森林セラピー体験

講演前に志賀高原の森林で、参加者10名ほどによる、森林セラピー体験を行った。最初に全員のストレス値を計り、森林の中へ。地元ガイドの案内により、森の中を散策。体操や食事も含めて、一通りのプログラムが終了。最後にもう一度、ストレス値を計測。参加者のほとんどのストレス値が下がったことから、森林の健康に対する効果というものを実感できた。

第2回自然体験入門講座 (2010年11月14日)

「雪山歩き」をテーマとして、第2回自然体験入門講座を開催した。NPO 法人蓼科・八ヶ岳国際自然学校理事長の米川正利氏をお招きし、山岳ガイド歴40年の様々な経験から、雪山の楽しさや安全管理についてお話をいただいた。



雪山の自然体験活動

冬の八ヶ岳というフィールドを例として挙げると、人気のあるスキーやスノーボード以外にも、雪があればどこでも歩けるスノーシューイング体験や歩きながらいろいろな動物たちの足跡を発見して、どんな動物が歩いたか想像することもできる。カモシカ、ウサギ、タヌキ、リスなどの足跡を見て、この動物は、どこから来て、どこへ向かったのか？ここで何をしていたのか？こういったことを想像できるのも、雪山ならではの楽しみ方だ。

雪山の安全管理

楽しいことの反面、危険もつきもの。雪崩が起きたり、吹雪や濃霧などで、道に迷い遭難するなどの危険があるため、安全管理についての準備は重要である。もし遭難したら、救助の連絡をして、なるべくその場を動かないこと。安易に動くと、さらに迷い込んでしまい、救援隊が探し出すことが困難になるので、到着するまで待つ。また、仲間が急病や負傷をして、行動不能になってしまった場合も、助ける前に、まずは自分の身の安全を確認することも大切だ。

初心者の心得

初心者が雪山を歩くために最低限必要なことは、まず、地図が読めるようになること。雪で登山ルートが分かりにくいので、夏山よりもはるかに遭難の可能性が高くなる。次に、雪山ならではの様々な危険を理解すること。自分の技能、経験を考慮して、場合によっては引き返すことも考える。そして最後に、雪山を楽しむこと。雪山には、様々な危険があるが、雪が敷きつめられた白銀の世界は、日常ではなかなか味わえない感動がある。初心者は、最低限これだけのこと理解し、安全に楽しく、雪山を歩いてもらいたい。

第3回自然体験入門講座 (2011年2月5日)

「冬でも楽しめる自然体験」というテーマで、今年度最後の自然体験入門講座が開催された。講師は、雪山での活動経験が豊富な、安藤百福センター職員の小林政明が務めた。

冬のアクティビティと言えば、スキーやスノーボードのイメージが強いかもしれないが、特別な技術を必要とせずに遊べる、スノーシューイングの話を中心に、雪山の楽しみ方を解説した。



スノーシューイングとは

スノーシューとは西洋かんじきのことで、スノーシューを履いて、雪の上を歩くことを、スノーシューイングという。スノーシューは、雪があれば、どこでも歩けるように作られているので、普段は歩けない道を散策することができるのも、魅力の一つだ。

ただし、歩く際には注意しなければならないこともある。例えば、雪庇(せっぴ)と呼ばれる雪が張り出しているだけのところを雪道と誤って歩くと、崩れて滑落する可能性がある。他にも、雪の上は、とても体力を消費することや、自由に歩き回って、道に迷ってしまう危険もあるので、夏山以上に、自分の体力や経験と相談しながら、コースを考えて登って欲しい。

雪山の楽しみ方

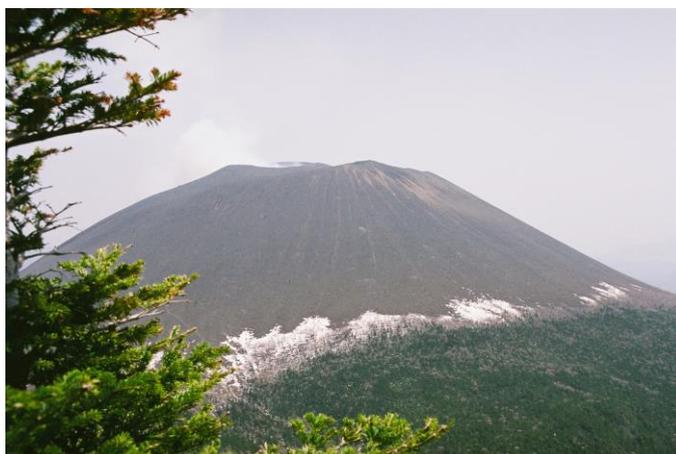
スノーシューを履いて歩くだけが雪山の楽しみ方ではない。フカフカの雪が積もっているところでは、木に登って雪の中に飛び込んでみたり、下り坂ではお尻で滑ってみたりと、楽しみ方はアイデア次第である。

また、風景がとても素晴らしい。雪に太陽が反射して、キラキラと輝いている光景。樹木についた水分が凍った「樹氷」の姿。山頂から見える、真っ白な銀世界の眺めは、言葉で表すのが難しいほど美しい。

他にも、かわいい植物の冬芽を見つける、足跡から動物を想像するなど、冬でも十分に自然体験活動ができる。ぜひ、冬の自然も楽しんでいただきたい。

あとがき

安藤百福センターの研究紀要第一号がようやく出版の運びとなりました。3月11日の大地震で様々な予定が変更になり、5月には出版する予定が大幅に遅れてしまいました。しかしながら、わが国初の民間による自然体験活動上級指導者養成センターの紀要としての内容は充実したものになったと自負しています。◆特集1のアウトドアフォーラムとアメリカのグランド・ティートーン・サイエンス・スクールのジャック・シェア校長を招いた国際フォーラムは、日本のアウトドアの現状を整理し、今後の方向性を示すことができました。特集3の新たな指導者制度の展望とともに日本における今後の自然体験活動に大きな影響を及ぼす内容となったと思います。◆特集2の環境思想シンポジウムは自然体験活動や環境教育の基盤としての環境思想の重要性を一般に訴え、再認識していただく良い機会となりました。地球環境問題の改善に向けて、また環境教育の普及に向けて今後、環境思想の研究は欠かせないものとなるでしょう。その先鞭をつけたシンポジウムになったと思います。安藤百福センターが日本の環境思想研究の一つの拠点となることができれば幸いです。◆第一号では種々の理由で研究論文を掲載することができませんでしたが、第二号では研究論文を広く募集する予定にしており、自然体験活動及び環境思想の研究紀要としてよりしっかりしたものに仕上げたいと思っています。◆第一号の表紙にはヒマラヤ第五の高峰マカルーの写真をあしらいました。写真は長野県・白馬村の姫川源流で、ペンション・りこぼを経営する室井和彦さんに提供していただきました。マカルーはフランス隊が初登頂し、全員登頂という偉業を成し遂げました。幸福な山と言われ、紀要第一号の表紙にふさわしいと考え採用しました。今後、神々の座といわれるヒマラヤの8000m峰14座に順次、表紙を飾っていただこうと思っています。(S)



春の浅間山

人と自然

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター紀要

第1号

発行日：2011年8月30日

発行人：安藤 宏基

編集人：岡島 成行

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

〒384-0071 長野県小諸市大久保 1100

Tel : 0267-24-0825

Fax : 0267-24-0918

URL : <http://momofukucenter.jp>

E-Mail : info@momofukucenter.jp